六　軍記

平家物語
祇園精舎
木曾の最期

単元設定のねらい

平安時代後期以降の武士の台頭という世相の変化に伴って、文学の世界でも新たなジャンルが生まれた。『将門記』や『陸奥話記』を先駆とし、『保元物語』『平治物語』を経て成立した『平家物語』に代表される軍記物語がそれである。軍記物語は、合戦を中心とするできごとの忠実な描写を目的とはしておらず、そのできごとに関わった人々の姿を「物語」として印象的に伝えることに主眼がおかれている。中でも『平家物語』は、年代記的な要素、物語的な要素などを中心に、複雑多様な内容を融合して独自のスタイルを築き上げている重層的な作品である。合戦の描写では、平家一門の滅亡を描くという内容ゆえに、華々しく活躍した者よりもむしろ敗者に多く目を向けている。戦いの場、つまり生死の境に直面した人々を描きながら、人はどう生きるのか、人間とは何かを考えさせる作品である。

『平家物語』は、琵琶法師の語りを「聞く物語」として、またその一方で「読む物語」として、広く享受されつつ増補が重ねられ、階層を問わず親しまれてきた。後代への影響は文学作品の領域にとどまらず、能や歌舞伎といった芸能の世界や、絵巻や屏風絵といった美術の方面などにまで及んでいる。そのような『平家物語』の中から、ここでは「祇園精舎」（巻一）、「木曾の最期」（巻九）の二章段を取りあげた。「祇園精舎」は、『平家物語』の冒頭にある序章とでもいうべき章段である。ここに示されている「諸行無常」「盛者必衰」の概念は、作品全体の基調となっている。繰り返し音読することで、独特な和漢混淆文のリズムや対句表現など、文字だけではなく音で享受されていた『平家物語』の一面を実感させたい。「木曾の最期」は、『平家物語』の中でも一、二を争う名場面として、多くの人の心を動かしてきた。人物の心情を読み取るとともに、装束描写、名のりなど、合戦場面における描写法の特性を学ばせたい。また、中世武士の生きざま、死にざまを通して、既習の『徒然草』とも重なる無常観に基づく世界観を読み取らせたい。

単元の主な学習目標

・和漢混淆文、対句、擬声語・擬態語、転調などの特徴を音読を通して体感し、語り物としての『平家物語』の魅力を知る。
・合戦場面に描かれる生死の境に直面した人々の姿から、生きるとは何か、人間とは何かについて考える。
・軍記物語に多く見られる音便の用法を習得し、さらに敬語法の基礎を学ぶ。

軍記

平家物語

時は平安時代末、平清盛を中心とした平家一門は、貴族社会において徐々に権力を得て、栄耀栄華を極めた。しかし、反平家を掲げて蜂起した源氏一門の源（木曾）義仲に都を追い落とされ、その後一時は勢力を盛り返すものの、間もなくして源義経らによって西国を敗走、最後は壇の浦に沈む。そうした平家一門の栄枯盛衰を描いた物語である。

文学のジャンルとしては、軍記物語に含まれる。軍記物語には他に、『保元物語』『平治物語』『太平記』などがあるが、これらの作品は、単に合戦を歴史に忠実に描くことを目的とはしておらず、あくまでも「物語」としてどう伝えるのか、というところを追求している。中でも『平家物語』は、多様な要素が盛り込まれた重層的な作品であり、年代記的な要素、物語的な要素などを中心に複雑多様な内容を融合して、独自のスタイルを築き上げている。また、合戦の描写とはいっても、華々しく活躍した者よりもむしろ、敗者をクローズアップすることの方が多い。戦いの場、つまり生死の境に直面した人々を描きながら、人はどう生きるのか、人間とは何かを追求している作品である。

本単元では、「祇園精舎」（巻一）と「木曾の最期」（巻九）の二章段を取りあげる。「祇園精舎」は、『平家物語』の冒頭にあって、物語の序章とでもいうべき章段である。「木曾の最期」は、源義仲が同族である源頼朝の派遣した軍勢によって滅ぼされる話で、「平家一門の盛衰の物語」という当該作品の主たるテーマからは若干脱線した感があるのは否めない。しかし、『平家物語』の中でも一、二を争う名場面とし

教材のねらい

◉学習目標

・音読を通して、語り物としての『平家物語』の魅力を知る。和漢混淆文、対句、擬声語・擬態語、数詞の駆使、転調などの特徴を学び、言語感覚を豊かにする。
・装束描写、名のりなど、いくさ語りの特徴を学び、軍記物語の世界観を理解する。
・文法的事項については、軍記物語の特徴ともいえる音便の用法を習得し、さらに敬語法の基礎を学ぶ。
・合戦場面に描かれる生死の境に直面した人々の姿から、生きるとは何か、ひいては人間とは何かについて考える。
・『平家物語』が描く時代や当該テクストの文学史的意義についての理解を深める。既習の『徒然草』とも併せ、無常観についての理解を深める。

◉学習指導のポイント

中世の文学作品を代表する『平家物語』の中から二章段を取りあげる。『平家物語』は、長く人々に愛されてきた作品の一つである。琵琶法師の語りを「聞く物語」として、またその一方で「読む物語」として、広く享受されつつ増補が重ねられ、階層を問わず親しまれた。後代への影響は文学作品の領域にとどまらず、能や歌舞伎といった芸能の世界や、絵巻や屏風絵といった美術の方面などにまで及んでいる。

て、多くの人の心に焼き付いているのがこの場面である。戦いの渦の中で翻弄されるのは平家一門だけではないのであって、この時代を生きた人全てがあらがえない時代の波に呑まれていく。義仲を扱った本章段はそのことを如実に物語っているといえよう。

高等学校の古典といえば、必然的に中古の作品を扱うことが多くなる。しかし、中世には戦いとともにあった時代ゆえの、中古とは異なる世界観が存在しており、そこにもぜひとも触れておきたい。中でも無常観という概念は看過することはできないだろう。また物語を享受する層も、中古の時代に比して、幅広くなっていく。その広がりは、先述の概念と相まって物語の性格を変えていったであろうし、それはこの時代に仏教説話が多く編まれたこととも無関係な動きではない。そういった周縁の問題まで広げ、さらには中古の文学との相対化を試みることが望ましい。

「祇園精舎」では、まず声に出して読むことで、独特な和漢混淆文のリズムや対句表現など、文字だけではなく音で享受されていた『平家物語』の一面を理解させたい。その中で、仏教故事、「おごれる人」と「猛き者」、「遠く異朝」と「近く本朝」という、対句で成り立っている構造、そしてそこから「ま近くは」と、本物語の中心人物である平清盛の名が挙がり、本編が開始される展開をおさえたい。ここに登場する「諸行無常」、「盛者必衰」の概念は、作品全体に通底するものであり、もちろん「木曾の最期」にもその意識を読み取ることができる。そういった次の教材の読みへと結び付けられるよう、この章段を解釈したいところである。

「木曾の最期」では、装束描写、名のりなど軍記物語の合戦場面における描写法の特性を学びたい。また「乳母子」や「よき敵」といった武士ならではの意識に触れ、中世武士の生きざま、死にざまを通じて、乱世であるがゆえの世界観を読み取らせたい。そして、文法的事項としては、音便や敬語の確認が必要となる。特に敬語に関しては、次年度以降の学習の基礎作りという目的はもちろんのことながら、単なる文法事項の説明にとどまるのではなく、敬語にこめられた語り手の思いを考えさせるところまで踏み込んでいきたい。それも中世武士の本質を理解する手助けとなるのではないだろうか。またもし余裕があれば、巻七「倶梨迦羅落」での奮闘ぶり、巻八「猫間」での都人の嘲笑の対象となる田舎育ちゆえの無骨さ、同巻「鼓判官」での周囲の状況をわきまえない稚気など、他の章段で多角的に描かれる義仲の姿を紹介し、作品全体を通して見た時に浮かび上がってくる義仲像に迫ってみるのもよいだろう。

学習指導の展開と評価

◉学習指導案例（配当時間五時間の場合）

時間	目標		学習活動と指導内容	指導上の留意点
第１時限	❶中学時代の学習を手がかりとして、『平家物語』への関心を喚起する。 ❷『平家物語』独特のリズム、音調を味わう。 ❸表現の特性を理解する。 ❹序としてのこの章段の機能を考える。	導入	1　『平家物語』について、知っていることを発表し、学習の準備をする。	1　中学校で学んだことなどを、振り返らせる。
		展開	1　「祇園精舎」を朗読する。	1　読み聞かせてもいいし、群読を試してもよいだろう。
			1　「祇園精舎の鐘」などの仏教故事や先例について理解する。	1　各自辞書などで調べさせ、それぞれのたとえの意味を確認させる。
			1　対句表現について理解し、章段全体の枠組みを捉えさせる。 2　4の対句表現を手がかりに、全体の枠組みを捉えさせる。	1　抜き出したり、傍線を引いたりして確認させる。 2　全体の構造を図式化させてみてもよいだろう。
		まとめ	3　冒頭にこの章段が置かれた意味を考える。	3　「諸行無常」や「盛者必衰」が物語の根幹をなすものであることを理解させる。
第２時限	❶『平家物語』全体における、「木曾の最期」の位置づけを試みる。	導入	1　リード文を手がかりに、この章段までの流れをおさえる。	1　平家一門の盛衰の物語といいながら、ここで命を落とすのは源氏の人間である。物語本筋から若干ずれる感のある本章段のあり方を理解させておく必要がある。

	第２時限	第３時限
	❷音便について理解する。 ❸当該章段の大意を把握する。	❶合戦描写の特性を学ぶ。 ❷登場人物の心理を理解し、当時の武士像を考える。 ❸敬語法について学習する。
展開１	1　全文を音読する。 1　1　当該章段の大意を把握する。 2　主な登場人物について確認する。	1　「木曾の最期」の第一段を読み、装束描写から義仲の人物像をイメージする。 1　❶-1も含め、合戦の作法を理解する。 1　定型表現、数字を用いた集団戦の描写法の効果を考える。 2　義仲と巴の別れから、義仲の心情を推し量る。 3　巴の人物像について考える。 4　敬語の用法を理解する。
	1　音便やリズムなどに注意しながら読んでいく。 1　各段落に小見出しをつけさせるのもよいだろう。 2　義仲、兼平、巴の関係性について簡単に確認する（具体的には該当箇所を読む時に行う）。	1　挿絵や便覧、絵巻などの視覚的情報を提示して、イメージを具体的にする。 現代の我々にとって身近ではない用語も多いので、その読みや意味をきちんとおさえる。 1　❶-1の視覚的な情報にあわせ、名のりという聴覚的な情報から、義仲像が具体的になる。そういった装束描写、名のりの機能を理解させる。 1　「縦様・横様……」（285・3）といった定型表現、数の変化によって、集団の動きを描く叙述法をおさえる。 ❶-1、❷-1、❸-1を通じて「語り物」としての性格を読み取らせる。 2　二人のやりとりをおさえつつ、毅然とした義仲の姿、その背後にある巴への愛情を読み取らせる。 次段落の兼平との別れを考える伏線として位置付けておきたい。 3　巴の活躍も義仲への愛情ゆえであることを理解させる。時間的に余裕があれば、巴の後日譚などを紹介するのもよいだろう。 4　巴と義仲のやりとりから敬語法の基礎を学ぶ。このあとも継続的に敬語については注意を促す。

	第４時限	第５時限
	❶登場人物のやりとりを整理し、そこにこめられた思いを読み取る。 ❷敬語に対する理解を深める。	❶兼平、義仲の行動を整理し、そこにこめられた思いを読み取る。 ❷結びの一文の効果を考える。
展開2	1　「木曾の最期」の第二段を読み、乳母子という存在について学ぶ。 1　二人のやりとりを整理し、両者の見解の違いを把握する。 2　兼平の言葉の変化に注目させる。 3　敬語の学習を実践的に行う。	
展開3		1　「木曾の最期」の第三段を読み、兼平の行動を整理する。 1　兼平と義仲の対照的な描写について理解する。
	1　乳母子についての理解を深め、それを二人の会話の読解に反映させる。 1　義仲と兼平が何を大事にしているのか、1をふまえつつ、二人の対照的な考え方を読み取らせる。 義仲の、巴への発言と兼平への発言とで矛盾が生じていることにも注目したい。 2　「御身もいまだ疲れさせ給はず。」（286・12）、「御身は疲れさせ給ひて候ふ。」（287・9）という真逆の言葉を言うに至った兼平の心情をくみ取らせる。 1～3を通じて、当時の武士の在り方、理想像について理解を深める。 3　敬語動詞について逐一確認する。できるだけ実践を積ませる。	1　名のりや奮戦の表現から、再度合戦場面の定型表現を確認する。 1　武士としてあるべき姿を追求する兼平のことばかり思う義仲の弱さとの対比を読み取らせる。 彼らがそれぞれ何を重視しているのかについても考える。

第５時限		
❸『平家物語』の主題について考える。	1　最後の一文がもつ意味について考える。	1　この一文がもつ意味、効果について考えさせる。
まとめ	2　『平家物語』の主題について考える。	2「祇園精舎」との共通性を読み取らせ、物語全体の志向性を確認する。 各自に感想を発表させたり、文章化させたりするのもよいだろう。

◉アクティブ・ラーニングのために

《ねらい》

・心情、表現、音の響きなど、多角的に読み味わう力を養う。
・投票形式で楽しみつつ、主体的に文章を読む姿勢を育てる。

《学習課題と実践方法》

◆課題

心に残った描写と台詞を二つずつ挙げ、そのよさについて話し合ってみよう。（「木曾の最期」の「学習の手引き」二・三の発展的授業）

◆学習活動と指導上の留意点

1　各自で心に残った描写と台詞を二つずつ挙げ、そのよさについてまとめる	①各自でノートに記入する。 **（指導上の留意点）**心情、表現、音の響きなど、多角的に考えさせる。
2　グループ内で発表し、ワークシートにまとめる	①得票数（同数の場合は話し合い）によって順位をつけ、五つずつ選ぶ。 ②それらのよさについて簡潔にまとめる。 **（指導上の留意点）**話し合いの中で出てきた意見も書き加えてよい。

3　グループごとに発表する

（指導上の留意点） 挙げられた描写と台詞を順位とともに板書してゆく。心情に関わる部分についても簡潔に板書しておく。

4　振り返り

①一位を五点、五位を一点として、クラス順位を決定する。

（指導上の留意点） 挙げられた描写や台詞から、武士の生きざまや無常観といった「平家物語」の主題に関わる部分を確認する。ワークシートを回収し、クラス順位とそれらのよさについてまとめたプリントを配布してもよい。

◆ワークシート『平家物語』補

年　組　番　氏名

＊心に残った描写と台詞を抜き出してみよう（心情、表現、音の響きなどの観点から）。

	心に残った描写	理由
①		
②		
③		

⑤	④	③	②	①	心に残った台詞	⑤	④
					理由		

◉評価規準例

評価の観点	単元の目標	具体的な評価規準	評価方法
関心・意欲・態度	朗読を通して文体を味わい、内容をふまえて人間の生き方についての考えを深めようとする。	朗読を通して文体を味わい、内容をふまえて人間の生き方についての考えを深めようとしている。	行動の観察
読む能力	朗読を通して文体を味わい、内容をふまえて人間の生き方についての考えを深める。	朗読を通して文体を味わい、内容をふまえて人間の生き方についての考えを深めている。	行動の分析 記述の確認
知識・理解	敬語の基本について理解する。	敬語の基本について理解している。	記述の点検

教材の研究

◉作品

平家物語（へいけものがたり）

①書名

一二四〇（延応二）年七月十一日付『兵範記』紙背文書に「治承物語六巻〈号平家〉此間書写候也」とあり、また一二五九（正元元）年九月以前の一月十三日付「深賢書状」に「平家物語合八帖〈本六帖、後二帖〉献借候」と見える。これらの叙述によれば、もともとは『保元物語』『平治物語』『承久記』と同様に、合戦の起きた元号を用いて『治承物語』と呼ばれていたものが、のちに『平家物語』という名称を用いられるようになり、定着していったと考えられる。もっとも、『兵範記』紙背文書にいう、「治承物語」「平家」が現存の『平家物語』と同一のものであるかは定かではなく、「深賢書状」に関しても、現存のテクストとは巻の数が異なっており、これが現存のテクストを示すのかも判じがたいところではある。

②成立

①に掲げた文献の叙述に拠るならば、一二三〇年頃に作り出された物語が一二五〇年代には「平家物語」として定着するに至ったということになる。この一二三〇年前後の時代には『保元物語』『平治物語』『承久記』が次々と誕生しているが、これは、源頼朝没（一一九九年）後、承久の乱（一二二一年）までの混沌とした世が続いていたのが治まってから三浦一族が追討される宝治合戦（一二四七年）が起きるまでの、大きな事件もない、世が安定していた時期にあたり、そういった時期ゆえに過去を振り返る軍記作品が相次いで作られたという見解もある。

しかしこれはあくまでも『平家物語』の原形が作られた時期であって、数多く存在する諸本個々の成立時期は、当然異なってくる。本教材で採録した覚一本（かくいちぼん）に関しては、一三七一年、琵琶法師覚一が弟子に伝えるために本文を整え、完成させたといわれている。すなわち、原形成立時から一世紀以上あとの成立となる。

③内容

『平家物語』は、その名の通り、平清盛を中心とする平家一門の栄枯盛衰を描いた物語である。ただし、平家の栄華を手放しで描くのは巻一のみであり、物語の大部分は、平家の滅びゆくさまに焦点を当てる。平清盛の父忠盛が得長寿院造進の功により一一三一（天承元）年に鳥羽院から昇殿を許される記事から、清盛の曾孫六代が一一九九（建久一〇）年に処刑され、平家の嫡流の血統が絶たれる記事までの、五世代約七十年にわたる壮大な物語を、十二巻約百九十章段に描いたものである。これほど長大な物語であるため全巻を通じた主人公はいない。以下のように、およそ三部に分けてみるとわかりやすい。

部	巻	中心の人物	内容
一	一〜五	平清盛	平家の全盛とその反動を描く。
二	六〜八	源義仲	平家追討のために挙兵、やがて平家を都から追い落とす。その後の行動は批判的となり、源義経によって討伐される。
三	九〜十二	源義経	義仲を討ち、さらに西国に平家を追う。次第に平家を追いつめ、遂に壇の浦に沈める。

④表現上の特色

軍記物語の文体は和漢混淆文といわれ、例えば合戦場面では力強い調子の漢文体、愛する者同士の別れの場面では流麗な七五調の和文体、といったように、場面ごとに文体を使い分けている。さらには、対句や擬声語・擬態語、口語を多用しており、それが先の文体と相まって、物語全体のリズム、バランスのよさを巧みに生み出していく。和文も漢文も王朝貴族社会から存在するものではあるが、それが渾然一体となった新たな表現世界を確立したのである。こういった表現が成立する背景に「語り」という行為があったことは間違いない。

⑤文学史的位置

軍記物語の代表的作品である。軍記物語とは、歴史上の合戦を題材としてそれを物語化したものである。平安時代にもすでに『将門記』『陸奥話記』などが作成されていたが、成立時期や文体などの点から、「初期軍記」として以降の軍記作品とは区別されており、中心をなす作品といえば、やはり一二三〇年前後から十年ほどの間に相次いで生まれた『保元物語』『平治物語』『平家物語』『承久記』、そして十四世紀半ば頃に成立した『太平記』ということになる。その他にも、人物伝的な性格を有する『曾我物語』『義経記』や、戦乱の顚末を記すことに主眼を置く『明徳記』『応永記』『応仁記』などが続いて登場するが、これら数多くの作品群の中でも『平家物語』の評価は極めて高い。それまでの貴族の世とは異なる武士の世を描いた作品として、中世という時代を理解するには欠かせない書である。また読み物としてだけではなく、琵琶法師が語る「平曲」という形を成立させ、享受者層を拡大したその功績も大きい。

⑥周辺作品との関連

同時代に成立する作品には、『平家物語』と同じテーマを扱っているものが見られる。例えば、建礼門院右京大夫の『建礼門院右京大夫集』では平家の都落ちや、彼女の恋人、平資盛の戦死に対する言及があり、白描（彩色されていない）絵巻の『平家公達草紙』では平家の公達の佳話や哀話が集められており、『平家物語』とは異なった視点からの平

家一門の姿を味わえる。また、鴨長明の『方丈記』には福原遷都のさまが、また源通親の『高倉院厳島御幸記』には厳島御幸のさまが記録されるが、それらは『平家物語』内の叙述と近似しているため影響関係が想定される。この他にも、『平家物語』が引用する説話が他のテクストでも引用される現象も見られる。『平家物語』を理解するためには、周辺作品との影響関係を考えることも必要となろう。

⑦後世への影響

『平家物語』以降に成立する軍記物語は、多かれ少なかれ当該作品の影響を受けている。例えば『太平記』には、『平家物語』の詞章をそのまま利用している部分すら見いだせ、説話や御伽草子、また、能楽、幸若舞、浄瑠璃、歌舞伎といった芸能の領域には『平家物語』を題材としたものが多く存在する。さらには、近世期の国史編纂事業にあたっては、その史書的側面に光があてられ、源平合戦の時代を語る史料として参看されることとてあった。近現代においては、吉川英治の『新・平家物語』などの小説をはじめ、ドラマ、映画、ひいてはゲームにまでその素材が用いられる。もっともこれらの中には登場人物の名前が一致するのみで、ストーリー自体は『平家物語』のそれとは似ても似つかない荒唐無稽なものまである。しかし、そういったさまざまな形での享受が存在するところに、中世から脈々と受け継がれた『平家物語』に対する関心の強さを読み取ることができよう。また外国語翻訳も積極的に行われており、『平家物語』の魅力はいまや海外にまで伝わっている。

◉作者

作者は未詳ながら、いくつかの説が呈示されている。古くからよくいわれているものとしては、信濃前司行長説がある。これは『徒然草』二二六段にある「この行長入道、平家の物語を作りて、生仏と言ひける盲目に教へて、語らせけり」を根拠としたもので、この「行長入道」は、現在では藤原行隆の息子、行長に比定される。この説が中心にあり続けたのは、彼の父やおばが平氏人脈につながる存在であり、さらにこの家系、葉室家に平家作者の伝承をもつ人物が多いためである。すなわち、行隆の弟、時光・盛隆のそれぞれの息子に同一名の「時長」なる人物がいて、『尊卑分脈』（南北朝期）では、この二人にそれぞれ「平家物語を書く其の一人也」「平家作者随一と云々」という注記が付されており、隆源の『醍醐雑抄』（一四〇〇年代前後）にも、この盛隆の子の時長と吉田資経（彼も葉室家の血に通ずる）を作者とする記述が見えるのである。平家一門に近しい人物こそが作者としてふさわしいという考え方にも一理あるが、しかし、『平家物語』にはその平氏に関する叙述において事実と齟齬する部分が少なくないという事実がある。平氏人脈につながる作者であれば、そのような齟齬を見過ごすはずもなく、葉室家が何らかの形で関与していた蓋然性が高いことは認めつつも、それをそのまま作者とみなす説には疑問が残る。

上記の説以外にも、『平家勘文録』（一三〇〇年代末期）には藤原信西の子女四人を含む「六人ノ平家作者」が、そして『醍醐雑抄』では、先の時長、資経にあわせ源光行（時長との合作説）の名があげられ、その他、『臥雲日件録抜尤』や『庶軒日録』などいくつかの文献でも言及があるが、いずれも『平家物語』成立時期からかなり時間が経過しており、どこまで正しいところを伝え得るのか、そこは懐疑的にならざるをえない。さらには唱導との関わりなどから宗教界との接点も指摘されるものの、作品内に貴族社会との関わりの強さをうかがわせる部分が存在するため、成立圏を簡単に宗教界に限定してしまうことも危険である。

作者説については、これからも検討が続くことであろうが、現状に

おいては、一個人の作業というよりは、むしろ複数の手を介して『平家物語』は生まれたと考える方が自然なのかもしれない。

◉出典

本文は、『平家物語』（新日本古典文学大系）梶原正昭・山下宏明（一九九一〜九三年・岩波書店）による。底本は、覚一本（正確には覚一本系統の高野本。東京大学国語研究室蔵本、高野辰之旧蔵）を使用している。覚一本は数多い諸本の中でも、現在最も多くの人に読まれているテクストである。

『平家物語』諸本には、詞章はもちろん、記事の分量、配列といったレベルに至るまでかなり大きな異同が見られる。それらの諸本は、読み物として作られた「読み本系」と、琵琶法師の語りの台本とされる「語り本系」の二系統に分けられ、前者には、内容的に古態をとどめるといわれる延慶本をはじめ、長門本や『源平盛衰記』（『平家物語』の異本）などがある。一方の読み本系は、灌頂巻型（一方系とも）と断絶平家型とに分かれ、その中でさらに細分化される。本教材で用いる覚一本は、灌頂巻型の代表的なテクストで、この系統の特徴は、本編十二巻のあとに灌頂巻（平清盛の娘建礼門院徳子の壇の浦合戦後の物語）を立てていることである。覚一本という名称は、灌頂巻末尾に「沙門覚一」と署名された奥書をもつことによるもので、この奥書からは、この本の成立が一三七一（応安四）年であったこともわかる。ちなみに、覚一とは平家琵琶の名人として知られ、当道（盲人の芸や座）を中興し惣検校となった人物である。

なお、今回掲出するにあたって、「祇園精舎」の章段では、後半部分にあたる桓武天皇から清盛に至る桓武平氏の系譜を、「木曾の最期」では、前半に置かれる、巴の紹介、義仲と兼平の大津打出の浜での合流のくだりを省略している。

▼小中学校教科書での扱い▲

小・中学校の教科書では、「平家物語」から次の箇所が教材として取りあげられている。（原則として、本教材及びそれに準ずるもののみをあげる。）

〈小学校〉平成27年度版
祇園精舎　光村図書5年・東京書籍5年・教育出版5年（部分）・三省堂5年（資料）

〈中学校〉平成24年度版（27年度まで使用）
祇園精舎　三省堂2年（部分）・学校図書2年（部分）・教育出版2年（部分）・東京書籍2年・光村図書2年（部分）
敦盛の最期　三省堂2年・学校図書2年・教育出版2年
扇の的（那須与一）　教育出版2年・東京書籍2年・光村図書2年
弓流し　東京書籍2年

〈中学校〉平成28年度版
祇園精舎　三省堂2年・学校図書2年・教育出版2年・東京書籍2年・光村図書2年
敦盛の最期　三省堂2年・学校図書2年・教育出版2年
扇の的（那須与一）　東京書籍2年・光村図書2年

祇園精舎

◉大意

祇園精舎の鐘、娑羅双樹の花の故事が示すように、人の世は無常で、勢い盛んな者も必ず衰え、強く猛々しい者も必ず滅びる。中国や日本の歴史上の先例にも、その道理は表れているが、最近の例では、平清盛一門のおごった心や猛々しい様子は、それらの先例を超えて、想像を絶するほどにひどいありさまであった。

◉全体の構成

段落	ページ・行	大意
第一段	初め～282・3「塵に同じ。」	**盛者必衰の理** 祇園精舎の鐘、娑羅双樹の花の故事が示すように、人の世は無常で、勢い盛んな者も必ず衰え、強く猛々しい者も必ず滅びる。
第二段	282・4「遠く異朝を」～終わり	**盛者必衰の先例・清盛の登場** 中国や日本の歴史上の先例にも、その道理は表れているが、最近の例では、平清盛一門のおごった心や猛々しい様子は、それらの先例を超えて、想像を絶するほどにひどいありさまであった。

◉品詞分解

❶祇園精舎（ぎをんしやうじや）
の（格助（体修））
鐘（かね）
の（格助（体修））
声（こゑ）、諸行無常（しよぎやうむじやう）
の（格助（体修））
響き（ひびき）
あり（動（ラ変・終止））。
❷娑羅双樹（しやらさうじゆ）
の（格助（体修））
花（はな）
の（格助（体修））
色（いろ）、盛者必衰（じやうしやひつすい）
の（格助（体修））
理（ことわり）
を（格助（対象））
あらはす（動（サ四・終止））。
❸おごれ
る（動（ラ四・已然））
人（ひと）
も（係助（並列））
久しから（形（シク・未然））
ず（助動（打消・終止））、
ただ（副）
春（はる）
の（格助（体修））
夜（よ）
の（格助（体修））
夢（ゆめ）
の（格助（体修））
ごとし（助動（比況・終止））。
❹猛き（たけき）
者（もの）
も（係助（並列））
つひに（副）
は（係助（強意））
滅び（ほろび）
ぬ（動（バ上二・連用））、
ひとへに（副）
風（かぜ）
の（格助（体修））
前（まへ）
の（格助（体修））
塵（ちり）
に（格助（比較））
同じ（形（シク・終止））。

◎口語訳

❶祇園精舎の（無常堂の）鐘の音色には、全ての現象は刻々に変化して同じ状態でないという真理を示す響きがある。❷（釈迦入滅の時に白く変じたと伝えられる）娑羅双樹の花の色は、勢い盛んな者もいつかは必ず衰えるものだという人の世の道理をよく象徴している。❸権勢を誇り栄華におごっている者もその状態はいつまでも続くわけではなく、（はかないことは）まさに春の夜に見るつかのまの夢のようだ。❹勇ましく猛々しい者も結局は滅んでしまうが、それはまったく風が吹けば飛んでしまうような塵と同じ運命なのである。

❺遠く　異朝　を　とぶらへ　ば、　秦　の　趙高、漢　の　王莽、梁　の　朱异、
形（ク・連用）　格助（対象）　動（ハ四・已然）　接助（順接・確定）　格助（体修）　格助（体修）　格助（体修）

唐　の　禄山、これら　は　皆　旧主　先皇　の　政　に　も　従は　ず、
格助（体修）　代名　係助（区別）　副　格助（体修）　格助（対象）　係助（強意）　動（ハ四・未然）　助動（打消・連用）

楽しみ　を　きはめ、諫め　を　も　思ひ入れ　ず、　天下　の
格助（対象）　動（マ下二・連用）　格助（対象）　係助（強意）　動（ラ下二・未然）　助動（打消・連用）　格助（主格）

乱れ　ん　こと　を　悟ら　ず　して、民間　の　憂ふる
動（ラ下二・未然）　助動（婉曲・連体）　格助（対象）　動（ラ四・未然）　助動（打消・連用）　接助（単接）　格助（主格）　動（ハ下二・連体）

ところ　を　知ら　ざつ　しか　ば、久しから　ず　して、
格助（対象）　動（ラ四・未然）　助動（打消・連用・音便）　助動（過去・已然）　接助（順接・確定）　形（シク・未然）　助動（打消・連用）　接助（単接）

亡じ　に　し　者ども　なり。❻近く　本朝　を　うかがふ
動（サ変・連用）　助動（完了・連用）　助動（過去・連体）　助動（断定・終止）　形（ク・連用）　格助（対象）　動（ハ四・連体）

に、承平　の　将門、天慶　の　純友、康和　の　義親、平治　の　信頼、
接助（順接・確定）　格助（体修）　格助（体修）　格助（体修）　格助（体修）

これら　は　おごれ　る　心　も　猛き　こと　も、皆　とりどりに
代名　係助（区別）　動（ラ四・已然）　助動（存続・連体）　係助（並列）　形（ク・連体）　係助（並列）　副　形動（ナリ・連用）

こそ　あり　しか　ども、ま近く　は、六波羅の入道　前太政大臣
係助（強意・係・結流）　動（ラ変・連用）　助動（過去・已然）　接助（逆接・確定）　形（ク・連用）　係助（区別）

平朝臣清盛公（たひらのあつそんきよもりこう）と　申し（まう）　し　人（ひと）　の　ありさま、伝へ承る（つたへうけたまはる）　こそ、
格助（引用）　動（謙譲・サ四・連用）　助動（過去・連体）　格助（体修）　動（謙譲・ラ四・連体）　係助（強意・係）
語り手→清盛　　語り手→清盛

心（こころ）　も　ことば　も　及ば（およば）　れ　ね。
係助（並列）　係助（並列）　動（バ四・未然）　助動（可能・未然）　助動（打消・已然・結）

◎口語訳

❺遠く中国にその例を求めると、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の禄山（などがおり）、これらの者は皆、もとの主君、前の皇帝の政治にも従わず、歓楽の限りを尽くし、他人の諫言にも深く心をとめようとせず、（それによって）天下が乱れるであろうことを（いっこうに）悟らないで、民衆の間にある憂苦を理解しなかったので、（いずれも）たちまちにして、滅びてしまった者たちである。❻（また）近く日本における実例を探ってみると、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼など、これらはそのおごった心も猛々しい様子も、皆それぞれにはなはだしかったが、ごく間近なことでは、六波羅の入道、前の太政大臣平朝臣清盛公と申した人の様子は、伝え聞き申しあげるにつけても、（まったく）想像も及ばず、ことばにも言い尽くしがたいほどの（ひどい）ありさまであった。

◉展開図

この序章の文章は、非常に均整のとれた対句仕立てになっている。全体は、①〜④に分かれる。①では、「祇園精舎の鐘」と「娑羅双樹の花」という二つの仏教故事が対句になっている。②では、「おごれる人……」と「猛き者……」が、③では、「遠く異朝……」と「近く本朝……」がそれぞれ対句になり、④の「ま近くは……」という一文で本編の主人公平清盛にたどりつき結ばれるという構造である。

①
- 祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。
- 娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。

②
- おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。
- 猛き者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。

③
- 遠く異朝をとぶらへば、
  - 秦の趙高
  - 漢の王莽
  - 梁の朱异
  - 唐の禄山
  - これらは皆、旧主先皇の政にも従はず、楽しみをきはめ、諫めをも思ひ入れず、天下の乱れんことを悟らずして、民間の憂ふるところを知らざつしかば、久しからずして、亡じにし者どもなり。
- 近く本朝をうかがふに、
  - 承平の将門
  - 天慶の純友
  - 康和の義親
  - 平治の信頼
  - これらは皆、おごれる心も猛きことも、とりどりにこそありしかども、

④ ま近くは、（六波羅の入道 ＝ 前太政大臣 ＝ 平朝臣清盛公）と申しし人のありさま、伝へ承るこそ、（心も ことばも）及ばれね。

語句・文脈の解説と脚問・発問

282ページ

L1 祇園精舎 釈迦が説法したというインドの寺。中部インドの舎衛国にあった仏教の霊域。祇園は「祇樹給孤独園」の略。もとは、舎衛国の皇子祇陀太子所有の庭園「祇陀林樹園」だった。釈迦に帰依した須達長者がこれを買収、仏教の僧院や堂舎を造って寄進した。須達長者はさらに、孤児や身寄りのない老人に衣食を施したため「給孤独長者」と呼ばれた。この二人の名をとって「祇樹給孤独園」、略して「祇園」と呼ばれるようになった。「精舎」は精進の堂舎の意で、僧たちが仏道を修行する場をいう。釈迦は、後半生の二十五年間、この祇園精舎で雨期を過ごし、さまざまな説法を行ったという。『阿弥陀経』をはじめ、現存する経典の七、八割がこの精舎で説かれたという。

L1 鐘の声 祇園精舎の中の無常堂の鐘の音。祇園精舎は大規模なもので、十二の塔、七十二の講堂、三千六百の坊舎、五百の楼閣が整備されていたという。その中で、無常堂は、瀕死の病僧を収容する御堂で、臨終間近い僧に静かに死を迎えさせる場所であった。白銀で飾られ、四面の廊に白華を置き、壁には死んだ人の肉体が糜爛し白骨化するまでの経緯を写した「白骨非常の相」の絵があった。廊の四つの角に白銀の鐘、室内の四隅に玻璃（水晶）の鐘が置かれていた。病僧がいよいよ臨終という時にこの八つの鐘がおのずと鳴って、耳を澄ますと「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽」の四句の偈が聞こえ、聞き惚れているうちに病僧は苦悩を忘れ、清涼

脚問・発問

282ページ

問 「祇園精舎の鐘の声」（1行）と対句になっている部分を抜き出せ。

答 娑羅双樹の花の色（282・1）

（解説） どちらも釈迦に関わる故事に由来する言葉。また、これらの言葉に続く、「諸行無常の響きあり」と「盛者必衰の理をあらはす」も対句になっている。

問 「春の夜の夢」（2行）、「風の前の塵」（3行）で共通してたとえていることは何か。

答 頼りなくはかないこと。

（解説） どちらも、はかないもののたとえとしてよく用いられる言葉である。

脚問 「異朝」（4行）「本朝」（7行）とは、それぞれ何を指すか。

答 異朝…中国。

の楽しみを得、浄土に生まれる思いをすることができたとされる。この話は、日本で極めて有名であった。

L1　諸行無常　全ての現象は刻々に変化して同じ状態でないこと。この世は全てはかなく移ろいやすいということ。「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽」の四句の偈の第一句。『涅槃経』聖行品の偈で、「無常偈」とも「雪山偈」とも呼ばれる。訓読すると、「諸行は無常にして、是れ生滅の法なり、生滅滅し已りて、寂滅なるを楽しみと為す」となる。意味は次のようになる。

①この世の中の全ての現象は変化し流転するものだ。

②それはなぜかといえば、生まれたものは必ず死滅しなければならないのが、この世の掟だからなのだ。

③そうした生とか死とかの問題にとらわれると苦しみや悩みが尽きないが、それにとらわれず、その悩みから脱却すれば、

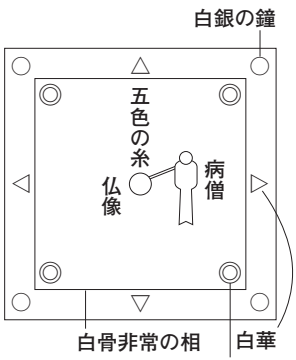
④静かな悟りの法悦（楽）の境地に達することができる。

①で人間の世は、いつまでも続く永遠のものは何一つないとし、②でその理由を、③で心機を転換することを説き、④でその結果真実の悟りに到達する喜びを述べて結ぶ。この偈を聞いて、臨終の僧は安らぎを得、心静かにその最期を迎えられるのである。

L1　娑羅双樹　「娑（沙）羅」は、フタバガキ科の常緑高木。インド北部原産で、幹は三〇メートルに達する。「双樹」は、一つの根から二本の幹の出た双生の木のこと。釈迦は、成道後四十五年、八十歳に達した時、死期が近いことを悟り、故郷に戻るために最後の旅に出る。老齢と病気のため、苦しい旅を続けながら、ようやくクシナガラという町にたどり着く。郊外の跋提河のほとりの娑羅の木を見て、弟子阿難に命じて木陰に床をしつらえさせ、そこに横たわった。ここに奇跡が起こる。東西二本の双樹で四本とも、東西南北四本がそれぞれ双樹で八本ともいわれる娑羅が、釈迦の入滅を悲しんで一変したのである。二双の娑羅が合わさって一つになり、枯れることのない娑羅の木が枯れて白く変わったという。真っ白に変わった娑羅の林は、さながら鶴が群がり飛び立つようであったといい、この入滅の奇跡を「鶴の林」とも「鶴林」ともいう。この奇跡は別に、双生の娑羅のそれぞれ一本が枯れ一本が花を咲かせ「四枯四栄」の状態になったとか、時期でもないのに全てが一斉に花を咲かせて満開になったという説もある。

本朝…日本。

「無常堂の図」



（出典）『鹿の谷事件―平家物語鑑賞』梶原正昭（一九九七年・武蔵野書院）

問　**「秦の趙高」（4行）以下の人名は、何の例としてあげられているのか。**

答　おごれる人・猛き者。

（解説）　第一段落内の「おごれる人も久しからず」「猛き者もつひには滅びぬ」にあたる例である。一度は権力を握るが、長続きせず滅ぼされた、中国の歴史上の人物たちである。

問　**「旧主先皇の政」（5行）の意味を答えよ。**

L1 盛者必衰 勢い盛んな者もずっとそれを維持できず、いつかは必ず衰えること。『仁王経』護国品に「盛者必衰、実者必虚」とある。「盛」は、仏教語の読み（呉音）で「ジョウ」と読むので、ここでは「ジョウシャ」と読むのがよい。

コラム

「娑羅双樹の花の色」は「盛者必滅」？

娑羅双樹の花の色が白く変じたことは、釈迦の入滅（死）にまつわる故事である。しかしそれが「盛者必衰」であると納得がいくだろうか。恐らくそれは「ノー」だろう。勢い盛んな者が必ず滅びるとは、悪い意味で用いており、釈迦に対してふさわしい言葉とは思えない。実は本来この語は「生者必滅」とあるところである。「生きている者は必ず死ぬ」の意ならば、納得できるだろう。普遍的な理である「生者必滅」ではなく「盛者必衰」としたところに『平家物語』の作者の姿勢がうかがえる。「盛者」の運命に注目しているのである。あげられた中国や日本の例も、「諸行無常」というより「盛者必衰」の例であることからもわかるだろう。

L2 おごれる人 思い上がった人。他を見下しあなどる人。人より優越した自分の立場を当然のものと思い、いい気になった者。仏教では「憍慢（驕慢）（＝おごる）の心」を強く戒める。

L2 春の夜の夢 短くはかないもののたとえ。「春の夜」は短いものとされ（一方で、秋の夜は長いもの）、「春の夜の夢」は、春独特のはかなさを表す代名詞のようになった（↓発問）。和歌によく詠まれ、「春の夜の夢の浮き橋とだえして峰にわかるる横雲の空（春の夜の短くてはかない夢がとぎれて、今しも、横雲が峰から別れてゆく曙の空であることよ。）」（『新古今和歌集』春上・三八・藤原定家）などがある。

L2 猛き者 勇ましく猛々しい者。勢い盛んで強い者。

L3 ひとへに まるで。まったく。

L3 風の前の塵 はかないもののたとえ。塵は、一度風が吹くと簡単に吹き飛ばされてしまうことから（↓発問）。永観の『往生講式』に「一生は是れ風前の燭、万事は皆春の夢」と類似した表現がある。

L4 異朝 一般には外国の意であるが、ここでは中国を指す（↓脚問）。

L4 とぶらへば 尋ね求めると。探してみ

答 昔の皇帝の行ったすばらしい政治。

（解説） すばらしい過去の政治に倣えば、よい君主となることができたはずであるのに、そうしなかったことが非難されている。

コラム

故事づくし

「祇園精舎の鐘の声」も「娑羅双樹の花の色」も、本文にはこの語句が示されているだけで、その由来は何も具体的に説明されていない。説明すると、語釈に示したようにとても長い説明になってしまう。しかし、この二つの故事は、当時よく知られていた。釈迦をめぐる物語はさまざまな場で説かれており、祇園精舎という場をめぐるさまざまな説話や、釈迦入滅の時の物語は、なかでもきわだったものとして話題に上ることも多く、人々の耳になじんだ話題であったようだ。

釈迦の入滅のありさまは、「涅槃図」という絵に描かれ、陰暦二月十五日（釈迦が亡くなった日）の涅槃会には、涅槃図を本堂に掲げ、絵解き（絵を解説すること）を行うことも多かった。

ると。「とぶらふ」（訪ふ）には、訪問する意の他に、質問する、探す、尋ねるの意がある。「ば」は、已然形について、順接の確定条件の意を表す。

L4　趙高　?～前二〇七年。秦の始皇帝の寵臣の宦官で、始皇帝の死後、丞相（＝大臣）李斯を殺し、二世の扶蘇を擁立して国政を左右した。さらにのち、扶蘇を殺し、その子子嬰を三世に即位させるが、子嬰によって誅伐された。皇帝の前で鹿を馬と言った時、皇帝は「鹿ではないか」と言ったが、周囲の者は、趙高が恐くて「馬だ」と言う趙高の説に賛成した故事は有名である（『史記』巻六、秦始皇帝本紀）。

L4　王莽　前四五年～二三年。前漢の元帝の皇后の甥で、平帝の皇后の父。平帝を毒殺して孺子嬰を立てて権勢を握り、のち自ら皇帝となって国号を「新」と改めた。しかし、在位十五年で、後漢の高祖劉秀（光武帝）に敗れ、滅ぼされた（『漢書』巻九九、王莽伝）。

L4　朱异　四八三年～五四九年。梁の武帝の臣。梁は南北朝時代の南朝の国号（五〇二年～五五七年）。三十年にわたって重用され、散騎常侍という要職にもついたが、奢侈にふけり、朱异を討つという名目で侯景に攻め入られ、梁朝滅亡の原因をなした。反逆者の汚名のもとに憤死したとも自殺したともいわれる（『梁書』巻三八による）。他三者に比べ知名度の低い朱异が挙げられるのは、『貞観政要』君道第一に趙高・朱异が並記されることの影響ともいわれる。「朱」の読みは「シュ」だが、諸本が「周伊」と表記することから「シュウイ」と読ませた。

L4　祿山　安祿山（七〇五年～七五七年）。唐の玄宗皇帝の寵臣安祿山のこと。卑賤から身を起こし、玄宗の寵妃の楊貴妃に取り入って重く用いられた。七五五年に、武将史思明と反乱を起こし（安史の乱）、洛陽を攻略して国を奪い、帝位について大燕皇帝と自称した。しかし異母弟を溺愛するのを見て、不安に思った太子安慶緒によって七五七年に討伐された（『唐書』巻二一五による）。

L5　旧主先皇の政　もと仕えていた主君や皇帝の政治。中国には、堯や舜という善政を行った名君が伝えられている。そうした為政者たちの治績を引き継がなかったのである。

L5　楽しみをきはめ　歓楽の限りを尽くし。中国で伝えられる「先憂後楽」の教えによる。国を治める為政者は、憂うべきことは民衆よりも先に憂い、楽しむべきことは民衆を先に楽しませて後に楽しむようにしなければならないという教え。この教えに反し、自

問　**「知らざつしかば」（6行）のもとの形は何か。**

答　知らざりしかば。

（解説）『平家物語』は音便が多用される。「り」が「つ」に変化しているので、促音便である。ちなみに、「い」に変化するのがイ音便、「う」に変化するのがウ音便、「ん」に変化するのが撥音便である。

問　**「久しからずして、亡じにし」（7行）とはなぜか。本文中から抜き出せ。**

答　旧主先皇の政にも従はず、楽しみをきはめ、諫めをも思ひ入れず、天下の乱れんことを悟らずして、民間の憂ふるところを知らざつしかば（282・5）

（解説）　五つの理由が列挙されている。一つでも気づいていれば、短いうちに滅びることはなかったかもしれないのである。

問　**「将門」、「純友」、「義親」、「信頼」（8行）の氏をそれぞれ答えよ。**

答　将門は平、純友は藤原、義親は源、信頼は藤原。

（解説）　いずれも武士台頭の時代に乱を起こした人物の名である。平清盛の父忠盛も、武門で名をあげた人物であり、清盛も保元・平治の乱で軍功をあげ、賞を得ることになった。

分の楽しみを優先している悪王たちであった。

L5 諫めをも思ひ入れず 他人の諫言にも深く心をとめようとせず。施政の誤りを指摘し諫言する忠臣の言葉に耳を傾けることは、君主の大事な心得であるが、それができないのである。「思ひ入れず」とは、考えに入れない、無視する、の意。

L6 民間 民衆のこと。

L6 知らざつしかば 「知らざりしかば」の促音便(→発問)。知らなかったので。ここでは、「ば」は已然形に付いて順接の確定条件(原因・理由)を表す。

L7 亡じにし者ども 滅びてしまった者たち。皆、一時的に権力を握るが、すぐに臣下などに誅伐されている。

L7 本朝 日本のこと(→脚問)。古典ではよく用いられる言葉。

L8 将門 平将門(?〜九四〇年)。朱雀天皇の時代、九三五(承平五)年に東国で反乱を起こした。鎮守府将軍平良将の子で、伯父の常陸大掾平国香を殺し、下総で兵を挙げた。一時は東国全土を制圧して「平新皇」と称したが、すぐに国香の子貞盛と下野の国押領使藤原秀郷のために滅ぼされた。『将門記』に詳しい。

L8 純友 藤原純友(?〜九四一年)。将門と同時代に南海で乱を起こした。大宰少弐藤原良範の子で、伊予掾として赴任したまま任期が終わっても帰京せず、九三九(天慶二)年に反乱を起こし、海賊の首領として官私の財物を強奪した。九四一(天慶四)年、伊予の警固使橘遠保らによって捕らえられ殺された。

L8 義親 源義親(?〜一一〇八年)。八幡太郎源義家の次男。堀河天皇の一一〇一(康和三)年対馬守に任ぜられたが、在任中に人を殺したり、公物を横領するなど悪行を重ねたため、同年、堀河天皇から追討の宣旨が下り、翌年隠岐に流された。しかし途中、出雲で乱を起こし、なおも悪行を重ねたため、一一〇七(嘉承二)年、因幡守平正盛によって追討された。

L8 信頼 藤原信頼(一一三三年〜一一五九年)。平治の乱の首謀者。大蔵卿藤原忠隆の三男で、後白河上皇の寵臣としてその側近の藤原信西と対立。一一五九(平治元)年十二月、源義朝を誘って乱を企てて、藤原信西を殺したが、平清盛の軍に敗れ、捕らえられて六条河原で処刑された。

L8 おごれる心 思い上がっている心。「おごる」は、人に優越した自分の立場を自慢し、

問 「これら」(8行)とは何を指すか。

答 承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼

(解説) 直前にあげられた四人を指す。

コラム 平曲としての「祇園精舎」

『平家物語』は琵琶法師の語り(平曲)によって広く流布することになった。平曲は一章段ごとに独立しているので、必ずしも冒頭から順番に聞かせていったわけではなく、リクエストに応じて演じられる場合も多かった。当然、人気のある章段とそうでもない章段には差がある。特に人気のあったのは、「木曾最期」「敦盛の最期」「那須与一」などである。

ところで冒頭の「祇園精舎」であるが、これは琵琶法師にとっても極めて特別な章段で、平曲においては「秘事」の一つとされていた。秘事というのは、平曲伝授の上で特に意味づけの行われた曲である。秘事は、平曲伝授の過程で、まず平物(百八十八句)を習得しなければ、伝授されなかった句である。秘事は全部で十一句(曲)あり、「祇園精舎」はそのうちの一曲であった。

他人を見下して得意になる気持ち。

283ページ

L1　とりどりにこそありしかども　それぞれにはなはだしかったが。「とりどり」は、いろいろ、さまざま、の意。「こそ」の結びは本来「しか」だが、「ども」が続いたため、係り結びが成立せず、結びが消滅する（＝結びの流れ）（→発問）。

L1　ま近くは　ごく間近なことでは。最近の例では。「近く」は、時間的にも地理的にも両方用いる。本文でも、中国の例→日本の例と、地理的に遠いものから近いものへ並べ、時間的にも古いものから新しい例へと並べ、最後の平清盛の例を導き出している（→発問）。

L1　六波羅の入道前太政大臣　平清盛（一一一八年～一一八一年）。六波羅は賀茂川の五条橋の東にあたる地域。空也上人がここに六波羅蜜寺を建立したことから、「六波羅」と称せられるようになった。清盛の祖父正盛の頃からここに所領を持っていたので、清盛はここに広大な邸宅を構え、一族郎党の多くの家々が付近に立ち並んでいた。六波羅は平家の本拠地で、清盛は六波羅殿と呼ばれた。一一六七（仁安二）年二月、清盛は内大臣から太政大臣に上ったが、同五月に辞した。そのため「前」という。翌仁安三年に大病を患い、存命のため出家して法名を浄海と名のった。「入道」は在家のままで髪を剃って仏道に入った者の称で、出家以後清盛は、太政の入道や入道相国（相国は太政大臣の唐名）などと呼ばれた。

L2　平朝臣清盛公　「朝臣」はもと姓（かばね）の一つで、平安時代以降は敬称となった。三位以上は氏の下に、四位以下は名前の下に付ける。清盛は従一位前太政大臣であるので、「平朝臣」と氏の後に「朝臣」を付けている。「公」は、三公（太政大臣と左右大臣）に対する敬称である。

L2　申しし人のありさま　人々が申した人の様子。「申す」は謙譲語で、ここでは、申す、申しあげる、の意。「申す」はサ変動詞ではないので、「申せし人」とはならないことに注意。

L2　伝へ承るこそ　伝え聞き申しあげるにつけても。「（伝へ）承る」は「（伝へ）聞く」の謙譲語。

L2　心もことばも及ばれね　想像も及ばず、ことばでも言い尽くしがたいほどのひどいありさまであった。「及ばれね」は、及ぶことができない。「ね」は打消の助動詞「ず」の

283ページ

問　「とりどり」（1行）とは、何がとりどりなのか。

答　おごれる心・猛きこと。

（解説）　それぞれ、おごる心、猛きことであったが、その程度や状態はさまざまであった、というもの。

問　「とりどりにこそありしかども」（1行）の係り結びについて説明せよ。

答　結びの流れ。

（解説）　「こそ―しか」とあるべきところ、接続助詞が続き、係り結びが流れた。

問　「ま近く」（1行）とは、何が近いのか。

答　地理・時間。

（解説）　「語句・文脈の解説」参照。

已然形で、係助詞「こそ」の結び。「れ」は可能の助動詞「る」の未然形で可能の意。心で思い致そうにも、ことばで表現しようにも、及ぶことができないほど、「おごれる心」や「猛きこと」が甚だしくひどいということ。（→発問）

＊語句

理　［名］①ものごとの道理。筋道。②判断。裁定。③説明。言い訳。理由。④謝罪。

とぶらふ　［他ハ四］①訪問する。訪れる。②捜す。調べる。③見舞う。安否を問う。

諫め　［名］忠告。戒め。諫言。

申す　［一］［他サ四］①《「言ふ」の謙譲語》申しあげる。②《「願ふ」「請ふ」の謙譲語》お願い申しあげる。お願いする。③《「す」「行ふ」などの謙譲語》…し申しあげる。…してさしあげる。④《「言ふ」の丁寧語》申す。申します。［二］［補動サ四］《謙譲の意を表す》（動詞および動詞型活用の助動詞の連用形に付いて）お…申しあげる。お…する。

コラム

中国・日本の例の並び方について

「遠く異朝」→「近く本朝」→「ま近くは」と、例を列挙しながら、『平家物語』前半の主人公、平清盛へと話題が向かっていくようになっている。遠い中国の例から、近い日本の例へと、地理的にも遠いものから近いものへと並べられている。注意したいのは、日本の例のあげ方である。中国の例の場合、趙高・王莽・朱异・禄山は、いずれも八世紀の唐の頃までの、いわば古代の反逆者たちであるが、日本の例は、将門以下、十世紀よりあとの、武士台頭期に乱を起こした武人たちが選ばれているのである。

それ以前に、例がないわけではない。『平家物語』巻五に「朝敵揃」という章段があり、日本での反乱事件を振り返り、朝敵となった人の名前を列挙している箇所がある。そこにはたくさんの名があげられ、守屋大臣、蘇我入鹿、藤原広嗣（ひろつぐ）、恵美押勝（えみのおしかつ）など、平将門以前に、十六名もの名があげられている。ここに書き連ねられた末尾の数人が、「祇園精舎」で日本の例としてあげられているのである。つまり日本の場合は、武をもって国政を乱し、滅び去った者が重要視されているのであり、「おごれる人」よりも「猛き者」に比重がかかっている。平清盛も、まさしく「猛き者」である武人の系統を引く人物なのである。

《板書例》

地理的　**時間的**

〈遠く〉
中国
・趙高　（〜前二〇七）
・王莽　（〜　二三）
・朱异　（〜　五四九）
・禄山　（〜　七五七）

〈近く〉
日本
・将門　（〜　九四〇）
・純友　（〜　九四一）
・義親　（〜一一〇八）
・信頼　（〜一一五九）

〈ま近く〉
六波羅
・平清盛　（〜一一八一）

問　**「平朝臣清盛公と申しし人のありさま」（2行）は、どうだというのか。**

答　おごれる心も猛きことも、最もひどいということ。

（解説）　中国や日本の歴史上での「おごれる心」「猛きこと」の先例を列挙しながら、清盛へと話が収斂されていく。最も甚だしい例として清盛へと向かうのである。

問　**「伝へ承るこそ……」（2行）の中から、係り結びを抜き出せ。**

答　係助詞…こそ

承る　［他ラ四］①《「受く」の謙譲語》お受けする。②《「承諾する」の謙譲語》承諾申しあげる。③《「聞く」の謙譲語》お聞きする。拝聴する。④《「見る」の謙譲語》拝見する。

コラム

「祇園精舎」その後

「祇園精舎」は、このあと、桓武平氏の系譜が語られる（「参考」参照）。桓武天皇から書き起こし、清盛は十一代の後胤（こういん）となる。しかし最後に「殿上の仙籍をば未だ許されず」とする。数々の戦で戦功をあげたとはいえ、平家はまだ殿上に上ることを許されない「地下人」であった。父忠盛が初めて殿上人となり、平家の栄華への第一歩を踏み出す。次の章段「殿上の闇討ち」では、忠盛が殿上人の仲間入りをしたこと、それに対して上流貴族たちが激しく反発していやがらせをしたこと、忠盛は賢い人で、そのいじめから深謀遠慮で逃れたことが描かれる。

・図版解説・

●平家琵琶（教科書283ページ）

この琵琶の銘は「相応」。琵琶の起源は古代ペルシアであるとされ、日本では、中国経由で渡来した雅楽用の琵琶（楽琵琶）と、インドから東南アジアを通って来たとされる九州の盲僧琵琶に分かれている。平家琵琶は、容姿は楽琵琶に近いが、それよりひと回り小さい。また、楽琵琶が四絃四柱で、柱の位置が固定されているのに対し、平家琵琶は、四絃五柱で、柱の位置は可動式である。『平家物語』は、この平家琵琶を用いた琵琶法師（琵琶を演奏する僧形の盲人）によって語られることで、広く流布することとなった。安徳天皇の墓前で壇の浦合戦を語った盲目の若者、芳一が平家の亡者に両耳を奪われる「耳なし芳一」の話は有名。奥村俊郎蔵（京都市歴史資料館提供）。

結びの語…ね

（解説）　強意の係助詞「こそ」は已然形で結ぶ。打消の助動詞「ず」が已然形「ね」となっている。

問　**「心もことばも及ばれね」（2行）とは、どういうことか。**

答　清盛のおごりたかぶって勢い盛んな様子は、想像も及ばないし、ことばでも言い尽くせないほどひどいということ。

（解説）　直訳すると、心（で想像すること）もことば（で表現すること）も（清盛の実像を表すのに）及ばない。清盛の「おごれる心」「猛きこと」は、想像すら及ばないし、ことばでは言い尽くせないほどひどい様子であるということ。

問　**この文章は、『平家物語』の中で、どのような位置にあるか。**

答　『平家物語』の冒頭。

（解説）　十二巻、約百九十段の中で、冒頭の章段である。『平家物語』の序章として、作品の主題を表すともいわれている。

◉鑑賞

『平家物語』は数多くの諸本があり、それら諸本間には同じ作品なのかと首をかしげるほどの大きな異同すら存在する。そのような中にあって、この「祇園精舎」の部分はほぼ全ての本が有しており、しかもさほど大きな異同が見られない。この章段が『平家物語』という作品にとってそれほど重要な意味をもっていたということであろう。「諸行無常」「盛者必衰」という観念は『平家物語』全体に通底する概念として、冒頭に置かれなければならなかったのだ。

当該章段では、この「諸行無常」「盛者必衰」の観念を表現するべく、「祇園精舎の鐘の声」「娑羅双樹の花の色」という仏教故事から説き起こす。そしてこの観念のもとに、身を滅ぼしていった歴史上の人物たちの例をあげていく。有名な人物たちの名が実例としてあがることで、読者や聴衆は、その因果関係をなるほどと実感できたことであろう。

そして物語は、そういった人物たちの極めつけとして平清盛を取りあげ、その出自より語り始める。しかし、『平家物語』が清盛の滅びゆくさまを描くことを目的としていたかというと、そうではない。そもそも清盛は物語の中盤で病死という理由で退場してしまい、実際衰頽の憂き目に遭うのは、彼の兄弟、子や孫なのである。それならば、そんな平家一門の姿に焦点を絞って物語を展開させているかというと、たしかにそれが柱の一つになっているのは間違いないが、決してそれが全てというわけではない。『平家物語』はさまざまなところに視線を向ける。平家と敵対する源氏はもちろん、記録類であればその詳細が書きとめられることはなかったであろう人々にもスポットをあて、彼ら個々人の生きざま、死にざまを描いていくのだ。それは群像劇というにふさわしい。

『平家物語』が作られてゆく時期――、それは、まだ源平の合戦の記憶が生々しく残っている時期であった。合戦は当事者だけではなく、無関係な民まで巻き込んでいく。さまざまな立場、階層の人物たちがそれぞれの立場で経験した源平合戦を語り、そしてそれが、子や孫に受け継がれていく。そういった数多くの伝承を集約していく形で『平家物語』はできあがっていくのだ。特定の人物を主人公として英雄物語を作りあげるのではなく、記録類では残しきれない、個々人の生きた証を記録していくことを通して、源平合戦時代に翻弄された全ての人々に対する鎮魂の思いを表現しようとしたテクスト、それが『平家物語』なのである。

◉参考　補

「祇園精舎」の後半部分を掲載する。物語の発端を登場人物の出自から説き起こすのは、物語の常套的スタイルで、軍記物語の場合は特にこの傾向が強い。この系譜からは、清盛が天皇の皇胤だったなど、彼の貴種性が表れている。清盛が「心もことばも及ばれ」ぬ人であったのも頷けるというものだろう。

その先祖を尋ぬれば、桓武天皇第五の皇子、一品式部卿葛原親王、九代の後胤讃岐守正盛が孫、刑部卿忠盛朝臣の嫡男なり。かの親王の御子高視の王、無官無位にして失せ給ひぬ。その御子高望の王の時、始めて平の姓を給はつて、上総介になり給ひしより、忽ちに王氏を出でて人臣につらなる。その子鎮守府将軍義茂、後には国香と改む。国香より正盛にいたるまで六代は、諸国の受領たりしかども、殿上の仙籍をばいまだゆるされず。

『平家物語　上』（新日本古典文学大系）（一九九一年・岩波書店）

学習の手引き

一※次の傍線部の助動詞を、それぞれ文法的に説明してみよう。

①夢のごとし。（282・2）
②亡じにし者どもなり。（282・7）
③及ばれね。（283・3）

【解答例】
①比況の助動詞「ごとし」の終止形。
②過去の助動詞「き」の連体形。
③打消の助動詞「ず」の已然形。

【解説】
①は「ごとし」の用例として代表的な一文である。「ごとし」は助詞「の」「が」や連体形などに接続し、比況の意を表す。②下に「者」があることから、「し」は連体形である。連体形が「し」となるのは、過去の「き」。ちなみに、直前の「に」は、サ変動詞連用形に付き、過去の助動詞に接続することから、連用形であることがわかる。連用形が「に」となる連用形接続の助動詞は、完了の「ぬ」。③は上に係助詞「こそ」があり、その結びとなる「ね」は已然形。已然形が「ね」となる助動詞は、打消「ず」。

二※本文の対句的表現に留意しながら、朗読してみよう。

【解説】
①祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。
娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。
②おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。
猛き者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。
③遠く異朝をとぶらへば、～亡じにし者どもなり。
近く本朝をうかがふに、～皆とりどりにこそありしかども、
①・②で仏教故事を対句にし、③で「異朝」と「本朝」の例を対句的表現にしている。詳しくは、「展開図」参照。

三※「春の夜の夢」（282・2）、「風の前の塵」（282・3）がたとえている内容を説明してみよう。

【解答例】
あっという間に消え去ってしまうものを取りあげ、人の世が無常でどんな人も衰え滅び去ってゆく、そのはかなさを表現しようとしている。

【解説】
「春の夜」は短いものとされ、その春の夜の「夢」は、春独特のはかなさを表す代名詞のように用いられる。塵は、一度風が吹くと簡単に吹き飛ばされてしまう存在である。すなわち、いずれもはかなく消え去るものという意味を有する。

木曾の最期

◉大意

義仲はわずかの軍勢で敵軍に戦いを挑む。しかし多勢に無勢の状況はいかんともしがたく、主従五騎にまで追いつめられてしまう。五騎の中には巴も残っていたが、義仲は彼女を逃がそうとする。巴はその思いを酌み、最後に敵将を倒し東国へと落ちて行く。乳母子今井と二人きりになり、大将軍らしからぬ弱音を吐くようになった義仲を目の前にし、なんとか自害を遂げさせようと今井は説得に努める。その説得を受け入れて粟津松原へ向かう義仲ではあったが、今井のことが気になって振り向いたところを、敵に射られ落命してしまう。それを知った今井はあとを追うかのように自害して果て、粟津の戦は終結するのだった。

◉全体の構成

段落	ページ・行	大意
第一段	初め～286・10「落ちにけり。」	**義仲、最後の戦いに臨む・巴との別れ** 義仲は大将軍たるにふさわしく、豪奢な装束を身にまとい、大音声の名のりを挙げる。一条軍をはじめとする敵軍の中を縦横無尽に駆け抜けて奮戦するも、軍勢は五騎にまで減ってしまった。最期を覚悟した義仲は、愛する巴を逃がそうとする。はじめは義仲の命令を拒む巴ではあったが、結局はその思いを受け入れ、敵将御田八郎を討った上で東国へと落ちて行った。また、手塚太郎は討ち死にし、手塚別当は逃げ延びた。
第二段	286・11「今井四郎、」～287・14「駆け給ふ。」	**義仲と兼平の対話** 軍勢はとうとう今井と義仲の二騎だけとなる。「鎧が重くなった」と弱音を吐く義仲を今井は励まし、自分が防戦している間に粟津松原で自害するよう勧めた。しかしそれでも義仲が「同じ所で戦って死のう」と走り出そうとしたので、今井は武士が最期に不覚をすれば末代までの恥と重ねて説得する。結果、義仲は今井の言葉に従って粟津の松原に向かうことにした。

第三段	287・15「今井四郎ただ一騎、」〜終わり	**義仲と兼平それぞれの最期** 義仲に無事自害を果たさせようと今井は一人奮戦するが、深田にはまって身動きが取れなくなった義仲は石田次郎為久に討ち取られてしまう。それを知るやいなや、今井は「もはや誰のために戦おうというのか」と言って、太刀の先を口に含み、馬上から逆さまに飛び落ち、自害して果てた。こうして粟津の戦は終結した。

◉品詞分解

❶木曾左馬頭、（代名）そ（格助（体修））の（日）の（格助（体修））装束（格助（資格））に（係助（区別））は、赤地（格助（体修））の錦（格助（体修））の直垂（格助（体修））に唐綾縅（格助（体修））の鎧（動（カ上一・連用））着（接助（単接））て、鍬形（動（タ四・連用・音便））打つ（助動（存続・連体））たる甲（格助（体修））の緒（格助（添加））を締め、（動（マ下二・連用））厳物作り（格助（体修））の大太刀（動（カ四・連用））はき、石打ち（格助（体修））の矢（格助（同格））の、その（代名）の日（格助（体修））の負ひなし、いくさ（格助（時間））に射（動（ヤ上一・連用））て（接助（単接））少々（副）残つ（動（ラ四・連用・音便））たる（助動（存続・連体））を、頭高に（格助（対象））負ひなし、滋籐（格助（体修））の弓（動（タ四・連用・音便））持つ（接助（単接））て、聞こゆる（動（ヤ下二・連体））木曾（格助（体修））の鬼葦毛（格助（引用））と（動（ハ四・連体））いふ馬（格助（同格））の、きはめて（副）太う（形（ク・連用・音便））たくましい（形（シク・連体・音便））に、金覆輪（格助（対象））の鞍（格助（体修））置い（動（カ四・連用・音便））て（接助（単接））ぞ（係助（強意・係））乗つ（動（ラ四・連用・音便））たり（助動（存続・連用））ける。

❷鐙（助動（過去・連体・結））踏んばり（動（ラ四・連用））立ちあがり、（動（ラ四・連用））大音声（格助（対象））を挙げ（動（ガ下二・連用））て（接助（単接））名のり（動（ラ四・連用））ける（助動（過去・連体））は、（係助（区別））

❸「昔（係助（区別））は（動（カ四・連用））聞き（助動（過去推量・連体））けん（接助（逆接・確定））ものを、木曾（格助（体修））の冠者、（動（マ上一・終止））今（係助（区別））は見る（助動（現在推量・終止））らん、左馬頭兼伊予守、朝日の将軍

源義仲	ぞ	や。	❹甲斐	の	一条次郎	と	こそ	聞け。	互ひに	よい
	終助(念押)	間助(呼)		格助(体修)		格助(引用)	係助(強意・係)	動(カ四・已然・結)	副	形(ク・連体・音便)

敵ぞ。	義仲	討つ	て、	兵衛佐	に	見せよ	や。」	と	て、
終助(念押)		動(タ四・連用・音便)	接助(単接)		格助(対象)	動(サ下二・命令)	間助(呼)	格助(引用)	接助(単接)

をめい	て	駆く。
動(カ四・連用・音便)	接助(単接)	動(カ下二・終止)

◎口語訳

❶木曾左馬頭のその日の装束は、赤地の錦の直垂に、唐綾縅の鎧を着て、鍬形を打った甲の緒を締め、厳物作りの大太刀をはき、石打ちの矢で、当日の戦いに射てわずかばかり残ったのを頭より高めに負い、滋籐の弓を持ち、名高い木曾の鬼葦毛というきわめて肥えたたくましい馬に、金覆輪の鞍を置いて乗っていた。❷鐙を踏ん張って立ちあがり、大音声を挙げて名のったことには、❸「昔は聞いたこともあろう、木曾の冠者（のこと）を、今こそ目の当たりに見ることだろう、左馬頭兼伊予守、朝日の将軍源義仲であるぞ。❹（お前は）甲斐の一条次郎だと聞いている。互いによい対戦相手だ。義仲を討ち取って兵衛佐に見せよ。」と言って、大声を挙げて馬を駆る。

❺一条次郎、「ただ今　名のる　は　大将軍　ぞ。　あます　な　者ども、　もらす　な
副　動（ラ四・連体）　係助（区別）　終助（念押）　動（サ四・終止）　終助（禁止）　動（サ四・終止）　終助（禁止）

若党、　討て　や。」　と　て、　大勢　の　中　に　取りこめ　て、　われ
動（タ四・命令）　間助（呼）　格助（引用）　接助（単接）　格助（体修）　格助（場所）　動（マ下二・連用）　接助（単接）　代名

討つ取ら　ん　と　ぞ　進み　ける。　❻木曾三百余騎、六千余騎　が　中
動（ラ四・未然）　助動（意志・終止）　格助（引用）　係助（強意・係）　動（マ四・連用）　助動（過去・連体・結）　格助（体修）

を、　縦様・横様・蜘蛛手・十文字　に　駆け割つ　て、　後ろ　へ　つつと　出で
格助（場所）　格助（状態）　動（ラ四・連用・音便）　接助（単接）　格助（方向）　副　動（ダ下二・連用）

たれ　ば、　五十騎　ばかり　に　なり　に　けり。　❼そこ
助動（完了・已然）　接助（順接・確定）　副助（程度）　格助（結果）　動（ラ四・連用）　助動（完了・連用）　助動（過去・終止）　代名

を　破つ　て　行く　ほど　に、　土肥次郎実平、二千余騎　で　ささへ
格助（対象）　動（ラ四・連用・音便）　接助（単接）　動（カ四・連体）　格助（時間）　格助（手段）　動（ハ下二・連用）

たり。　❽それ　を　も　破つ　て　行く　ほど　に、　あそこ
助動（存続・終止）　代名　格助（対象）　係助（添加）　動（ラ四・連用・音便）　接助（単接）　動（カ四・連体）　格助（時間）　代名

で　は　四、五百騎、ここ　で　は　二、三百騎、百四、五十騎、百騎　ばかり
格助（場所）　係助（区別）　代名　格助（場所）　係助（区別）　副助（程度）

が　中　を　駆け割り　駆け割り　行く　ほど　に、　主従五騎　に　ぞ
格助（体修）　格助（場所）　動（ラ四・連用）　動（ラ四・連用）　動（カ四・連体）　格助（時間）　格助（結果）　係助（強意・係）

なり　に　ける。　❾五騎（ごき）　が　うち　まで　巴（ともゑ）　は　討（う）た　れ
動（ラ四・連用）　助動（完了・連用）　助動（過去・連体・結）　格助（体修）　副助（範囲）　係助（区別）　動（タ四・未然）　助動（受身・未然）

ざり　けり。　❿木曾殿（きそどの）、「おのれ　は　疾（と）う疾（と）う、女（をんな）　なれ　ば、　いづち
助動（打消・連用）　助動（過去・終止）　代名　係助（区別）　副（音便）　助動（断定・已然）　接助（順接・確定）　代名

へ　も　行（ゆ）け。　われ　は　討（う）ち死（じ）に　せ　ん　と　思（おも）ふ
格助（方向）　係助（強意）　動（カ四・命令）　代名　係助（区別）　動（サ変・未然）　助動（意志・終止）　格助（引用）　動（ハ四・連体）

なり。
助動（断定・終止）

◎口語訳

❺一条次郎は「ただ今名のるのが大将軍である。討ち残すな、者ども。討ちもらすな、若い郎等ども。討てよ。」と言って、大軍勢の中に包囲して、我こそが討ち取ってやろうと進んだのだった。❻木曾の三百騎は、六千余騎の中を縦に横に蜘蛛手に十文字にと駆け破って、（敵の）背後にさっと抜け出ると、（味方の勢は）五十騎ほどになってしまった。❼そこを破って行くうちに、土肥次郎実平が二千余騎で陣を構えている。❽そこをも破って行くと、あそこでは四、五百騎、ここでは二、三百騎、百四、五十騎、百騎ほどの中を駆け破り駆け破りしていくうちに主従五騎になってしまった。❾（その）五騎の中まで、巴は討たれてはいなかった。❿木曾殿は、「そなたは早く早く、女の身なのだから、どこへでも行け。自分は討ち死にしようと思うのだ。

⓫もし　人手（ひとで）　に　かから　ば　自害（じがい）　を　せ　んずれ　ば、　木曾殿（きそどの）
副　格助（受身）　動（ラ四・未然）　接助（順接・仮定）　格助（対象）　動（サ変・未然）　助動（意志・已然）　接助（順接・確定）

の　最後（さいご）　の　いくさ　に、　女（をんな）　を　具（ぐ）せ　られ　たり　けり
格助（主格）　格助（体修）　格助（場所）　格助（対象）　動（サ変・未然）　助動（尊敬・連用）　助動（完了・連用）　助動（詠嘆・終止）
（敵→木曾殿）

なんど　言（い）は　れ　ん　こと　も、　しかる　べから　ず。」
副助（例示）　動（ハ四・未然）　助動（受身・未然）　助動（婉曲・連体）　係助（強意）　動（ラ変・連体）　助動（当然・未然）　助動（打消・終止）

⓬と　のたまひ　けれ　ども、　なほ　落（お）ち　も　行（ゆ）か　ざり
格助（引用）　動（尊敬・ハ四・連用）　助動（過去・已然）　接助（逆接・確定）　副　動（タ上二・連用）　係助（強意）　動（カ四・未然）　助動（打消・連用）
語り手→木曾殿

ける　が、　あまりに　言（い）は　れ　奉（たてまつ）つ　て、　⓭「あつぱれ、
助動（過去・連体）　接助（逆接・確定）　副　動（ハ四・未然）　助動（受身・連用）　補動（謙譲・ラ四・連用・音便）　接助（単接）　感動
語り手→木曾殿

よから　う　敵（かたき）　がな。　最後（さいご）　の　いくさ　し　て　見（み）せ
形（ク・未然）　助動（婉曲・連体・「む」の転形）　終助（願望）　格助（体修）　動（サ変・連用）　接助（単接）　動（サ下二・連用）

奉（たてまつ）ら　ん。」　と　て、　控（ひか）へ　たる　ところ　に、　武蔵（むさし）の国（くに）
補動（謙譲・ラ四・未然）　助動（意志・終止）　格助（引用）　接助（単接）　動（ハ下二・連用）　助動（存続・連体）　格助（時間）
巴→木曾殿

に　聞（き）こえ　たる　大力（だいぢから）、御田八郎師重（おんだのはちらうもろしげ）、三十騎（さんじつき）　ばかり　で　出（い）で来（き）　たり。
格助（場所）　動（ヤ下二・連用）　助動（存続・連体）　副助（程度）　格助（手段）　動（カ変・連用）　助動（完了・終止）

⓮巴（ともゑ）、　そ　の　中（なか）　へ　駆（か）け入（い）り、御田八郎（おんだのはちらう）　に　押（お）し並（なら）べ　て、　むずと
代名　格助（体修）　格助（方向）　動（ラ四・連用）　格助（対象）　動（バ下二・連用）　接助（単接）　副

取つ	て	引き落とし、	わ	が	乗つ	たる	鞍	の	前輪	に
動（ラ四・連用・音便）	接助（単接）	動（サ四・連用）	代名	格助（主格）	動（ラ四・連用・音便）	助動（存続・連体）	格助（体修）		格助（対象）	

押しつけ	て、	ちつとも	はたらかさ	ず、	首	ねぢ切つ	て	捨て
動（カ下二・連用）	接助（単接）	副	動（サ四・未然）	助動（打消・連用）		動（ラ四・連用・音便）	接助（単接）	動（タ下二・連用）

てん	げり。
助動（完了・連用・「て」の転形）	助動（過去・終止）

◎口語訳

⓫敵の手にかかることになったら、自害をするつもりなので、木曾殿が最後の戦いに女を連れておられたなどと言われるようなことは、（大将軍の行動として）ふさわしくない。」⓬と、おっしゃったけれども、（巴は）それでも落ちて行こうともしなかったのだが、（木曾殿に）あまりに言われ申して、⓭「ああ、よい敵が現れてほしいものだ。最後の戦いをしてお目にかけよう。」と、馬を引きとめて敵を待っているところに、武蔵の国で名を知られた大力の御田八郎師重が三十騎ほどで出てきた。⓮巴はその中に駆け入って、御田八郎（の馬）に（自分の馬を）強引に並べて、ぐっと組み合って引き落とし、自分が乗っている（馬の）鞍の前輪に（御田を）押しつけて、少しも身動きさせず、首をねじ切って捨ててしまった。

⑮そ　の　のち、物具　脱ぎ捨て、東国　の　方　へ　落ち　ぞ　行く。
代名　格助（体修）　動（タ下二・連用）　格助（体修）　格助（方向）　動（タ上二・連用）　係助（強意・係）　動（カ四・連体・結）

⑯手塚太郎　討ち死に　す。　手塚別当　落ち　に　けり。
動（サ変・終止）　動（タ上二・連用）　助動（完了・連用）　助動（過去・終止）

⑰今井四郎、木曾殿、主従二騎　に　なつ　て　のたまひ　ける　は、
格助（結果）　動（ラ四・連用・音便）　接助（単接）　動（尊敬・ハ四・連用）　助動（過去・連体）　係助（区別）
語り手→木曾殿

「日ごろ　は　何と　も　覚え　ぬ　鎧　が　今日　は
係助（区別）　格助（引用）　係助（強意）　動（ヤ下二・未然）　助動（打消・連体）　格助（主格）　係助（区別）

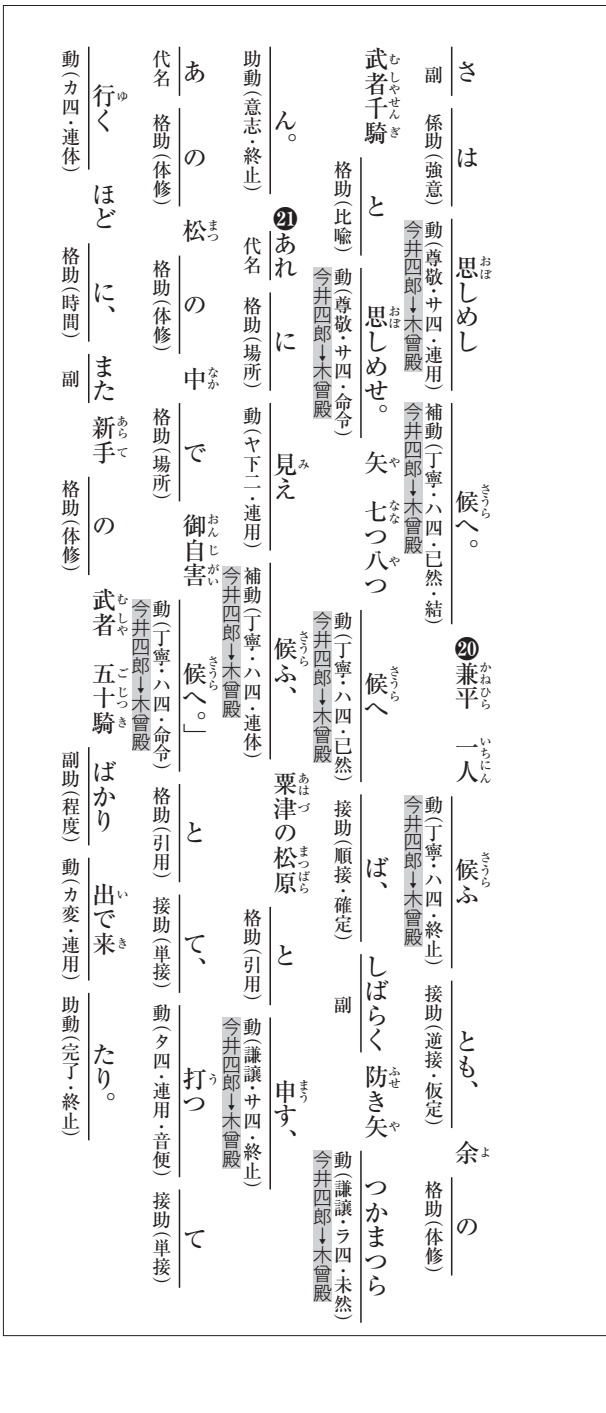
重う　なつ　たる　ぞ　や。」　⑱今井四郎　申し　ける
形（ク・連用・音便）　動（ラ四・連用・音便）　助動（完了・連体）　終助（強意）　間助（詠嘆）　動（謙譲・サ四・連用）　助動（過去・連体）
語り手→木曾殿

は、「御身　も　いまだ　疲れ　させ　給は　ず。　御馬　も
係助（区別）　係助（並列）　副　動（ラ下二・未然）　助動（尊敬・連用）　補動（尊敬・ハ四・未然）　助動（打消・終止）　係助（並列）
今井四郎→木曾殿　今井四郎→木曾殿

弱り　候は　ず。　⑲何　に　よつ　て　か、一領
動（ラ四・連用）　補動（丁寧・ハ四・未然）　助動（打消・終止）　代名　格助（原因）　動（ラ四・連用・音便）　接助（単接）　係助（反語・係）
今井四郎→木曾殿

の　御着背長　を　重う　は　思しめし　候ふ　べき。　それ
格助（体修）　格助（対象）　形（ク・連用・音便）　係助（強意）　動（尊敬・サ四・連用）　補動（丁寧・ハ四・終止）　助動（推量・連体・結）　代名
今井四郎→木曾殿　今井四郎→木曾殿

は　味方　に　御勢　が　候は　ね　ば、臆病　で　こそ
係助（区別）　格助（対象）　格助（主格）　動（丁寧・ハ四・未然）　助動（打消・已然）　接助（順接・確定）　格助（理由）　係助（強意・係）
今井四郎→木曾殿



◎口語訳

⑮そのあと、武具を脱ぎ捨てて、東国の方へ落ちて行った。⑯手塚太郎は討ち死にした。手塚別当は落ちて行った。

⑰今井四郎と木曾殿の主従二騎になって（木曾殿が）おっしゃったことには、「日ごろはなんとも感じない鎧が今日は重くなったぞ。」⑱今井四郎が申しあげたことは、「お体もまだ疲れてはいらっしゃいません。御馬も弱っておりません。⑲どうして、一領の御着背長を重くお思いになるはずがありましょうか。それは味方に軍勢がおりませんので、気後れしてそのようにお思いになるのでしょう。⑳兼平一人でございましても、他の武者千騎（分にあたる）とお思いください。矢が七、八本ございますので、しばらく防ぎ矢をいたしましょう。㉑あそこに見えますのが、粟津の松原と申します、あの松の中で御自害なさいませ。」と言って、（馬に鞭を）打って行くうちに、また新手の武者が五十騎ほど出てきた。

㉒「君は あの 松原へ 入ら せ 給へ。 兼平は
係助(区別) 代名 格助(体修) 格助(方向) 動(ラ四・未然) 助動(尊敬・連用) 補動(尊敬・ハ四・命令) 係助(区別)
今井四郎→木曾殿 今井四郎→木曾殿
この 敵 防き 候は ん。」 と 申し けれ
代名 格助(体修) 動(カ四・連用) 補動(丁寧・ハ四・未然) 助動(意志・終止) 格助(引用) 動(謙譲・サ四・連用) 助動(過去・已然)
今井四郎→木曾殿 語り手→木曾殿
ば、 木曾殿 のたまひ ける は、 ㉓「義仲、都 にて いかに も
接助(順接・確定) 動(尊敬・ハ四・連用) 助動(過去・連体) 係助(区別) 格助(場所) 形動(ナリ・連用) 係助(強意)
語り手→木曾殿
なる べかり つる が、 これ まで 逃れ来る は、 汝 と
動(ラ四・終止) 助動(当然・連用) 助動(完了・連体) 接助(逆接・確定) 代名 副助(範囲) 動(カ変・連体) 係助(区別) 代名 格助(相手)
一所 で 死な ん と 思ふ ため なり。 ㉔所々 で
格助(場所) 動(ナ変・未然) 助動(意志・終止) 格助(引用) 動(ハ四・連体) 助動(断定・終止) 格助(場所)
討た れ ん より も、 ひと所 で こそ 討ち死に
動(タ四・未然) 助動(受身・未然) 助動(婉曲・連体) 格助(比較) 係助(強意) 格助(場所) 係助(強意・係)
を も せ め。」 と て、 馬 の 鼻 を 並べ
格助(対象) 係助(強意) 動(サ変・未然) 助動(勧誘・已然・結) 格助(引用) 接助(単接) 格助(体修) 格助(対象) 動(バ下二・連用)
て 駆け ん と し 給へ ば、 今井四郎 馬
接助(単接) 動(カ下二・未然) 助動(意志・終止) 格助(引用) 動(サ変・連用) 補動(尊敬・ハ四・已然) 接助(順接・確定)
語り手→木曾殿
より 飛び降り、 主 の 馬 の 口 に 取りつい て 申し
格助(起点) 動(ラ上二・連用) 格助(体修) 格助(体修) 格助(対象) 動(カ四・連用・音便) 接助(単接) 動(謙譲・サ四・連用)
語り手→木曾殿

ける(助動(過去・連体)) は、(係助(区別)) ㉕「弓矢取り(ゆみやとり) は(係助(区別)) 年ごろ(としごろ) 日ごろ(ひごろ) いかなる(形動(ナリ・連体)) 高名(かうみやう) 候へ(さうら)(動(丁寧・ハ四・已然) 今井四郎→木曾殿) ども、(接助(逆接・確定))

最期(さいご) の(格助(体修)) とき 不覚し(ふかく)(動(サ変・連用)) つれ(助動(完了・已然)) ば、(接助(順接・確定)) 長き(なが)(形(ク・連体)) 疵(きず) に(助動(断定・連用)) て(接助(単接))

候ふ(さうら)(補動(丁寧・ハ四・連体) 今井四郎→木曾殿) なり。(助動(断定・終止)) ㉖御身(おんみ) は(係助(区別)) 疲れ(つか)(動(ラ下二・未然)) させ(助動(尊敬・連用) 今井四郎→木曾殿) 給ひ(たま)(補動(尊敬・ハ四・連用) 今井四郎→木曾殿) て(接助(単接))

候ふ(さうら)。(補動(丁寧・ハ四・終止) 今井四郎→木曾殿) 続く(つづ)(動(カ四・連体)) 勢(せい) は(係助(区別)) 候は(さうら)(動(丁寧・ハ四・未然) 今井四郎→木曾殿) ず。(助動(打消・終止))

◎口語訳

㉒「殿はあの松原へお入りください。兼平はこの敵を防ぎましょう。」と申しあげたところ、木曾殿がおっしゃったことには、㉓「義仲は都で最期を遂げるはずであったが、ここまで逃れてきたのは、おまえと同じ場所で死のうと思うためである。㉔別々の場所で討たれるよりも、同じ場所で討ち死にをしよう。」と言って、(今井と)馬の鼻を並べて走らせようとなさるので、今井四郎は馬から飛び降り、主君の馬の轡(くつわ)に取りついて申しあげたことには、㉕「武士は長年、常日ごろどのような高い名声がございましても、最期のときに思わぬ失敗をしてしまうと、末代までの不名誉となります。㉖(殿の)お体はお疲れになっていらっしゃいます。(あとに)続く(味方の)軍勢はございません。

㉗敵（かたき）　に　押し隔（へだ）て　られ、　いふかひなき　人（ひと）　の　郎等（らうどう）　に　組み落（お）とさ　れ
格助（受身）　動（タ下二・未然）　助動（受身・連用）　形（ク・連体）　格助（体修）　格助（受身）　動（サ四・未然）　助動（受身・未然）

させ　給（たま）ひ　て、　討（う）た　れ　させ　給ひ
助動（尊敬・連用）　補動（尊敬・ハ四・連用）　接助（単接）　動（タ四・未然）　助動（受身・未然）　助動（尊敬・連用）　補動（尊敬・ハ四・連用）
今井四郎→木曾殿　今井四郎→木曾殿　今井四郎→木曾殿　今井四郎→木曾殿

な　ば、『さばかり　日本国（にっぽんごく）　に　聞（き）こえ　させ　給ひ
助動（完了・未然）　接助（順接・仮定）　副　格助（場所）　動（ヤ下二・未然）　助動（尊敬・連用）　補動（尊敬・ハ四・連用）
（敵）→木曾殿　（敵）→木曾殿

つる　木曾殿（きそどの）　を　ば、それがし　が　郎等（らうどう）　の　討（う）ち　奉（たてまつ）つ
助動（完了・連体）　格助（対象）　係助（強意）　代名　格助（体修）　格助（主格）　動（タ四・連用）　補動（謙譲・ラ四・連用・音便）
（敵）→木曾殿

たる。』　なんど　申（まう）さ　ん　こと　こそ　口惜（くちを）しう　候（さうら）へ。
助動（完了・連体）　副助（例示）　動（謙譲・サ四・未然）　助動（婉曲・連体）　係助（強意・係）　形（シク・連用・音便）　補動（丁寧・ハ四・已然・結）
今井四郎→木曾殿　今井四郎→木曾殿

㉘ただ　あ　の　松原（まつばら）　へ　入（い）ら　せ　給（たま）へ。」　と　申（まう）し
副　代名　格助（体修）　格助（方向）　動（ラ四・未然）　助動（尊敬・連用）　補動（尊敬・ハ四・命令）　格助（引用）　動（謙譲・サ四・連用）
今井四郎→木曾殿　今井四郎→木曾殿　今井四郎→木曾殿　語り手→木曾殿

けれ　ば、　木曾（きそ）、「さらば。」　と　て、　粟津（あはづ）の松原（まつばら）　へ　ぞ
助動（過去・已然）　接助（順接・確定）　接続　格助（引用）　接助（単接）　格助（方向）　係助（強意・係）

駆（か）け　給（たま）ふ。
動（カ下二・連用）　補動（尊敬・ハ四・連体・結）
語り手→木曾殿

㉙今井四郎（いまゐのしらう）　ただ　一騎（いっき）、五十騎（ごじっき）　ばかり　が　中（なか）　へ　駆（か）け入（い）り、鐙（あぶみ）　踏（ふ）んばり　立（た）ちあがり、
副　副助（程度）　格助（体修）　格助（方向）　動（ラ四・連用）　動（ラ四・連用）　動（ラ四・連用）

大音声 | 挙げ | て | 名のり | ける | は、 | ㉚「日ごろ | は | 音に | も
動(ガ下二・連用) | 接助(単接) | 動(ラ四・連用) | 助動(過去・連体) | 係助(区別) | | 係助(区別) | 格助(手段) | 係助(強意)

聞き | つ | らん、 | 今 | は | 目 | に | も | 見 | 給へ。
動(カ四・連用) | 助動(強意・終止) | 助動(現在推量・終止) | 係助(区別) | | 格助(手段) | 係助(強意) | 動(マ上一・連用) | 補動(尊敬・ハ四・命令) 今井四郎→(敵)

木曾殿 | の | 御乳母子、今井四郎兼平、生年 | 三十三 | に | まかりなる。
格助(体修) | | | | 格助(結果) | 動(謙譲・ラ四・終止) 今井四郎→(敵)

◎口語訳

㉗敵に押し隔てられ、とるにたりない者の家来に（馬から）組み落とされなさって、お討たれになってしまわれたならば、『あれほど日本国中で有名でいらっしゃった木曾殿を、誰それの家来がお討ち申しあげた。』などと申すようなことこそ残念でございます。㉘ただただ、あの松原へお入りください。」と申しあげたので、木曾殿は「それならば。」と言って、粟津の松原へ（馬を）走らせなさる。

㉙今井四郎はただ一騎で、五十騎ほどの（敵の）中へ駆け入り、鐙を踏ん張り立ちあがり、大音声を挙げて名のったことには、㉚「日ごろは話にも聞いていただろう、今は（その）目でご覧あれ。木曾殿の御乳母子、今井四郎兼平、生年三十三になり申す。

㉛さる　者　あり　と　は、　鎌倉殿　まで　も　知ろしめさ　れ
連体　動（ラ変・終止）　格助（引用）　係助（区別）　副助（範囲）　係助（強意）　動（尊敬・サ四・未然）　助動（尊敬・連用）
今井四郎→鎌倉殿　今井四郎→鎌倉殿

たる　らん　ぞ。　兼平　討つ　て　見参　に　入れよ。」　と
助動（存続・連体）　助動（現在推量・連体）　終助（念押）　動（タ四・連用・音便）　接助（単接）　格助（対象）　動（ラ下二・命令）　格助（引用）

て、　射残し　たる　八筋　の　矢　を、　差しつめ　引きつめ、　さんざんに
接助（単接）　動（サ四・連用）　助動（存続・連体）　格助（体修）　格助（対象）　動（マ下二・連用）　動（マ下二・連用）　形動（ナリ・連用）

射る。　㉜死生　は　知ら　ず、　やにはに　敵　八騎　射落とす。　㉝そ　の
動（ヤ上一・終止）　係助（区別）　動（ラ四・未然）　助動（打消・連用）　副　動（サ四・終止）　代名　格助（体修）

のち　打ち物　抜い　て、　あれ　に　馳せ合ひ、　これ　に　馳せ合ひ、　切つ
動（カ四・連用・音便）　接助（単接）　代名　格助（場所）　動（ハ四・連用）　代名　格助（場所）　動（ハ四・連用）　動（ラ四・連用・音便）

て　回る　に、　面　を　合はする　者　ぞ　なき。　㉞分捕り　あまた
接助（単接）　動（ラ四・連体）　接助（順接・確定）　格助（対象）　動（サ下二・連体）　係助（強意・係）　形（ク・連体・結）　副

し　たり　けり。　㉟ただ、「射取れ　や。」　と　て、　中　に
動（サ変・連用）　助動（完了・連用）　助動（過去・終止）　副　動（ラ四・命令）　間助（呼）　格助（引用）　接助（単接）　格助（場所）

取りこめ、　雨　の　降る　やうに　射　ける　ども、　鎧　よけれ
動（マ下二・連用）　格助（主格）　動（ラ四・連体）　助動（比況・連用）　動（ヤ上一・連用）　助動（過去・已然）　接助（逆接・確定）　形（ク・已然）

ば　裏　かか　ず、　あき間　を　射　ね　ば　手
接助（順接・確定）　動（カ四・未然）　助動（打消・連用）　格助（対象）　動（ヤ上一・未然）　助動（打消・已然）　接助（順接・確定）

も	負(お)は	ず。
係助(添加)	動(ハ四・未然)	助動(打消・終止)

◎口語訳

㉛そのような者がいるとは、鎌倉殿までもご存じでいらっしゃるだろうよ。兼平を討って（この首を）ご覧に入れよ。」と言って、射残していた八本の矢を、（弓に）つがえては引き、つがえては引き、さんざんに射る。㉜（相手が）死んだか生きているかはわからないが、あっというまに敵八騎を射落とす。㉝そのあとは刀を抜いて、あちらに（馬を）走らせては戦い、こちらに（馬を）走らせては戦い、斬って回るが、正面から立ち向かう者はいない。㉞敵の首をたくさん討ち取ったのだった。㉟（敵は）ただ「射殺せ。」と言って、（今井を）中に取り囲んで、雨の降るように（矢を）射たが、鎧がよいので（矢が）裏まで通らず、（鎧の）すきまを射ないので（今井は）傷も負わない。

㊱木曾殿は　ただ　一騎、粟津の松原へ　駆け　給ふ　が、
格助（区別）　副　格助（方向）　動（カ下二・連用）　補動（尊敬・ハ四・連体）　接助（単接）
語り手→木曾殿

正月二十一日、入相　ばかり　の　こと　なる　に、　薄氷　は　張つ
副助（程度）　格助（体修）　助動（断定・連体）　接助（順接・確定）　係助（強意）　動（ラ四・連用・音便）

たり　けり、　深田　あり　と　も　知ら　ず　して、馬
助動（存続・連用）　助動（過去・終止）　動（ラ変・終止）　格助（引用）　係助（強意）　動（ラ四・未然）　助動（打消・連用）　接助（単接）

を　ざつと　うち入れ　たれ　ば、　馬　の　頭　も　見え
格助（対象）　副　動（ラ下二・連用）　助動（完了・已然）　接助（順接・確定）　格助（体修）　係助（強意）　動（ヤ下二・未然）

ざり　けり。　㊲あふれ　ども　あふれ　ども、　打て　ども
助動（打消・連用）　助動（過去・終止）　動（ラ四・已然）　接助（逆接・確定）　動（ラ四・已然）　接助（逆接・確定）　動（タ四・已然）　接助（逆接・確定）

打て　ども　はたらか　ず。　㊳今井　が　行方　の　おぼつかなさ　に、
動（タ四・已然）　接助（逆接・確定）　動（カ四・未然）　助動（打消・終止）　格助（体修）　格助（体修）　格助（理由）

ふり仰ぎ　給へ　る　内甲　を、　三浦　の　石田次郎為久　追つかかつ
動（ガ四・連用）　補動（尊敬・ハ四・已然）　助動（完了・連体）　格助（対象）　格助（体修）　動（ラ四・連用・音便）
語り手→木曾殿

て　よつ引い　て　ひやうふつと　射る。　㊴痛手　なれ　ば、　真向
接助（単接）　動（カ四・連用・音便）　接助（単接）　副　動（ヤ上一・終止）　助動（断定・已然）　接助（順接・確定）

を　馬　の　頭　に　当て　て　うつ伏し　給へ　る　ところ
格助（対象）　格助（体修）　格助（対象）　動（タ下二・連用）　接助（単接）　動（サ四・連用）　補動（尊敬・ハ四・已然）　助動（完了・連体）
語り手→木曾殿

に、	石田	が	郎等	二人	落ち合う	て、	つひに	木曾殿	の	首	を	ば
格助（場所）	格助（体修）		動（ハ四・連用・音便）		接助（単接）	副		格助（体修）		格助（対象）	係助（強意）	

取つ	てん	げり。	㊵太刀	の	先	に	貫き、	高く
動（ラ四・連用・音便）	助動（完了・連用・「て」の転形）	助動（過去・終止）		格助（体修）	格助（場所）	動（カ四・連用）	形（ク・連用）	

さし上げ、	大音声	を	挙げ	て、
動（ガ下二・連用）		格助（対象）	動（ガ下二・連用）	接助（単接）

◎口語訳

㉟木曾殿はただ一騎で、粟津の松原へ（馬を）走らせなさるが、正月二十一日、夕暮れ頃の（薄暗かった）ことである上に、薄氷が張っていたため、深田があるとも知らずに、馬をざっと乗り入れたところ、（馬が沈んで）馬の頭も見えなくなった。㊲（鐙で馬の腹を）蹴っても蹴っても、（鞭で）打っても打っても（馬は）動かない。㊳今井の行方が気がかりで、振り返って（顔を）お上げになったかぶとの内側を、三浦の石田次郎為久が追いすがって（弓を）よく引いて（矢を）ひょうと射る。㊴深い傷なので、かぶとの正面を馬の頭に当ててうつ伏しなさったところに、石田の家来二人が（その場に）駆けつけて、とうとう木曾殿の首を取ってしまった。㊵（その首を）太刀の先に貫いて高くさし上げ、大声を挙げて、

㊶「こ　の　日ごろ　日本国　に　聞こえ　させ　給ひ　つる
代名　格助（体修）　格助（場所）　動（ヤ下二・未然）　助動（尊敬・連用）　補動（尊敬・ハ四・連用）　助動（完了・連体）
木曾殿　を　ば、　三浦　の　石田次郎為久　が　討ち　奉つ
格助（対象）　係助（強意）　格助（体修）　格助（主格）　動（タ四・連用）　補動（謙譲・ラ四・連用・音便）
石田次郎→木曾殿　石田次郎→木曾殿　石田次郎→木曾殿
たる　ぞ　や。」　と　名のり　けれ　ば、　今井四郎　いくさ
助動（完了・連体）　終助（念押）　間助（呼）　格助（引用）　動（ラ四・連用）　助動（過去・已然）　接助（順接・確定）
し　ける　が、　これ　を　聞き、　㊷「今　は　誰　を　かばは
動（サ変・連用）　助動（過去・連体）　接助（逆接・確定）　代名　格助（対象）　動（カ四・連用）　係助（区別）　代名　格助（対象）　動（ハ四・未然）
ん　と　て　か、　いくさ　を　も　す　べき。　これ
助動（意志・終止）　格助（引用）　接助（単接）　係助（反語・係）　格助（対象）　係助（強意）　動（サ変・終止）　助動（当然・連体・結）　代名
を　見　給へ、　東国　の　殿ばら、日本一　の　剛　の　者　の
格助（対象）　動（マ上一・連用）　補動（尊敬・ハ四・命令）　格助（体修）　格助（体修）　格助（体修）　格助（主格）
今井四郎→（敵）
自害する　手本。」　㊸　と　て、　太刀　の　先　を　口　に　含み、　馬　より
動（サ変・連体）　格助（引用）　接助（単接）　格助（体修）　格助（対象）　格助（場所）　動（マ四・連用）　格助（起点）
逆さまに　飛び落ち、　貫かつ　て　ぞ　失せ　に　ける。
形動（ナリ・連用）　動（タ上二・連用）　動（ラ四・連用・音便）　接助（単接）　係助（強意・係）　動（サ下二・連用）　助動（完了・連用）　助動（過去・連体・結）

㊹さて	こそ	粟津（あはづ）	の	いくさ	は	なかり	けれ。
副	係助（強意・係）		格助（体修）		係助（区別）	形（ク・連用）	助動（過去・已然・結）

◎口語訳

㊶「この日ごろ、日本国中で有名でいらっしゃった木曾殿を、三浦の石田次郎為久がお討ち申しあげたぞ。」と名のったので、今井四郎は戦っていたが、これを聞いて、㊷「今となっては、誰をかばおうと思って、いくさをする必要があろうか（、その必要はない）。これをご覧あれ、東国の殿方よ、日本一の豪傑が自害する手本ぞ。」㊸と言って、太刀の先を口に含み、馬から逆さまに飛び落ち、（太刀に）貫かれて死んでしまった。㊹こうして粟津の合戦は終わったのだった。

◉展開図

義仲主従の行動、心情を軸として、物語の展開を押さえておく。

	義仲の行動	義仲の心情	巴・今井の行動、心情	敵軍の様子
①	**最後の戦いに臨む** ・豪奢な装束 ・勇ましい名のり ← 奮戦するも多勢に無勢 ← 主従五騎となる	最後の戦いを覚悟 勇猛果敢		一条次郎軍との戦い 義仲を討って手柄をあげよう ← 土肥軍はじめいくつもの軍勢が立ち向かう
②	**巴との別れ** 巴に逃げるよう命ずる ← 言うことを聞かない巴に強く言う	最後の戦いに女を伴っているのは望ましくない 巴だけは逃がしてやりたい 男としての強さ、優しさ	**巴** 義仲の命を聞かない 愛する人と最後までいっしょにいたい 再三の命にようやく従う ← 最後に一戦する。御田八郎を簡単にねじ伏せる 強い将を一人でも討っておくことで、少しでも義仲のためになればとの思い 義仲に自身の最後の活躍を見てほしい	御田八郎 大力で有名 簡単に討ち取られる

③			
今井との対話 鎧が重い いっしょに死のう ← 今井に説得され、自害を決意する	巴の前とは違う弱音 大将軍としての潔い死よりも乳母といっしょに死ぬことを願う 主従の結びつきの強さ	**今井** 叱咤して励ます ← 優しい言葉をかける 主人に立派な最期を遂げさせたい	
④			
義仲の最期 松原に向かうも、後ろを振り向き、射られて絶命する	今井が気がかり	**今井** 名のりを挙げて、敵軍に斬ってかかる 主人が自害するまでの時間稼ぎ	五十騎で立ち向かうも、今井を討てず 石田次郎為久、義仲を射る
⑤			
粟津の戦終了		**今井の最期** 大音声を挙げ、自害 もはや守るべき存在はいない 主人の分まで潔い死を遂げたい	

語句・文脈の解説と脚問・発問

284ページ

L1　源義仲（木曾義仲）　源義仲（一一五四年～一一八四年）。源頼朝のいとこにあたる。木曾（現在の長野県木曽郡木曽町辺り）で育ったため「木曾」「木曾殿」と呼ばれる。源為義の孫。源義賢の次男、幼名駒王丸。源氏の内紛により、二歳の時、父義賢が甥の悪源太義平に討たれたのち、乳母の夫であった信濃の権頭中原兼遠に引き取られ、木曾で育ったので、「木曾義仲」「木曾殿」などと呼ばれた。一一八〇（治承四）年、以仁王の令旨を受けて挙兵、北陸路から進撃し、一一八三（寿永二）年、七月に平家を追い落として京に入り、八月十日の除目で後白河院から左馬頭（左馬寮の長官）に任ぜられ、越後の国を賜り、十六日に伊予守に遷った。『平家物語』ではその理由を、義仲が越後を嫌ったので伊予に変更されたとし（記録では確認できない）、あわせて朝日の将軍という院宣まで下されたとする。しかし後白河院を中心とする貴族との対立、水島合戦での敗北などで孤立した。同年十二月、源頼朝に義仲追討の院宣が下り、範頼・義経軍に追討される立場となった。

L3　後白河法皇　一一二七年～一一九二年。鳥羽天皇の第四皇子、母は待賢門院璋子。諱は雅仁。一一五五（久寿二）年に近衛天皇が早世したため、二十九歳で即位する。一一五八（保元三）年に二条天皇に譲位し、以後五代にわたって院政を執ることとなる。「和漢の間に比類少なき暗主」という信西の評などで、その人となりをいわれることが多い。『平家物語』では、ほぼ最初から最後まで登場する唯一の人物であり、物語の陰の主役ともみなせる。

L3　源頼朝　一一四七年～一一九九年。源氏の武将。源範頼、源義経の異母兄。鎌倉幕府の初代将軍となる人物。平家追討のために挙兵したとはいっても、範頼や義経を大将軍に任命して行かせ、自身は鎌倉にいて出陣することはなかった。

L4　源範頼　？～一一九三年。源頼朝の異母弟である。源義経にとっては異母兄にあたる。遠江蒲御厨で成長したので、「蒲冠者」「蒲御曹司」と呼ばれた。頼朝の代官として義経とともに義仲ならびに平家の追討にあたる。

L4　源義経　一一五九年～一一八九年。源頼朝の異母弟である。平治の乱で父義朝が敗死、出家を条件に命を救われ、鞍馬寺に預け

脚問・発問

284ページ

問　**義仲の装束描写（7～11行「木曾左馬頭～乗つたりける」）にはどのような効果があるか、説明せよ。**

答　鮮やかな色彩や、質の高い素材を示すことで、大将軍たるにふさわしい豪華な装いであることが表現されている。

（解説）「板書例」「鑑賞」参照。

《板書例》

義仲の装束描写

- 赤地の錦の直垂
- 唐綾縅の鎧
- 厳形打つたる甲
- 石打ちの矢
- 滋籐の弓
- 鬼葦毛といふ馬
- 金覆輪の鞍

防具／武器／馬（乗り物）

- 着装順
  - 出陣までの流れを装束で示す
  - 大将軍にふさわしい装束（波線）
    - 素材・色

られたが脱出し、奥州平泉の藤原秀衡（ひでひら）の庇護を受けた。頼朝が伊豆で挙兵した際、その軍門に参加するために彼を訪問、初めて対面することになる。頼朝の代官として範頼とともに京都へ向かい、義仲を討ち入洛した。その後の一の谷、屋島の合戦で平家を撃破、壇の浦の合戦で平家を壊滅させた。

コラム

源義仲の呼称について

「木曾の最期」では「殿」をつけて呼ばれている義仲だが、巻八の「猫間」などではかなり馬鹿にされた書かれ方をしている。頼朝と比べ、立ち居振る舞いが武骨で、言葉つきが聞き苦しい、困った男だと評される義仲は、猫間中納言光隆卿が訪ねてきた時も賓客を「猫が人間に対面するのか」と大笑いし、「猫（殿）」呼ばわりする、礼儀作法もわきまえない田舎者の扱いをされる。また、牛車に乗った際に中で仰向けに転がったり、前から降りることになっている牛車を後ろから降りたりと、滑稽な振る舞いをする野蛮人として描かれ、「殿」抜きの「木曾」と呼ばれている。なお、該当する章段は、「参考3」を参照されたい。

L5 大津打出の浜　現在の滋賀県大津市打出浜の付近。都から逢坂（おうさか）山を越えて、琵琶湖のほとりに打ち出たところの浜の意か、とされる。

L7 木曾左馬頭　ここでは義仲を指す。「左馬頭」は令制で「左馬寮」の長官。義仲については先に解説したとおりである。

L7 赤地の錦の直垂　「直垂」は鎧の下に着るもの。袴が短く、袖や裾を紐でくくる。「赤地の錦」は赤の地色に金銀糸を織り込んだ、厚手で華麗な絹織物。赤地は気品高い華麗な色。豪華な「錦の直垂」は、大将軍のみが身に着けることのできる装束。

L7 唐綾縅の鎧　中国渡来の絹織物（綾）を細長く裁ち、芯に麻を入れて縅に使った鎧。唐綾は中国伝来の綾織の絹織物のこと。国産のものと違って、舶来の高級品。鎧は細長い板状のもの（札）からできている。札は、短冊状の牛の革を漆で塗り込めて、横につづり合わせて板のようにし、色とりどりの革や布のひもで上下につなげて（＝縅して）作りあげる。唐綾縅は、このつづる紐に、高級な唐綾を用いたものである。一般の糸縅とは異なって、光沢があり、文様が織り込まれているのでたいへん華麗なものであった。やや脆弱で縅すのに技術が要り、手数がかかるので、

問 **義仲の装束描写（7〜11行）の中で、音便化した箇所を抜き出し、もとの形に改めよ。**

答 打つたる→打ちたる、残つたる→残りたる、持つて→持ちて、太う→太く、たくましい→たくましき、置いて→置きて、乗つたりける→乗りたりける

（解説）「つ」となるのは促音便、「う」となるのはウ音便、「イ」となるのは イ音便。なお、ここには登場しないが、この他に撥音便がある。撥音便は「ん」となる。

問 **「石打ちの矢の〜残つたるを」（8行）の「の」、「鬼葦毛といふ馬の〜たくましいに」（10行）の「の」の用法を指摘し、口語訳せよ。**

答 用法…同格。
口語訳…石打ちの矢で、その日の合戦で少々残っていた矢を。
鬼葦毛という馬で、きわめて太くたくましい馬に。

（解説） 次ページ「板書例」参照。

問 **義仲の名のり（12〜13行「昔は〜源義仲ぞや。」）の中に見られる対比表現を指摘せよ。**

答 昔―今、聞く―見る、けん―らん、木曾の冠者―左馬頭兼伊予守、朝日の将軍。

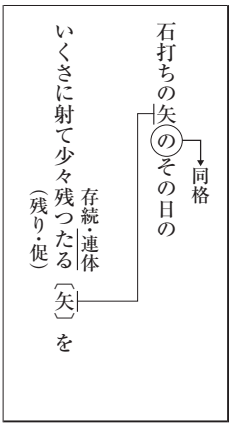
身分ある武将のみが用いた。

L7　鍬形打つたる甲　「鍬形」は、甲の前立て物のひとつで、甲の目庇から突き出た二本の角のような金属製の飾り。鍬をかたどったところからこの名となる。武将の威厳を示す。

L8　厳物作りの大太刀はき　外装をいかめしく頑丈に造った大ぶりの太刀。「はく」は「帯く・佩く」の字をあて、刀・矢などを腰につける、身に帯びる動作をいう。

L8　石打ちの矢～残つたるを　「石打ちの矢」は、鷲が飛翔する時に強く大地を打つ、尾の両端の石打羽ではいだ矢。羽の質が強く、大将軍の料として用いられた。「矢の」の「の」は同格。石打ちの矢であり、なおかつ、その日の戦いで使って少々残っていた矢、ということである。

《板書例》



L9　頭高に負ひなし　箙に差した矢の先端が頭より高く突き出るように。矢筈（矢の末端の弦につがえる部分）が肩の上に高く突き出るように箙を背負うさま。「……なす」とは、意図的に……する、わざわざ……するという意を添える。つまり、意識して矢を高く背負ったのである。この動作は、攻撃の際に素早く矢を抜けるようにするためともファッション性を求めるためともいわれる。

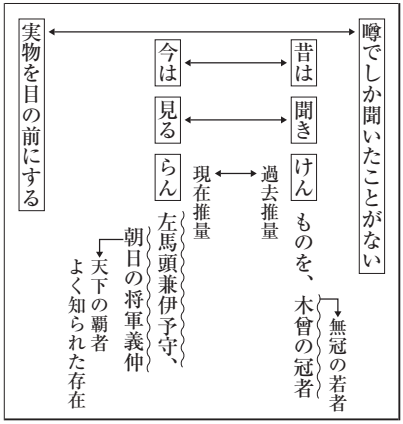
L9　滋籐の弓　黒漆を塗り、その上に白い籐を何重にも巻いた弓。弓の幹を漆で黒塗りにし、その上に籐をやや間をあけて数多く巻き付けたもの。巻き方や間隔などによって、村重籐、塗籠籐などの種類がある。

L10　木曾の鬼葦毛といふ馬の～たくましいに　「葦毛」は馬の毛色で、白い毛に黒色・濃褐色などの毛が混じったもの。「鬼」は強さを表す。日本の在来種の馬で、標準的な体高（前脚の蹄から頸の根元の鬐甲骨までの高さ）が一二〇センチメートル。現在のサラブレッドのように大きくはないが、種全体から見ると標準的な大きさの馬である。どれほどの能力をもっていたかは不明だが、鎧などの武具一式を身に付け体重も合わせて百キロを超える人間を乗せて駆けたことから考えると、かなりの馬力をもっていたと考えられる。当時蹄鉄や去勢の技術はなく、気性も荒かったと考えられる。「馬の」の「の」は同格（→発問）。

（解説）「板書例」参照。名詞だけではなく、「けん」「らん」という助詞においても対比的な表現を用いているのである。

《板書例》

対比的表現1



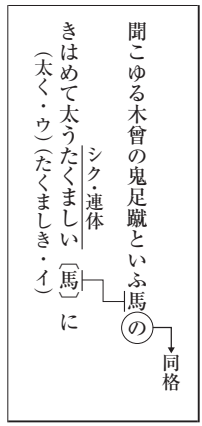
問　名のりには、当時どのような目的があったのか。

答　周囲に自分の存在を誇示するため。

（解説）　名のりは当時の開戦時の儀式であった。当時の武士にとっては、戦場での活躍はその後の恩賞にも響いてくるものであり、そのためには、周囲の人に証人となってもらう必要があった。自分が落命した場合にも、自身の奮戦が伝わっていれば、遺

名高い木曾の鬼葦毛という馬で、なおかつ、きわめて肥えたたくましい馬、の意である。

《板書例》



L10　金覆輪の鞍　鞍の縁を金や金色の金属で覆って装飾したもの。「黄覆輪」とも。

L11　鐙踏んばり　「鐙」は、馬の鞍から左右に垂れ下げた、乗り手が脚をかけるための馬具。「踏んばり」は「踏みはり」の撥音便。

L11　大音声を挙げて名のりける　武士は晴れの戦場で、自分の存在や戦いぶりを誇示するために必ず名のりを挙げた。後日の恩賞のために自分の功績を顕示する意味もある（→発問）。

L12　昔は〜源義仲ぞや　昔は噂で聞いていたであろう、木曾の冠者のことを、今、（お前たちはその人物）左馬頭兼伊予守、朝日の将軍源義仲を、目の当たりにしているのだぞ、という意。「聞きけんものを」は、四段動詞「聞く」の連用形「聞き」＋過去推量「けん」の連体形「けん」＋逆接の確定条件の接続助詞「ものを」。「見るらん」は、上一段動詞「見る」の終止形「見る」＋現在推量「らん」の終止形「らん」。「昔」と「今」、「聞く」と「見る」、「けん」と「らん」、さらに「冠者」と現在の堂々たる肩書きといったように、対比的な表現を並べ、かつての無官の冠者が天下の覇者となったことを誇示している（→発問）。

L12　冠者　元服して冠を着けた若者。義仲は入京して任官するまでは無位無官で、「木曾の冠者」と呼ばれた。

L12　伊予守　伊予の国の国司。「伊予」は現在の愛媛県。巻八「名虎」に一一八三（寿永二）年八月十日に「院の殿上にて除目おこなはる。木曾は左馬頭になつて、越後の国を給はる。その上朝日の将軍といふ院宣を下されけり。十郎蔵人は備後守になる。木曾は越後を嫌へば、伊予をたぶ。十郎蔵人、備後を嫌へば、備前をたぶ。」とあり、物語内ではたしかに伊予守となっており、齟齬はない。ちなみに、記録類にも八月十日に越後守となり、八月十六日に伊予に遷ったことが確認できるが（『百錬抄』）、不満を言ったのは十郎蔵人行家のみで（『玉葉』八月十二日条）、義仲に関してはそのような記述はない。

L12　朝日の将軍　「伊予守」の項に引用したとおり、『平家物語』には、朝日の将軍の宣下された一族に恩賞が与えられるのである。武士たちが積極的に自身をアピールするのはそのためである。軍記物語における名のりも、そういった実態の反映なのだが、あわせて、物語としての人物像形成の一つの手法であったともいえよう。当該場面の義仲の名のりなどは当然、恩賞をねらったものだということはなく、単純にその勇ましさを表現するために用意されたものといえよう。

問　「義仲討つて、兵衛佐に見せよや」（13行）には、義仲のどのような思いがこめられていると考えられるか。

答　頼朝のことを「兵衛佐」と呼ぶことで、「将軍」である自分の優位性を主張して自分の価値の高さを示し、相手を挑発する気持ち。

（解説）　この段階では、義仲は華々しい最期を迎えてやろうという思いが強く、その勇ましさが表れている。こういった勇ましさが、このあと徐々に薄れていくのである。

があったことが記されている。しかし、記録類ではこの称号は確認できず、『大日本史』などは義仲の自称であろうとの推測を呈している。ちなみに、『玉葉』寿永三（一一八四）年正月十五日条には義仲に征東大将軍の宣下があったこと、そして、『三槐荒涼抜書要』（『山槐記』と『荒涼記』の抜き書き）建久三（一一九二）年七月九日条には義仲が征東大将軍であったことが記され、また、『吾妻鏡』寿永三（一一八四）年正月十日、二十日条や『百錬抄』同年正月十一日条には征夷大将軍の宣下の記録が残されるように、「征東」と「征夷」の違いはあるものの、「大将軍」の地位にあったことは事実のようである。

L13　甲斐の一条次郎　一条次郎忠頼。？～一一八四年。武田信義の息子。「甲斐」は現在の山梨県。頼朝方の武将。一条郷（山梨県甲府市内）を本拠としたため、一条次郎と呼ばれる。巻四「源氏揃」で、父とともに甲斐源氏として列挙されている。延慶本や長門本などでは、一一八四（寿永三）年二月一の谷の合戦にも参加していたことが記される。『吾妻鏡』によれば、同年六月十六日に（延慶本、『源平盛衰記』では四月二十六日）突如頼朝によって誅殺される。

L13　互ひによい敵ぞ　「よい敵」（「よき敵」のイ音便形）とは自分にふさわしい相手、の意。源平合戦の時代は、戦場における武士の身分の差別はとても厳重で、戦う相手を選んだり嫌ったりすることがあった。自分より格上の相手、つまり「よき敵」の首をとることが名誉であり功名であった反面、自分より身分の低い敵を相手にすることには否定的だったのである。一条次郎は甲斐源氏武田信義の子で、富士川の戦いでも活躍をしており、また義仲は、自身の血筋、そして、これまでの武勇に対する自負があったため、「互ひによい敵」だと評価したのであろう。

L14　兵衛佐　源頼朝のこと。令制で「兵衛府」の次官。『平家物語』では、一一五九（平治元）年に右兵衛権佐に任じられた源頼朝の呼称として「兵衛佐（殿）」が他出する。頼朝については「源頼朝」の項参照。

285ページ

L1　大将軍　軍の総指揮者、総大将。征夷大将軍の意で使われることもあるが、ここでは、単純に総大将の意で用いられているか。

L1　あますな者ども、もらすな若党　「あますな」「もらすな」は、討ち残すな、討ちもらすなの意。「な」は禁止の終助詞。「若党」は、年の若い郎等たち。（→発問）

285ページ

問　**「あますな」「もらすな」（1行）とは何をどうすることか。**

答　義仲軍を取り逃がさないよう、討ちもらさないようにすること。

（解説）　三百余騎対六千余騎という圧倒的に優勢な状況下にあって、敵を取り逃がすようなことは絶対に許されるものではなく、そのため、一条軍は、直後に記されるとおり、「大勢の中に取りこめ」る包囲戦をとるのである。

脚問　**「縦様・横様・蜘蛛手・十文字」（3行）とは何を表しているか。**

答　縦横無尽に敵陣の中を駆け入るさま。奮闘ぶりを示す。

（解説）　軍記物語の定型表現である。

問　**義仲軍の数と敵軍の数の変化を記すことで、何を表現しようとしているのか。**

答　大軍の中を少人数ながらも奮戦する姿、そして、激しい戦いが続いたことを表現する。

（解説）　戦いの様子を具体的に描いていくよりも、あえて数字のみをリズムよいテンポで示していく方が、合戦の激しさを効果的に伝えられるのである。

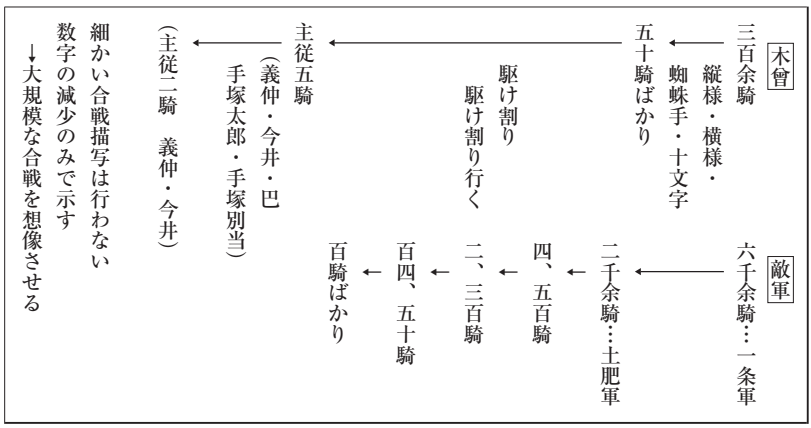
L3 縦様・横様・蜘蛛手・十文字に駆け割つて 「縦様・横様」は「十文字」と同じで、東から西、南から北へと馬をかけめぐらせること。「蜘蛛手」は、蜘蛛が手を広げるように八方に走り回るさま。軍記物語の合戦描写での定型表現で、縦横無尽に馬をとばし敵陣を蹂躙することを示す（→脚問）。

L4 土肥次郎実平 ?〜一一九一年?。相模の国土肥（現在の神奈川県湯河原町）に住む、頼朝方の武将。相模の国土肥郷（神奈川県足柄下郡湯河原町・真鶴町）を拠点とする武士。石橋山の敗戦での頼朝七騎落ちの中の一人であり、頼朝も彼には強い信頼をおいていた。義仲追討はもちろん、その後の平家追討にも参加している。

L5 ささへたり 「ささふ」は防ぐ、阻む、食い止めるの意。義仲を討ちもらすまいとして、敵軍は幾重にも陣を構えていたのである。

L7 巴 義仲の寵愛を受ける女性。武勇に秀でており、ここまで義仲とともに戦ってきた。生没年、系譜未詳。「木曾の最期」前半部分（［参考1］参照）に、一一八四（寿永三）年一月の義仲の最後の戦いに従う大力の便女（びんじょ）として登場する。便女とは侍女のことで、巴は主である義仲の身の回りの世話や雑用にあたっていたことになる。なお、『源平盛衰記』

《板書例》
合戦の描写法



問 **「主従五騎にぞなりにける」（7行）で、係り結びが使われることの効果を説明せよ。**

答 軍勢がたった五騎にまで減ってしまったことを強調している。

（解説） いかに激しい戦いがここまで繰り広げられてきたのかが、最初の三百余騎という数字との対比から読み取れる。義仲軍の負けを決定づける数字であるがゆえに、強調されたのである。

問 **「おのれ」（8行）とはどういう意味か。**

答 お前、すなわち、ここでは巴のこと。

（解説） 「おのれ」は自分の意で、自称にも対称にも用いるが、ここでは巴に呼びかける語として用いられる。

問 **「疾う疾う」（8行）はどこにかかるか。**

答 （いづちへも）行け。

（解説） 「女なれば」という理由が、途中に挿入された形と考えればよい。緊迫した会話であることを効果的に表現しているといえよう。

問 **「女なれば、いづちへも行け」（9行）という台詞には、義仲のどのような思いがこめられているか。**

答 負けが確定した今となっては、せめて女の身である巴だけは救いたい、という思い。

では、義仲の乳母、中原兼遠の娘で、義仲の乳母子であり、妾でもあったとされる。覚一本では、本教材のとおり、五騎となった時点で義仲に逃げ延びるよう命ぜられ、御田八郎を討って東国へと落ちて行くが、長門本では、自ら義仲から離れて越後の友相（ともすぎ）で尼になったとするなど、諸本で違いが見られる。特に『源平盛衰記』は、和田義盛の妻となって大力で有名な朝比奈義秀を生み、義秀の死後に出家、九十一歳で亡くなったというその後の姿を描いている点で注目される。これらを含め、巴の伝承はさまざまあるが、詳しくは「参考1」参照。

L8　おのれ　「おのれ」は自分の意で、自称にも対称にも用いるが、ここは対称代名詞で、「そなた」となり、巴のことを指している（→発問）。

L8　疾う疾う　「疾く疾く」の音便形。早く、さっさとの意。「（いづちへも）行け」にかかる（→発問）。

L11　人手にかからば　もし敵の手にかかり、負傷すること、の意。捕らえられて、辱めを受けるようなことは、武将として避けなければならないので、その前に潔く自害して果てる、との宣言。結局、義仲はこの宣言を守れずに、敵に討たれることとなる。なお、諸本の中には、「人手にもかからずは」とし、人手にかかって討たれなければ、の意となっているものもある。その方が文意は通りやすいか。

L11　せんずれば　サ変動詞「す」の未然形「せ」＋意志の助動詞「んず」の已然形「んずれ」＋順接確定条件の接続助詞「ば」（→発問）。（自害を）するつもりだから、の意。「んず」は「むとず」のつづまった形。

L12　具せられたりけり　サ変動詞「具す」の未然形「具せ」＋尊敬の助動詞「らる」の連用形「られ」＋完了の助動詞「たり」の連用形「たり」＋詠嘆の助動詞「けり」の終止形（→発問）。「らる」は義仲への敬意。義仲の台詞ではあるが、敵将の立場に立った上での物言いであるため、義仲への敬意が表れることとなる。

L13　言はれんことも　「れ」は受身の助動詞「る」の未然形、「ん」は仮定・婉曲の助動詞「ん」の連体形。言われるとしたら、言われるようなことも、の意。

L14　しかるべからず　「しか」＋「あり」がつづまってできたラ変動詞「しかり」の連体形＋当然の助動詞「べし」の未然形「べから」＋打消の助動詞「ず」の終止形。「しかるべし」で、適当である、ふさわしいの意となる。

（解説）　女を最後まで連れていたのでは、大将軍としてふさわしくない、という言葉は建前であり、本音としては、愛する女を守ろうとする男の優しさがあったことを読み取っておきたい。

問　「自害をせんずれば」（11行）の中から助動詞を抜き出し、文法的に説明せよ。

答　んずれ／意志の助動詞で已然形。

（解説）　「むとす」がつづまった形「む（ん）ず」。主体が義仲なので、意志と判断する。

問　「具せられたりけり」（12行）を品詞分解せよ。

答　サ変動詞「具す」の未然形「具せ」＋尊敬の助動詞「らる」の連用形「られ」＋完了の助動詞「たり」の連用形「たり」＋詠嘆の助動詞「けり」の終止形。

（解説）　サ変動詞「具す」を押さえておきたい。「らる」は、義仲への敬意とみなし、尊敬とする。「けり」は過去でもよいだろうが、なんと女を連れていたのだった、といった驚きを含むとするならば、詠嘆とした方が自然か。

問　「しかるべからず」（14行）とはどういう意味か。

答　ふさわしくない。

（解説）　もともとは「しか」＋「あり」で

（→発問）

L14　のたまひけれども　「のたまふ」は「言ふ」の尊敬語。義仲への敬意を示す。

L15　落ちも行かざりけるが　「も」は強意の係助詞。複合動詞の場合、係助詞が間に挿入されることがある。なかなか動こうとしない巴の姿を表現したもの。

＊語句

のたまふ　［他ハ四］《「言ふ」の尊敬語》おっしゃる。

286ページ

L1　言はれ奉つて　動詞「言ふ」の未然形「言は」＋受身の助動詞「る」の連用形「れ」＋謙譲の補助動詞「奉る」の連用形「たてまつり」の促音便「たてまつつ」のさらにつづまった形＋単純接続の接続助詞「て」。発音する際には「たてまつって」となる。

L1　あつぱれ　「あはれ」の変化形。感動して発する言葉。ああ、まあ。

L1　よからう敵がな　「よからむ敵」の音便形。「む」は婉曲。立派だと思われる敵。「がな」は願望を表す終助詞。よい敵が現れてほしい、の意（→発問）。義仲に自分の最後の活躍を見てもらいたい、という思いにあわせ、義仲のためにも強力な敵将は一人でも討っておきたいという思いがあったと考えられる。

L3　控へたるところに　手綱を引いて馬をとめ、待ち構えているところに。

L3　武蔵の国　現在の東京都・埼玉県、神奈川県の一部。旧国名。東海道十五か国のひとつ。今の埼玉県、東京都の大部分と神奈川県東部を含む地域。

L4　御田八郎師重　頼朝方の武将。恩田とも書く。武蔵の国大里郡恩田の住人かともいうが未詳。また恩田の地についても、大里郡（現在の埼玉県熊谷市上恩田・中恩田・下恩田・手島付近）を比定する説と、都筑郡（現在の神奈川県横浜市青葉区恩田町付近）を比定する説があり、はっきりしない。

L6　押し並べて、むずと取つて引き落とし　自分の馬を相手の馬に押し並べて、馬上でむずと組み合い、相手を鞍から引きずり落とし。以下「捨ててんげり」まで、大力で有名な御田よりも、巴の力の方が勝っていたことを表現している。最後の五騎まで残っていたのも納得の力量の持ち主であった。

L7　鞍の前輪　鞍の前部にある山形の枠。

L8　ちつともはたらかさず　相手を少しも身動きさせず。「ちつとも」は副詞「ちとも」の促音便化。下に打消を伴い、「少しも……ない」となる。「はたらく」は、身体を動かすのできたラ変動詞「しかり」＋当然の助動詞「べし」で、「しかるべし」で、ふさわしい、適当である、の意となる。巴の前では、立派な武将であろうとする義仲なのであった。

286ページ

問　**「あまりに」（1行）には、義仲のどのような思いがこめられているか。**

答　巴の命だけは救いたいので、なかなか言うことを聞こうとしない巴を、なんとか説得しようという思い。

（解説）　「しかるべからず」の問の解説にも記したとおり、義仲は、巴の前では最後まで立派な武将として振る舞っているのである。

問　**巴はなぜ義仲の命令を聞かないのか。**

答　手勢も五騎にまで減っている中では、自分だけ逃げ延びることをよしとはせず、最後まで愛する義仲のために戦いたいという思いがあったから。

（解説）　巴には、愛する人と離れたくないという思いとともに、自身が戦力となるという確信があったのであろう。事実、彼女は最後の五騎にまで残っているのである。

問　**「よからう敵がな」（1行）の「がな」を文法的に説明せよ。**

答　願望の終助詞。

意。

L9　捨ててんげり　「捨ててけり」の転形。完了の助動詞「つ」の連用形「て」＋過去の助動詞「けり」が接続する場合、撥音「ん」が入り、「け」が濁音化して語勢を強めた「てんげり」となる。軍記物語などで多く見られる。……てしまった、……てしまうのだった、の意。

L9　物具　武具。特に、鎧と甲をいう。

L9　東国の方へ落ちぞ行く　「落ち行く」の複合動詞の間に係助詞が入り込んだ形。係り結びのため、「行く」は連体形である。中院本では、「粟津の国分寺の御堂の前にて物の具静かに脱ぎ置き、太刀ばかりをもて、東をさして落ち行くとぞ見えし、行き方知らずとぞなりにける」とあり、若干詳しい叙述となる。巴の退場を示す一文だが、木曾軍の本拠地に戻るのであれば「北国」となるはずである。「東国」という表現に対して想像をたくましくするならば、巴はたった一人で頼朝の命を狙うべく「東国」へと向かったのではないか、との読みもできるのではないだろうか。このような想像をしてしまうのも、当時の人々が数多くの伝承を生み出していった思考と軌を一にしたものといえるかもしれない。記録類に残されておらずその実像がつかめない人物だからこそ、巴はこんな人物であってほしい、彼女ならこういう行動をとるに違いない、といった人々の想像を駆り立てるのであって、それが結果としてさまざまな巴像を作りあげていったのだろう。

L10　手塚太郎　手塚太郎光盛。義仲方の武将。生没年未詳。信濃の国諏訪神社下社の神官金刺氏の一族で、義仲に従った武士。巻七「実盛」では「手塚太郎金刺光盛」の名で登場する。

L10　手塚別当　義仲方の武将。延慶本、長門本などでは、太郎光盛の伯父だという。なお、覚一本が手塚太郎討ち死に、手塚別当逃亡とするところ、延慶本は太郎逃亡、別当討ち死にとし、百二十句本は別当自害、太郎討ち死にとするように、諸本間で異同が見られる。

L11　今井四郎　今井四郎兼平。一一五二年？～一一八四年。義仲を養育した中原兼遠の第四子。義仲と乳兄弟。義仲より年長であるが、挙兵以来親しく仕え、木曾四天王の一人として活躍した。当時、主従の中でも乳兄弟の結びつきは特に強く、義仲と今井とは、「幼少竹馬の昔より、死なば一所で死なん」（巻九「河原合戦」）と約束したほどの仲であった。この合戦では八百余騎で勢田の橋を守っ

（解説）「体言（＋を）＋がな」の形で、詠嘆の気持ちをこめた願望を表す。……がほしいなあ、……があればいいなあ、の意。

問　巴が「名のり」をせずに戦っているのはなぜか。

答　女であることを悟られないため。

（解説）「女を具せられたりけりなんど言はれんことも、しかるべからず」（285・12）という義仲の直前の台詞を耳にしている巴は、義仲の恥となるような行動はとらないのである。

問　「日ごろは～重うなつたるぞや。」（11行）の発言と、巴に向けられた発言との違いを指摘せよ。

答　巴の前では、自身の死を覚悟し、その上で巴を逃がそうとして、男らしく勇ましい発言をしていたが、今井の前では、大将軍としてはあるまじき、甘えともとれる弱音を吐いている。

（解説）愛する女性に対しての姿勢と、乳母子という特別な存在の前での姿勢とに違いが生じることとなる。また、別の章段で、義仲の稚気が強調されるような面もあるため（「参考3」参照）、そういった姿と対応する部分もあるのかもしれない。

問　「臆病」（14行）という表現を用いた背景

ていた。「御乳母子」の項も参照。

L11　のたまひけるは　「のたまふ」は「言ふ」の尊敬語。おっしゃる、の意。義仲への敬意を示す。よってこの動作の主語は義仲となる。

L11　日ごろは〜重うなつたるぞや　義仲の弱音を表現する。勝利をおさめ続けてきたこれまでは、このような感覚に陥ることもなかったのである。

L12　御身もいまだ疲れさせ給はず　「させ」「給は」は、ともに今井から義仲への敬意。最高敬語。先の義仲の弱音を完全否定し、叱咤激励せんとする思いがこめられる。

L13　御馬も弱り候はず　「候ふ」は丁寧の補助動詞。今井から義仲への敬意。馬もまだまだ走れるのだからと言って、義仲を励ましている。実際のところは、ここまで戦い続けてきた馬も、そしてもちろん義仲自身も疲れ切っているはずである。

L13　一領　「領」は鎧を数える単位。鎧一領は約三〇キログラム。

L13　御着背長　大将などが着用する大鎧の別称。中世では「鎧」（「甲」「冑」とも表記した）「着背長」の名称が一般的であり、「大鎧」は江戸時代以降一般的となった名称。騎馬で戦うための防御に配慮した、全重量三〇キロには今井のどのような思いがあったと考えられるか。

答　武士が嫌がる表現を挑発的に使用することで、義仲を奮起させようと思った。

（解説）　通常ならば主人に向かって「臆病」などと評価することは、家来としては絶対に許されない。しかし心が弱っている義仲を奮い立たせるためには、これくらい激しい言葉が必要だったのである。

脚問　**「さ」（14行）の示す内容は何か。**

答　直前にある「日ごろは何とも覚えぬ鎧が今日は重うなつたるぞや」という義仲の発言。

（解説）　「さ」は直前にある語句を指す指示語である。

問　**「一人候ふとも、余の武者千騎」（15行）という表現を四字熟語で表現せよ。**

答　一人当千・一騎当千。

（解説）　一人で多勢の敵に対抗できるほど強いこと、勇士の形容である。「一騎当千」の表現の方が後世まで残ることとなった。

問　**「御身もいまだ疲れさせ給はず〜御自害候へ。」（12行〜57・2）という今井の台詞にはどのような思いがこめられているか。**

答　厳しいことをあえて言うことで、義仲を奮い立たせようとしている。同時に、自身の強さを主張して、安心させようという思いもある。

（解説）　前半部と後半部で若干内容が変化していることに注意したい。前半でまず義

・図版解説・

●『平家物語絵巻』（教科書286・289ページ）

「平家物語絵巻」は、もとは越前の国福井藩主松平家に相伝されたものである。詞章部分については、複数の板本本文の利用が指摘されている。また、絵は土佐左助なる人物の手により成り、全七百五図にもなるその絵の数は、他の伝存絵巻に比べても格段に多く、物語本文の細部まで再現しようとの志向性が確認できる。

十二巻、各上・中・下三十六巻、縦の寸法は各巻三三・九〜三五・四センチ、全長は各巻一八〜三六メートル、総計九四〇メートルにも及ぶ。黒漆塗の特製箪笥に収納され、引き出しに各巻の題名が金蒔絵によって表されるなど、その丁寧な仕事に由緒ある品であったことが窺い知れる。中央公論社より『平家物語絵巻一〜一二』として刊行される。林原美術館蔵（同提供）。

前後になる鎧である。大腿部を防御するために草摺（くさずり）が長く（だから歩きづらい）、背中から着けて右脇で合わせることからこう呼ばれる。「大鎧」着用の際には「星冑（ほしかぶと）」（地板をとめる鋲の頭が鉢の表面に見えている冑）をかぶる。

L14　思しめし候ふべき　「思ふ」の尊敬語「思しめす」の連用形「思しめし」＋丁寧の補助動詞「候ふ」の終止形＋推量の助動詞「べし」の連体形「べき」。直前の「何によつてか」の「か」を受け、係り結びとなる。「か」は反語。今井の強い思いを表現している。

L14　御勢が候はねば　「勢」は、軍勢、兵力、の意。「候ふ」は「あり」の丁寧語。あります、ございます、の意。

L14　臆病でこそさは思しめし候へ　気後れして、そのようにお思いになるのでしょう。「さ」は、直前の「日ごろは何とも覚えぬ鎧が今日は重うなつたるぞや」という義仲の発言を指す（→脚問）。武士の間では口にするのもはばかられる「臆病」という言葉をあえて用いることで、義仲の気持ちを奮い立たせようとしたのである（→発問）。

L15　兼平一人候ふとも　兼平一人だけですが、たとえ兼平一人であっても。実際は一人しかいないので、逆接仮定条件の「とも」を用いるのも不自然なようだが、そのあとに続く部分こそ強調したい今井の心情を表現したものと考えられる。

287ページ

L1　防き矢　直接相手を倒すためではなく、襲いかかる敵を近づけないように防戦の目的で射る矢。ここでは義仲に自害させるための援護射撃の矢。

L1　粟津の松原　現在の滋賀県大津市粟津町付近。粟津の松原は昔、美しい景色で知られ、和歌にも多く詠まれている。

L2　打つて　「打ちて」の促音便。「打つ」は馬に鞭打つの意。

L2　新手の武者五十騎ばかり　新しい無傷の軍勢五十騎。これまで多勢に無勢で戦って疲れ果てている義仲と今井の目の前に、新手のしかも五十騎が現れるのである。義仲側からすればいよいよ追い詰められたという印象となる。

L4　都にていかにもなるべかりつるが　「いかにもなる」は、どのようにもなる、の意。「死ぬ」の婉曲的表現（→脚問）。

L5　これまで逃れ来る　落ち延びようとするのならば、丹波や北陸へ向かう別のルートをとることもできたはずだが、同じ所で死の仲を叱咤し、後半ではそれに対するフォローの思いもあってか、勇気づけることを言うのである。

287ページ

問　**「松の中で御自害候へ」（2行）と、今井が義仲に自害を勧めるのはなぜか。**

答　主従二騎となってしまった以上、戦って勝てる見込みはなく、新手の敵もやってきたので落ち延びることもできない。そんな状況下にあっては、義仲の名誉を守るための唯一の方法は自害しかないと、今井は考えているから。

（解説）　乳母子は、いくら兄弟のように仲のよい存在ではあっても、その前にあくまでも家臣なのであり、主君の名誉を最優先するのである。主君が敵に討ち取られるような辱めにあうことはなんとしてでも避けねばならなかった。

脚問　**「いかにもなるべかりつる」（4行）とはどういうことか。**

答　最期を遂げるはずだったということ。

（解説）　「いかにもなる」はどのようにもなる、という意味であり、それをこの状況に当てはめるならば、「死ぬ」という意味が適当であろう。

問　**「汝と一所で死なんと思ふためなり」（5**

うと約束していた今井と再会するために義仲は勢田を目指して来たのである。

L5 一所で 同じ場所で、の意。直後の「ひと所」と同義。

L6 所々で 別々の場所で、の意。「一所で」「ひと所で」の対。

L6 ひと所でこそ討ち死にをもせめ 「こそ……め」で勧誘を示す。同じ場所で死のうではないか、の意。ただし、両者に主従関係があることを考慮すれば、義仲自身の強い意志や命令のようなニュアンスを読み取ることも可能であろう。

L7 馬の鼻を並べて駆けんとし給へば 今井の馬と向きを同じにしていっしょに敵勢に駆け入り戦おうとした。

L7 馬の口に取りついて 馬を押しとどめるため、馬の轡（手綱をつけるために馬の口にかみ入れさせる金具）に取りついた。

L8 弓矢取り 弓矢を持って戦う者。武士のこと。この時代の一般的な戦い方としては、騎馬でまず弓矢を用いて戦い、矢がなくなると太刀を使用した。武士は騎射などの武芸を

《板書例》

二人の心情

義仲…日ごろは何とも覚えぬ鎧が今日は重うなつたるぞや　感情的

乳母子の前だからこその弱音

死を覚悟　幼さ、甘え

今井といっしょに死にたい　巴への対応とのギャップ

大将軍としての強さはもはやない

対照的

今井…御身もいまだ疲れさせ給はず

元気づけようとする、激励

御身は疲れさせ給ひて候ふ

慰めや優しい言葉で相手を誘導

今までのねぎらいの思い

主君の名誉ある死を願う思い

自害

問 「最期のとき不覚」（9行）するとは、具体的にどうなることか、今井四郎の言葉から抜き出せ。

答 いふかひなき人の郎等に組み落とされさせ給ひて、討たれさせ給ひ（287・10）

（解説） 当時、名もなき人物に討たれるのは恥であった。今井が最初から願っているのは主君が潔く自害することで、その名誉を守ることだったのである。

問 「所々で討たれん」（6行）とはどういうことか。

答 義仲と今井がそれぞれ別の場所で討たれること。

（解説） 「一所」・「ひと所」の対義語と考えればよい。義仲の願いは、今井といっしょに死ぬことただ一つであり、自害など望んではいない。一方、今井はなんとしても主君に自害をしてほしいと願っており、そのためには自分はどのような犠牲を払ってもいいと思っているのである。

問 「乳母子の前だからこその弱音」（6行）とあるが、義仲にとって相手がどのような存在であったことがわかるか。

答 ともに死のうと思えるほどの深い絆、愛情で結ばれた存在。

（解説） 乳母子と主人とは、実の兄弟以上に深い関係性が築かれているのである。

家職として代々継承した。

L8　年ごろ日ごろ　「年ごろ」は長年、「日ごろ」はふだん、平生、の意。

L8　いかなる高名候へども　「高名候ふとも」という仮定条件でいうのが普通の言い方だが、義仲が既に「高名」であるとして、確定条件として「高名候へども」を用いたと考えられる。

L9　最期のとき不覚しつれば　「不覚」は、思いもかけぬ失策、不注意のためなどで、思わぬおくれをとること、の意。ここでは、武将らしくない無様な死に方をしてしまうと、の意。名のある武将はそれにふさわしい死に方をするべきで、討ち取られることは末代までの恥辱になる。（→発問）

L9　長き疵にて候ふなり　「長き疵」は長く消えない不名誉、末代までの恥辱、の意（→発問）。「に」「なり」はともに断定の助動詞。

L9　御身は疲れさせ給ひて候ふ　先には義仲を鼓舞するため、「御身もいまだ疲れさせ給はず」と言ったが、主君にすでに戦う力が残っていないことがわかっている兼平は、ここで真実を告げ、武将らしい自害をとげるようにと促すのである。義仲を案ずる兼平の心配りを窺わせる発言である。

L10　続く勢は候はず　あとにつづく味方の軍勢はおりません。形勢が逆転することはない現実を突きつけている。

L10　敵に押し隔てられ　押しやられて離れ離れになると、今井は義仲を守ることができなくなる。ここからの発言は、それまでの慰めやいたわりとは異なり、感情的になって現実が見えなくなっている義仲に対して、これから起こるかもしれない屈辱的な場面を具体的にイメージさせることで、それは避けたい、と義仲に思わせようとしている今井の配慮を読み取るべきだろう。

L10　いふかひなき人の郎等　「郎等」は、主人と血縁関係のない家来、の意。「いふかひなき」は、「郎等」にかかる（→発問）。

L11　組み落とされさせ給ひて　動詞「組み落とす」の未然形「組み落とさ」＋受身の助動詞「る」の未然形「れ」＋尊敬の助動詞「さす」の連用形「させ」＋尊敬の補助動詞「給ふ」の連用形「給ひ」＋単純接続を示す接続助詞「て」（→発問）。「させ給ふ」は最高敬語で義仲に対する敬意を示す。組み落とされなさって、の意。

L11　討たれさせ給ひなば　動詞「討つ」の未然形「討た」＋受身の助動詞「る」の未然形「れ」＋尊敬の助動詞「さす」の連用形「させ」＋尊敬の補助動詞「給ふ」の連用形「給

問　**「長き疵」（9行）の意味を答えよ。**

答　末代までの不名誉。

（解説）　死ぬ間際の不名誉は、当該の人物一代限りの問題ではなく、子々孫々までそのようなイメージで見られ、不利益を被ることとなるのである。

問　**「いふかひなき」（10行）はどこにかかるか。**

答　郎等。

（解説）　「いふかひなし」は取るに足りない、つまらない、の意である。名もないような郎等に、大切な主人が討たれるようなことがあってはならない、と今井は思っている。

問　**「組み落とされさせ給ひて」（11行）を品詞分解せよ。**

答　「語句・文脈の解説」参照。

（解説）　「る」は直前に「郎等に」とあるので、受身と考えることができる。「させ給ふ」は最高敬語で義仲への敬意を示す。

問　**今井の「弓矢取りは〜入らせ給へ。」（8行〜13行）の発言には、どのような思いがこめられているか。**

答　主人を慰めたいという思いと、再度自害を勧めたいという思い。

（解説）　先の会話にあった「御身もいまだ

ひ」＋完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」＋仮定条件を示す接続助詞「ば」。討たれさせなさったならば、の意。

L11　聞こえさせ給ひつる　動詞「聞こゆ」の未然形「聞こえ」＋尊敬の助動詞「さす」の連用形「させ」＋尊敬の補助動詞「給ふ」の連用形「給ひ」＋完了の助動詞「つ」の連体形「つる」。有名でいらっしゃった、の意。

L12　それがし　誰それ。「それがし」は具体的な名前をはっきりと出さないで、ぼかしていう表現。

L12　討ち奉つたる　「たてまつりたる」が促音便化して、「たてまつつたる」となり、さらにそれがつづまって「たてまつたる」となった。発音する際には、「たてまっったる」となる。「たる」は連体形。係り結びもなく連体形で文を結ぶことによって、文末を強調する。余情表現ともいう。

L13　申さんこと　「申す」は「言ふ」の謙譲語。「ん」は仮定・婉曲の助動詞「ん」の連体形。「申す」の内容は、直前の「さばかり〜討ち奉つたる」である。主体は、「言ふかひなき人の郎等」と考えられる。このあと、義仲はまさしくこのパターンで命を落とすことになる。その伏線として機能する一文である。

L13　口惜しう　「口惜しく」のウ音便形。「口惜し」は、残念だ、情けない、の意。

L14　さらば　それならば、そうであるならばの意（→発問）。もとは、指示語「さ」＋動詞「あり」のつづまった形、「さり」の未然形に、接続助詞「ば」が付いたもの。未然形＋「ば」は、先行の事柄を受けて後続の事柄が起こることを示す、順接の仮定条件の用法。ここでは、今井の説得を義仲が受け入れ、「お前がそこまで言うならば、松原へ入り、自害をとげよう」といった意味を含んでいる。「さようなら」の意味ではない。

L14　松原へぞ駆け給ふ　「駆く」は馬を走らせるの意。ようやく義仲は今井の指示通りに行動したのである。

＊語句

給ふ　［一］［他ハ四］①《「与ふ」の尊敬語》お与えになる。くださる。②…しなさい。…してください。［三］［補動ハ四］①（動詞および動詞型活用の助動詞の連用形に付いて）お…になる。お…なさる。…てくださる。②（「せたまふ」「させたまふ」「しめたまふ」の形で）お…になる。お…なさる。［三］［他ハ下二］いただく。頂戴する。［四］［補動ハ下二］（動詞「思ふ」「見る」「聞く」などの連用形に付いて）…せ（させ）ていただく。…ております。

候ふ　［一］［自ハ四］①《「あり」「居り」「仕ふ」疲れさせ給はず」と対比して使われる「御身は疲れさせ給ひて候ふ」からは、慰めの思いが読み取れようが、しかし、そのあとの具体的な表現には、今井と死ぬことばかりを主張して現実が見えなくなっている義仲に対し、本当にそのようになっていいのか、と詰問するような面も読み取るべきだろう。元気づけたとしてももはや義仲には伝わらないと判断し、優しい言葉をかけて主人を慰める思いをもちつつも、同時に、感情的になりすぎていて、実際に討たれることのイメージができていない義仲に、そのつらい現実を噛み砕くように伝え、自害を再度勧めようとしているのである。

問　**「さらば」（14行）とはどのような意味か。**

答　それならば、そうであるならば。

（解説）　今井がそこまで言うならば、その言葉に従おう、ということ。「語句・文脈の解説」参照。

の謙譲語》お仕えする。ひかえる。②《「あり」「居り」の丁寧語》ございます。おります。㊂［補動ハ四］…（で）ございます。…ます。

思しめす　［他サ四］《「おもふ」の尊敬語》お思いになる。お考えになる。

郎等　［名］①身分的に主人に隷属する従僕。従者。②中世、武士の主人と血縁関係もなく、所領もない家来。

聞こゆ　㊀［自ヤ下二］①（音や声が自然に）耳に入る。聞こえる。②うわさされる。世間に知られる。③理解される。㊁［他ヤ下二］《「言ふ」の謙譲語》①申しあげる。②手紙を差しあげる。伝言で申しあげる。③お願い申しあげる。④（人名や官位など）…と申しあげる。…とお呼びする。㊂［補動ヤ下二］《動詞および動詞型活用の助動詞の連用形に付いて、謙譲の意を表す》お…申しあげる。お…する。

口惜し　［形シク］①（期待がはずれて）ひどくがっかりした。残念だ。くやしい。②つまらない。もの足りない。

288ページ

L1　日ごろは音にも聞きつらん　次の「今は目にも見給へ」と対句になっている。「音に聞く」は、噂に聞く、話に聞く、の意。（→発問）

L2　御乳母子　乳兄弟。当時、身分ある子弟は実母に育てられることはなく、特に武家の場合は、若君と同年代の子どもを持つ重代の家臣に養育を任せることが多かった。身分の差はあるが、同じ環境の中で幼い頃から兄弟同然に育てられるため、その仲はきわめて親密で、幼い頃はよき幼なじみ、成長してからは最も信頼できる腹心の家来となる。私的には兄弟同然の仲良し、公的には主従というこの二面性が重要である。血を分けた兄弟ですら敵味方になって戦うことのある時代にあって、最も深い間柄なのである。生まれこそ異なるものの、その後は全くの一心同体、影が従うように離れずに、ともに生きともに行動した。だからこそ、前段落にあるように、義仲も今井とともに死ぬことを強く希望したのである。

L2　まかりなる　「まかる」は本来は「出る」「行く」の謙譲語。ただし、連用形「まかり」の形で動詞の上に置かれ、謙譲語（ただし意味的には丁寧語に近い）を作る用法がある。……ます、……です、の意。

L3　さる者あり　「さる」は、指示語「さ」＋動詞「あり」のつづまった形「さり」の連

288ページ

問　**「日ごろは～見参に入れよ。」（1行～4行）に見える対比的表現を整理せよ。**

答　日ごろ―今、音にも聞きつらん―目にも見給へ。

（解説）「板書例」参照。

問　**今井の名のり（1行）と義仲の名のりの類似性を指摘せよ。**

答　対比的表現の使い方（「昔」と「今」、「聞く」と「見る」など）や、自身の価値を誇示する点、そして頼朝を持ち出す点など。

（解説）「板書例」参照。

《板書例》

対比的表現2

噂でしか聞いたことがない
日ごろ　は　音にも聞き　つらん
↔　↔
今　は　目にも見　給へ、
実物を目の前にする

木曾殿の御乳母子、今井四郎兼平
→義仲との関わりから自分を位置づける
※義仲の名のりとの類似性
→二人の関係性を暗示

問　**今井四郎が一人で奮戦したのはなぜか。**

体形。そのような者がいる、の意で、「さ」は、直前の「木曾殿の御乳母子、今井四郎兼平、生年三十三にまかりなる」の部分を指す（→発問）。

L3　鎌倉殿　源頼朝のこと。鎌倉に本拠を置いたことからこう呼ばれた。今井は一一八三（寿永二）年、頼朝と義仲との仲違いの際、使者として頼朝のもとに出向いている（巻七「清水冠者（しみずのかじゃ）」）。ここでは、頼朝の名を出すことで敵の功名心をくすぐって自分に注意を向けさせ、義仲の自害の時間を確保しようとしているのである。

L3　知ろしめされたるらんぞ　「知ろしめさ」は「知る」の尊敬語。「れ」も尊敬。今井から頼朝への敬意。「たる」は存続、「らん」は現在推量、「ぞ」は念押しの終助詞。

L3　見参に入れよ　（自分の首を）ご覧に入れよの意。「見す」の謙譲語。今井から頼朝への敬意（→発問）。

L4　八筋の矢　「筋」は細長いものを数える語。……本。

L4　差しつめ引きつめ、さんざんに射る　「差しつめ引きつめ」は多くの矢を手早くつがえて、次々射ることの形容。「差す」は、矢をつがえる、の意。「引く」は、弓を引く、の意。「つめ」は、連続した動作を示す接尾語。

L5　死生は知らず　（八本の矢で射落とした敵が）死んだか、（傷を負わせる程度で）息があるかはわからないが、の意。

L5　やにはに　副詞。いきなり、その場ですぐ、の意。

L5　八騎射落とす　八本の矢を持っていたとあるから、全て敵に命中したことになる。

L5　打ち物　鉄を打って鍛えた武器。ここでは太刀。他にも槍などが相当する。弓矢を使った戦いは、距離がとれるが、打ち物を使うということは、敵と接近しなければならない。つまり弓矢戦以上に危険を伴う戦法なのである。

L6　面を合はする者ぞなき　「面」は顔のこと。面と向かう者がいない、顔を合わせて敵対するものがいない、の意。今井の迫力・武力に圧倒された、敵軍の様子をうかがわせる描写。（→発問）

L7　分捕り　戦場で敵の首や武器を奪い取ること。このように記すことで、今井の強さを表現している。

L7　中に取りこめ　ただ一騎をぐるりと取り囲んで逃げられないようにして。今井と一対一で打ち物戦を繰り広げたところでかなわないため、軍勢の多さをいいことに、距離をとって周囲を囲む戦法をとったのである。

答　義仲に立派に自害してもらうために、敵を引きつけておこうとしたから。
（解説）　乳母子は主君のためを思って行動するのである。

問　**「さる者」（3行）とは誰のことを指すのか。**

答　今井。
（解説）　もとは「さある者」であり、そのような者、という意である。ここで話題になっているのは今井である。

問　**「見参に入れよ」（3行）とはどういうことか。**

答　討ち取った今井の首を頼朝に見せよ、ということ。
（解説）　有名な武将を討ち取れば、手柄を認められ、恩賞を得られるのである。

問　**「面を合はする者ぞなき」（6行）という状況となったのはなぜか。**

答　今井が強すぎて、正面から切ってかかる正攻法で戦っていてはかなわないため。
（解説）　「面を合はす」は、正面切って立ち向かう、の意。直前に今井の奮闘ぶりが描かれている。

問　**「あき間を射ねば」（8行）となったのはなぜか。**

答　今井がよく動くので狙いを定められない

L7　雨の降るやうに射けれども　矢がひっきりなしに射られることを表現する軍記物語の定型表現。

L8　裏かかず　鎧の裏まで通らず。「裏かく」は矢や刀・槍などが裏まで突き通るの意。直前にもあるとおり、いい鎧を着ているので、貫通するほどのダメージは受けなかったということである

L8　あき間を射ねば　「あき間」は、鎧の札と札との間の隙間、の意。「あき間」が狭い上に激しく動き回っているので、狙って射ることができない（→発問）。

L8　手も負はず　「手負ふ」は手傷を負う、負傷するの意。今井は一対五十で戦う中でも、負傷もしなかったのである。

L9　正月二十一日　『玉葉』など当時の記録では、正月二十日のこととする。『平家物語』諸本の中にも、二十日とするものもある。いずれにせよ、寒い時期のことであり、それが以降の薄氷の話へとつながるのである。

L9　入相ばかりのことなるに　夕暮れ頃の薄暗かったことである上に、の意。日没、夕暮れの頃。視界が制限される時間帯である。

L10　張つたりけり　「張りたりけり」の促音便形。終止形の中止法的用法で強い語気で畳みかける感じを出す。終止形を文の終止に用いたのではなく、下へ続けた例で、並列的に付加するはたらきがある。「正月二十一日～張つたりけり」は、挿入句。「けり」は、終止形止めにすることで詠嘆を強める。連用形ととるものもある。

L10　深田　泥深い田、沼田。日没頃で視界が悪く、しかも薄氷が張っていたため、義仲は深田の存在に気づかなかったのである（→発問）。

L10　馬をざつとうち入れたれば　「ざつと」は勢いよくすばやく動く様子。さっと。視野の悪い中、警戒心なく馬を走らせてしまったのである。

L11　あふれどもあふれども　鐙で馬の横腹を蹴って急がせても。「あふる」（「あおる」と読む）は「障泥（あおり）」（馬の腹にかけた覆い）を、馬を急がせるために鐙で蹴ること。

L11　打てども打てども　「打つ」は、馬を鞭で打って走らせること。

L12　はたらかず　義仲の乗っていた馬は、名高い鬼葦毛と呼ばれる馬で、肥えてたくましい馬であったが、それでも泥沼から抜け出すことはできなかったのである。馬も連戦で疲れ切っていたのであろうし、義仲が蹴ったり、鞭打ったりしたことで、かえって沈む結果となってしまったのだろう。

から。あわせて、敵方の射手の実力が一定のレベルに達していなかった可能性も考えられる。

（解説）　直前の今井の奮闘ぶりを考えれば、動作が機敏であったことは容易に想像がつき、敵方も狙いを定められなかったと考えるのが自然であろう。あわせて、敵軍は軍勢の多さで義仲軍を押さえ込もうとしていた節があるため、実力という点では、心もとない武士たちもいた可能性もある。

問　**義仲が深田にはまった理由を整理せよ。**

答　夕方になっていたことと、薄氷が張っていたことにより、視界が遮られていたため。

（解説）　「入相ばかりのことなるに、薄氷は張つたりけり」（288・9）と説明されるとおりである。

問　**「ふり仰ぎ給へる」（12行）は誰が誰を「ふり仰」いだのか。**

答　義仲が今井を「ふり仰」いだ。

（解説）　敬語を考えれば、主語は簡単に判断できる。義仲は今井が心配で仕方がなかったのである。

問　**「ふり仰ぎ給へる」（12行）という行動をとった理由は何か。**

答　今井の行方を気にしたから。

（解説）　直前に「今井が行方のおぼつかな

L12　今井が行方のおぼつかなさに　「おぼつかなさ」は、形容詞「おぼつかなし」を名詞化したもの。気がかり、心配の意。今井に説得されて、別れて松原へと向かったものの、義仲は、今井がどうなったか、心配で仕方なかったのである。それが武将として絶対にやってはいけない、後ろを振り返る行為へとつながるのである。

L13　内甲　甲の内側。顔の部分。合戦の時は甲を前に傾け、弱点の顔は伏せた状態で防御するが、ここでは顔を上げて振り向いたので顔に矢が当たった。無防備にも顔を上げたところに、義仲の弱さ、そしてそれと同時に、自分の身よりも今井のことを思いやる愛情深さが表れている。

L13　三浦の石田次郎為久　現在の神奈川県伊勢原市周辺に勢力をもっていた三浦一族の一人。芦名三郎二郎為景の子。頼朝方の武将。生没年未詳。「石田」は相模の国（現在の神奈川県）の地名。

L13　追つかかつて　「追ひかかりて」の音便形。

L13　よつ引いて　「よく引きて」の音便形（→発問）。

L13　ひやうふつ　「ひやう」は矢が風を切って飛ぶ音。「ふつ」は命中する音。矢が飛んでいき、的を射貫く時の音の形容。

L14　痛手　重傷、致命傷。

L14　真向　甲の鉢の前頭部。

L15　取つてんげり　「取りてけり」の促音便形「取ってけり」に、語勢を強くするため「ん」を挿入したことで、「けり」が濁音になったもの。

L15　太刀の先に貫き、高くさし上げ、大音声を挙げて　自分の手柄を周囲に知らしめるための行為である。

289ページ

L6　これを聞き　「これ」とは直前にある石田次郎為久の名のりを指す（→発問）。今井は、敵の名のりによって、自分の主人が討ち取られたことを知ったのである。

L7　誰をかばはんとてか、いくさをもすべき　誰をかばい守るために戦う必要があろうか。義仲が討たれた今となっては、兼平が防戦する意味も皆無であった。巻八「法住寺合戦」にも「いかに各々は、誰をかばはんとて軍をばし給ふぞ」と類似する表現がある。戦意喪失の慣用的表現といえるだろう。

L9　東国　関東地方を指す。義仲軍は「北国」勢といわれた。

L9　殿ばら　「ばら」は複数であることを表さに」と書かれている。

問　「よつ引いて」（13行）をもとの形に戻せ。

答　よく引きて。

（解説）「よく引く」の促音便で「よっぴく」となり、「引く」の連用形がイ音便となった。軍記物語ではよく使われる表現。

289ページ

問　「聞こえさせ給ひつる」（2行）を品詞分解せよ。

答　動詞「聞こゆ」の未然形「聞こえ」＋尊敬の助動詞「さす」の連用形「させ」＋尊敬の補助動詞「給ふ」の連用形「給ひ」＋完了の助動詞「つ」の連体形「つる」。

（解説）ここの「聞こゆ」は敬語動詞ではなく、聞こえるの意の動詞。「させ給ふ」は最高敬語で、会話主、石田次郎為久から義仲への敬意。

問　石田次郎は何のために名のりをあげたのか。（2〜5行）

答　自身の手柄を周囲の人に報告することで証人となってもらい、のちの恩賞を確実にするため。

（解説）たとえ手柄をたてたとはいえ、その証拠がなければ意味がない。よって、人に聞かせ証人となってもらうことが必要なのである。

す。殿方。

L10　剛の者　清音で「かうのもの」と読む。のちに、「がうのもの」とも読むようになった。勇ましく強い者、武勇にすぐれた武士の意。

L11　貫かつて　解釈に二説ある。①「貫かりて」の促音便形。「貫かる」（ラ行四段）は自動詞で、太刀に突き刺さって、の意。②「貫かれて」の促音便形。「貫かる」（ラ行下二段）は、他動詞で、太刀に刺されて、の意。自動詞ととる例は他になく、伝本によっては「貫かれて」とある。①の解釈を採用すると、「太刀の先を～飛び落ち」から続く激しさをもった記述となる。

L12　さてこそ粟津のいくさはなかりけれ　直訳すれば、「粟津の合戦はなかったのだった」となり、粟津の松原付近で今井四郎が一人奮戦したものの、木曾殿が討たれ今井四郎が自害し、「合戦」そのものが存在しなかったと解することができる。しかし、この一文の解釈には諸説ある。「それで結局、粟津の合戦と名づけるようなはなばなしいものはなかったのである」（『日本古典文学大系』）という解釈に対し、「戦争の終結をいうのであって、合戦の内容の批判ではない」として「粟津の松原の戦は終わったのである」（『平家物語全注釈』冨倉徳次郎）という解釈もある。「今井四郎いくさしけるが」「誰をかばはんとてか、いくさをもすべき」とあるように、当人たちには「いくさ」をしている認識があると読み取れるため、ここでは戦闘終結の慣用的表現として解釈した。

＊語句

知ろしめす　［他サ四］①お治めになる。②知っていらっしゃる。ご存じである。

おぼつかなさ　（「おぼつかなし」の名詞化）

おぼつかなし　［形ク］①はっきりしない。ぼんやりしている。②よくわからない。不審だ。③気がかりだ。心配だ。④待ち遠しい。もどかしい。

失す　［自サ下二］①なくなる。消える。②いなくなる。姿を消す。③死ぬ。亡くなる。

問　「これ」（6行）とは、何を指すか。

答　「この日ごろ～討ち奉つたるぞや。」（2行）という名のり。

（解説）　「これ」は指示語で、前にある内容を受ける。「さばかり日本国に聞こえさせ給ひつる木曾殿をば、それがしが郎等の討ち奉つたる」（287.11）と言われることが悔しい、と今井が言っていたとおりの結果となってしまったのである。

問　今井はなぜ自害したのか。

答　義仲に立派に自害してもらおうと戦ってきたが、義仲が討たれたと聞いてもはや戦う理由がなくなったから。

（解説）　今井の願いは、最初から主君の自害だけだったのである。

・図版解説・

●武具・馬具（教科書290ページ）

「武具」の写真は風俗博物館提供。

「馬具」は、「大和鞍装着模型」の写真。馬の博物館蔵（同提供）。

コラム

太刀の先を口に含み——軍記物語の定型表現

軍記物語には、合戦の様子を物語る上での定型表現がいくつか存在する。合戦の様子を逐一記さずとも、定型表現を使用することで、その合戦がいかに激しいものであったか、効果的に表現できるのである。本章段においても「縦様・横様・蜘蛛手・十文字に駆け割つて」「差しつめ引きつめ、さんざんに射る」「雨の降るやうに射けれども」などが用いられており、その表現の効果を実感できるのではないだろうか。しかし、そのような中で、覚一本があえて一か所だけの使用にとどめ、定型表現にはしなかった描写が存在する。それが、今井の最期を語る「太刀の先を口に含み、馬より逆さまに飛び落ち、貫かつてぞ失せにける」である。今井の覚悟、潔さ、気迫など、さまざまな思いがこめられたこの表現は、作品中最も印象深いものの一つとして、多くの人々の脳裏に焼き付いているのではないだろうか。

ところが古態本の延慶本では、当該場面以外にも、「（杵淵小源太重光が）人手ニカカラムヨリハトヤ思ヒケム、太刀ヲ口ニ差シククミテ、逆ニ落チテ、貫カレテコソ死ニニケレ。コレヲ見テ惜シマヌ人コソナカリケレ。」（第三本「城四郎与木曾合戦事」）と、類似する表現が使用されており、それは長門本にも「重光申しけるは、『敵も御方も御覧せよ。遂に逃るべき身ならねば、主の供するぞや』とて、太刀の先を口に含みて、逆さまに貫かれて死にけり。これを見て、惜しまぬ者こそなかりけれ」と、受け継がれる。もちろん別の場所で使われているからといって、今井の死の印象深さが消えるわけではないだろうが、やはりインパクトが薄れてしまうのは否めない。

しかし、この表現はよほど好まれたのか、後出の『太平記』では、「『日本一ノ剛者、謀叛ニ与シ自害スル有様見置イテ人ニ語レ。』ト高声ニ呼テ、太刀ノ鋒ヲ口ニ呀ヘテ、櫓ヨリ倒ニ飛落テ、貫ヌカレテコソ死ニケレ。」（巻一「頼員回忠事」）、「遂ニ父ガ討タレシソノ迹ニテ、太刀ヲ口ニ呀ヘテ覆シニ倒レテ、貫ヌカレテコソ失セニケレ。」（巻六「赤坂合戦事付人見本間抜懸事」）、「馬ヨリ飛デヲリ、辻堂ノ中へ走リ入リ、本尊ニ向カヒ手ヲ合ハセ念仏高声ニ二三百返ガホド唱ヘテ、腹一文字ニ掻キ切ツテ、ソノ刀ヲ口ニ加ヘテ、ウツブシニナツテゾ臥シタリケル。」（巻一六「備中福山合戦事」）など、繰り返し使用されることとなる。人前で自害する際の定型表現として定着してしまったのである。中には、使い回しとみなされることを嫌ってか、「『……只今自害スル有様見置イテ、汝ラガ武運忽チニ尽キテ、腹ヲキランズル時ノ手本ニセヨ。』ト云フ儘ニ、鎧ヲ脱イデ櫓ヨリ下ヘ投ゲ落トシ、錦ノ鎧直垂ノ袴バカリニ、練貫ノ二ツ小袖ヲ押膚脱イデ、白ク清ゲナル膚ニ刀ヲツキ立テ、左ノ脇ヨリ右ノソバ腹マデ一文字ニ掻キ切ツテ、腸掴ンデ櫓ノ板ニ投ゲツケ、太刀ヲ口ニクワヘテ、ウツ伏ニナリテゾ臥シタリケル。」（巻七「吉野城軍事」）と、若干のアレンジが加えられたりもするのだが、所詮使い回しの範疇は脱しきれず、「太刀の先を口に含んで死ぬ」描写の特別感は一気に失われてしまったといわざるを得ない。

やはり、あえて一度のみの使用に限定し、この場面を印象深いものにした覚一本の構成力のすばらしさを評価せねばなるまい。

◉鑑賞

『平家物語』をひと言でまとめるならば、平家一門の盛衰を描く物語、と定義できよう。しかし、本章段で描かれるのは、頼朝対義仲という源氏同士の争いであり、先の定義からすれば傍流の物語ということになってしまう。そのような章段が、『平家物語』を象徴したものであるかのように扱われているというのも、不思議な話ではある。しかし、装束描写や名のりにはじまり、集団戦の描き方、義仲と巴、今井とのやりとり、そして、今井の自害に至るまで、本章段には軍記物語を軍記物語たらしめる要素がぎっしり詰まっており、軍記物語がどのようなものなのかを考える上で読んでおきたい章段であるのは間違いない。

義仲が粟津で命を落としたことについては、『玉葉』寿永三年一月二十日条に「長坂方に懸からんとし、更に帰り勢多の手に加はらんが為に東に赴くの間、阿波津野辺に於いて伐ち取られ了んぬと云々」（※原文は漢文）とあり、実際にあった事件ではあったのだろう。しかし、義仲の死を淡々と報告するこの叙述からは、『平家物語』に描かれたような六千余騎にも及ぶ大軍との合戦はもちろん、義仲と巴、今井との別れ、さらには「太刀の先を口に含んだ」死など確認できようはずもない。それこそ「軍記物語を軍記物語たらしめる要素」は皆無なのである。このような『玉葉』の叙述だけでは人々の心に響くことはなかっただろう。義仲の敗死という事実を核に据えるとして、それをどう色づけして物語るのか、そこには作り手側の志向が存在する。記録類からは決して読み取ることのできない、作り手の志向に基づいて作りあげられた部分にこそ、人々は心を動かされるのではないだろうか。

この作り手の志向とも関連する問題かもしれないが、「木曾の最期」については、『史記』をベースに作りあげたのではないかという論がつとに提示されている。すなわち、四面楚歌となり軍勢が徐々に減っていく状態、項羽と虞美人との別れなどが、義仲の亡くなる前の展開と類似する、というのである。たしかに首肯できる論ではある。日本の古典文学全般における『史記』の影響の大きさを考慮すれば、義仲像を形成するにあたって項羽の姿が下敷きにされた可能性は決して低くはないだろう。このような『史記』の享受をはじめ、さまざまな要素を複合的に利用して、作り手は「木曾の最期」というあの印象的な章段を完成させたのであろう。

中国との関係性という点から、装束描写についてもう少し考えてみたい。色彩や素材にこだわった装束描写を行うのは、決して日本の軍記物語に限られたものではなく、『三国志演義』にも、「呂布の出陣のいでたちは、かしらには三またに束ねた髪に紫金の冠をいただき、体には四川できの紅の錦の百花のひたたれをつけ、身に獣面呑頭の模様の連環のよろいを着込み、腰にはよろいの上おびとして玲瓏獅蛮の帯をしめ、弓矢を背負い手に画戟のほこをとり、風にいななく赤兎馬に乗っていた。」（第五回）、「玄徳が関より見下ろせば、門旗の影より馬超が手綱をさばき、やりをひっさげて現れ、獅子のかぶとに銀のよろいを着用し、白色の袍に獣帯をしめた、そのいでたちはあたりを払い、器量もまた人なみすぐれている。」（第六十五回）などのように、色彩や素材によって個々人の個性を引き立たせる装束描写が確認できる（もっとも、『三国志演義』では装束よりも容貌を描写することの方が多いことは付け加えておく必要がある）。

しかし、軍記物語と『三国志演義』とでは、その描写がもつ意味が大きく変わってくる。すなわち、『三国志演義』における装束描写（容貌描写も含む）は、英雄と評される人物たちの活躍場面を盛りあげる要素として用いられるのに対し、軍記物語では、死を目前とした人物

の最後の姿を丁寧に描き込むためにこそ使用されるのである。結果、前者では同じ人物の装束・容貌描写が、その人物が活躍する限りにおいては何度も繰り返されることになり、後者では、基本的には一人物につき一度しか行われない。これは、勝者を重視するか、敗者・死者を重視するかという両作品の本質ともいうべき点とも呼応する。

だが、実は義仲に関しては、「木曾の最期」以前にも装束描写が行われているのである（「木曾は赤地の錦の直垂に、唐綾縅の鎧着て、厳物作りの太刀をはき、きりふの矢負ひ、滋籐の弓脇にはさみ、甲をば脱ぎ、たかひもにかけて候ふ。」〈巻八「山門御幸」〉）。これは異例なことであり、こういった点からも、『平家物語』が義仲に対して特別な思い入れをもっていたことは明らかである。

もっとも、『平家物語』が描きたかった義仲像は、完全無欠の英雄というわけではなかった。たしかに合戦場での活躍など英雄としての側面に光が当てられるのも事実ではあるが、それよりも重きをおかれたのは、その無邪気さゆえに人に笑われたり、死の前で弱音を吐いてしまったりするような、ごく普通の、等身大の人間としての義仲なのである。理想的な姿と現実的な姿のバランスが巧みにとれたところに、義仲という男の描写は成立し得たのであり、その魅力的な人物が亡くなる当該章段は、敗者・死者こそを大切に描いていくという『平家物語』の本質を伝える章段として、多くの人に好んで読まれることとなったのだろう。

◉参考1——補

「木曾の最期」を教材化するにあたって省略した当該章段前半部を掲載する。ここでは巴の美しさと強さ、そして合戦のため離ればなれになっていた義仲と今井との再会が語られる。巴に関しては、「今度も多くの者ども落ちゆき討たれける中に、七騎が内まで巴は討たれざりけり」とあり、教材部分の「五騎がうちまで巴は討たれざりけり」と対応しているように思われる。また、義仲と今井に関しても、「義仲、六条河原でいかにもなるべかりつれども、なんぢがゆくへの恋しさに、多くの敵の中をかけ割つて、これまでは逃れたるなり」、「御詞（ごぢう）まことにかたじけなう候ふ。兼平も勢田で打死つかまつるべう候ひつれども、御ゆくへのおぼつかなさに、これまでまいつて候ふ」と、二人の親密さがうかがえる対話を前半部にも置くことで、後半部で繰り広げられる二人の最後のやりとりを引き立たせているといえよう。『平家物語』は、前の部分から伏線を張り、義仲と今井二人の最期を印象深いものに作りあげていこうとするのである。

木曾殿は、信濃より、巴・山吹とて二人（ににん）の便女（びんぢょ）を具せられたり。山吹はいたはりあつて都にとどまりぬ。中にも巴は、色白く髪長く、容顔まことにすぐれたり。ありがたきつよ弓・精兵（せいびやう）、馬の上、かちだち、打ち物もつては鬼にも神にもあはうどいふ一人当千の兵（つはもの）なり。究竟のあら馬乗り、悪所落とし、いくさと言へば、さねよき鎧着せ、大太刀・つよ弓持たせて、まづ一方の大将には向けられけり。度々の高名、肩を並ぶるものなし。されば今度も多くの者ども落ちゆき討たれける中に、七騎が内まで巴は討たれざりけり。

木曾は長坂を経て丹波路へおもむくとも聞こえけり。また竜花越にかかつて北国へとも聞こえけり。かかりしかども、今井がゆくへを聞かばやとて、勢田の方へ落ち行くほどに、今井四郎兼平も、八百余騎で勢田を固めたりけるが、わづかに五十騎ばかりに討ちなされ、旗を巻かせて、主のおぼつかなきに、みやこへとつてかへすほどに、大津の打出の浜にて木曾殿に行きあひ奉る。互ひに中一町ばかりよりそ

れと見知つて、主従駒をはやめて寄りあうたり。木曾殿、今井が手をとつてのたまひけるは、「義仲、六条河原でいかにもなるべかりつれども、汝がゆくへの恋しさに、多くの敵の中をかけ割つて、これまでは逃れたるなり。」今井四郎、「御諚まことにかたじけなう候ふ。兼平も勢田で打ち死につかまつるべう候ひつれども、御ゆくへのおぼつかなさに、これまでまいつて候ふ。」とぞ申しける。木曾殿、「契りはいまだ朽ちせざりけり。義仲が勢は、敵に押しへだてられ、山林に馳せ散つてこの辺にもあるらんぞ。汝が巻かせて持たせたる旗あげさせよ。」とのたまへば、今井が旗をさしあげたり。京より落つる勢ともなく、勢田より落つる者ともなく、今井が旗を見つけて三百余騎ぞ馳せ集る。木曾大に悦んで、「この勢あらば、などか最後のいくさせざるべき。ここにしぐらうで見ゆるは、誰が手やらん。」「甲斐の一条次郎殿とこそ承り候へ。」「勢はいくらほどあるやらん。」「六千余騎とこそ聞こえ候へ。」「さてはよい敵ござんなれ。」「おなじう死なば、よかろう敵にかけあうて、大勢の中でこそ打ち死にをもせめ。」とて、まつさきにこそすすみけれ。

◉参考2

伏線という意味では、武将としての奮戦ぶり（巻七「倶梨迦羅落」）や、都人に嘲笑されるほどに洗練さに欠けた振る舞い（巻八「猫間」↓「参考3」参照）、さらには、周囲の空気が読めない稚気（巻八「鼓判官」↓「参考4」参照）といった具合に、ここまで多角的に義仲の姿を描いてきたことも、その最期に向けて、緻密な計算のもとに成り立っていたものだったのかもしれない。武力に秀で、勇ましい武将でありながらも、一方では、理想的な武将像からかけ離れた性格も与えられてきた他章段における描写を押さえた上で「木曾の最期」の章段の意味づけを行いたいところである。

巻七「倶利迦羅落」

さるほどに、源平両方陣をあはす。陣のあはひわづかに三町ばかりによせあはせたり。源氏もすゝまず、平家もすゝまず、勢兵十五騎、楯の面にすゝませて、十五騎がうは矢の鏑を平家の陣へぞ射入たる。平家、又はかり事とも知らず、十五騎を出いて、十五の鏑を射返す。源氏卅騎を出いて射さすれば、平家卅騎を出いて、卅の鏑を射かへす。五十騎を出せば五十騎を出しあはせ、百騎を出せば百騎を出しあはせ、両方百騎づゝ陣の面にすゝんだり。互に勝負をせんとはやりけれ共、源氏の方よりせいして勝負をせさせず。源氏は、か様にして日を暮らし、平家の大勢を倶梨迦羅谷へ追落さふどたばかりけるを、すこしもさとらずして、ともにあひしらひ、日を暮らすこそはかなけれ。

次第にくらふなりければ、北・南よりまはッつる搦手の勢一万余騎、倶梨迦羅の堂の辺にまはりあひ、えびらのほうだて打たゝき、時をどッとぞつくりける。平家うしろをかへり見ければ、白旗雲のごとくさしあげたり。「此山は四方巌石であんなれば、搦手よもまはらじと思つるに、こはいかに」とてさはぎあへり。去程に、木曾殿、大手より時の声をぞあはせ給ふ。松長の柳原・ぐみの木林に一万余騎ひかへたりける勢も、今井四郎が六千余騎で日宮林にありけるも、同く時をぞつくりける。前後四万騎がおめく声、山も川もたゞ一度にくづゝとこそ聞えけれ。案のごとく、平家、次第にくらふはなる、前後より敵は攻め来る。「きたなしや、かへせ、かへせ」といふやからおほかりけれ共、大勢の傾たちぬるは、左右なふとッてかへす事かたければ、倶梨迦羅が谷へ、われ先にとぞ落しける。まッさきにすゝむだる者が見えねば、此谷の底に道のあるにこそとて、親落せば子も落し、兄落せば弟もつゞく。主落せば家子・郎等落しけり。馬には人、ひとには馬、

落かさなり〳〵、さばかり深き谷一つを、平家の勢七万余騎でぞうめたりける。巌泉血を流し、死骸岳をなせり。されば其谷のほとりには、矢の穴、刀の疵残ッて今にありとぞ承はる。平家の方には、むねとたのまれたりける上総大夫判官忠綱・飛騨大夫判官景高・河内判官秀国も、此谷にうづもれて失せにけり。備中国住人瀬尾太郎兼康といふ聞ゆる大力も、そこにて加賀国住人蔵光次郎成澄が手にかゝッていけどりにせらる。越前国火打が城にてかへり忠したりける平泉寺の長吏斎明威儀師もとらはれぬ。木曾殿、「あまりにくきに、其法師をばまづきれ」とて、きられにけり。平氏の大将維盛・通盛、けうの命生て、加賀の国へ引退く。七万余騎がなかより、わづかに二千余騎ぞのがれたりける。

明る十二日、奥の秀衡がもとより、木曾殿へ竜蹄二疋奉る。一疋はくろ月毛、一疋は連銭葦毛なり。やがて是に鏡鞍をいて、白山の社へ神馬にたてられけり。木曾殿の給ひけるは、「今は思ふ事なし。但十郎蔵人殿の志保のいくさこそおぼつかなけれ。いざゆいて見む」とて、四万余騎、馬や人をすぐッて二万余騎で馳むかふ。ひゞの湊をわたさんとするに、折節塩みちて、ふかさ、あささを知らざりければ、鞍をき馬十疋ばかり追ひ入たり。鞍爪ひたる程に、相違なくむかひの岸へ着にけり。「浅かりけるぞや。わたせや」とて、二万余騎の大勢、皆打入てわたしけり。案のごとく、十郎蔵人行家、散さにかけなされひき退いて、馬の息休る処に、木曾殿、「さればこそ」とて、荒手二万余騎入かへて、平家三万余騎が中へおめいてかけ入、もみにもふで、火出るほどにぞ攻たりける。平家の兵共、しばしさゝへて防きけれ共、こらへずして、そこをも遂に攻落さる。平家の方には、大将軍三河守知教討たれ給ひぬ。是は入道相国の末子也。侍共おほくほろびにけり。木曾殿は、志保の山打こえて、能登の小田中、新王の塚の前に陣をとる。

◉参考3 実

巻八「猫間」

泰定都へのぼり院参して、御坪の内にして、関東のやうつぶさに奏聞しければ、法皇も御感ありけり。公卿・殿上人も、皆ゑつぼにいり給へり。兵衛佐はかうこそゆゝしくおはしけるに、木曾の左馬頭、都の守護してありけるが、たちゐの振舞の無骨さ、物言ふ詞つゞきのかたくなる事、かぎりなし。ことはりかな、二歳より信濃国木曾といふ山里に三十まで住みなれたりしかば、争か知るべき。

或時、猫間中納言光高卿といふ人、木曾にの給ひあはすべき事あッておはしたりけり。郎等ども、「猫間殿の見参にいり、申べき事ありとて入らせ給ひて候」と申ければ、木曾大にわらッて、「猫は人に見参するか」。「是は猫間の中納言殿と申公卿でわたらせ給ふ。御宿所の名とおぼえ候」と申ければ、木曾、「さらば」とて対面す。猶も猫間殿とはえ言はで、「猫殿のまれ〳〵わゐたるに、物よそへ」とぞの給ひける。中納言、是を聞いて、「たゞ今あるべうもなし」との給へば、「いかゞ、けどきにわゐたるに、さてはあるべき」。何もあたらしき物を無塩と言ふと心えて、「こゝにぶゑんのひらたけあり。とう〳〵」と急がす。根井小野太陪膳す。田舎合子のきはめて大にくぼかりけるに、飯うづたかくよそゐ、御菜三種して、ひらたけのしるでまいらせたり。木曾がまへにもおなじ体にてすへたりけり。木曾箸とッて食す。猫間殿は、合子のいぶせさに召さざりければ、「それは義仲が精進合子ぞ」。中納言召さでもさすがあしかるべければ、箸とッて召すよししけり。木曾是を見て、「猫殿は小食におはしけるや。きこゆる猫おろし給ひたり。かい給へ」とぞせめたりける。中納言、かやうの事に興さめて、のたまひあはすべきことも一言も出さず、驀(ばく)急ぎ帰られけり。

木曾は、「官加階したるものの、直垂で出仕せん事あるべうもなかりけり」とて、はじめて布衣とり装束く。烏帽子ぎはより指貫のすそまで、まことにかたくななり。されども車にこがみ乗んぬ。鎧とッて着、矢かき負ひ、弓もッて馬に乗ッたるには、似も似ずわろかりけり。牛車は、八島の大臣殿の牛車なり。牛飼もそなりけり。世にしたがふ習ひなれば、とらはれてつかはれけれども、あまりの目ざましさに、すゑかうたる牛の逸物なるが、門出づる時、ひとすはへあてたらうに、なじかはよかるべき。飛で出づるに、木曾、車のうちにて、のけにたふれぬ。蝶のはねをひろげたるやうに、左右の袖をひろげておきむ〳〵とすれども、なじかはおきらるべき。木曾、牛飼とはえ言はで、「やれ子牛こでい、やれこうしこでい」と言ひければ、車をやれと言ふと心えて、五六町こそあがゝせたれ。今井の四郎兼平、鞭あぶみをあはせて追ッつゐて、「いかに御車をばかうはつかまつるぞ」としかりければ、「御牛の鼻がこはう候」とぞのべたりける。牛飼なかなをりせんとや思ひけん、「それに候手がたにとりつかせ給へ」と申ければ、木曾手がたにむゝずととりつゐて、「あッぱれ支度や、是は牛こでいがはからひか。殿のやうか」とぞとふたりける。さて院御所に参りつゐて、車かけはづさせ、うしろよりをりむとしければ、京者の雑色につかはれけるが、「車には、めされ候時こそうしろよりめされ候へ。をりさせ給ふには、まへよりこそをりさせ給へ」と申けれども、「いかで車であらむがらに、すどをりをばすべき」とて、つゐにうしろよりをりてゝげり。其外おかしき事どもおほかりけれども、おそれて是を申さず。

◉参考4

巻八「鼓判官」

凡京中には源氏みち〳〵て、在さ所さに入りどりおほし。賀茂・八幡の御領とも言はず、青田を刈てま草にす。人の倉をうちあけて物をとり、持ッて通る物をうばひとり、衣裳をはぎとる。「平家の都にはせし時は、六波羅殿とて、たゞおほかたおそろしかりしばかり也。衣裳をはぐまではなかりし物を。平家に源氏かへおとりしたり」とぞ人申ける。

木曾の左馬頭のもとへ、法皇より御使あり。「狼藉しづめよ」と仰下さる。御使は、壱岐守朝親が子に、壱岐判官朝泰といふ者也。天下にすぐれたる鼓の上手でありければ、時の人、鼓判官とぞ申ける。木曾、対面して、先御返事をば申さで、「抑わとのを鼓判官と言ふは、よろづの人にうたれたうたか、はられたうたか」とぞとふたりける。朝泰、返事に及ばず、院御所に帰り参ッて、「義仲おこの者で候。只今朝敵になり候なんず。急ぎ追討せさせ給へ」と申ければ、法皇、さらばしかるべき武士にも仰付られずして、山の座主・寺の長吏に仰られて、山・三井寺の悪僧どもを召されけり。公卿・殿上人の召されける勢と申は、むかへつぶて・いんぢ、いふかひなき辻冠者原・乞食法師どもなりけり。

木曾左馬頭、院の御気色あしうなると聞えしかば、はじめは木曾にしたがふたりける五畿内の兵ども、皆そむゐて院方へ参る。信濃源氏、村上の三郎判官代、是も木曾をそむゐて法皇へ参りけり。今井四郎申けるは、「是こそ以外の御大事で候へ。さればとて十善帝王にむかいまいらせて、争か御合戦候べき。甲を脱ぎ、弓をはづゐて降人にまいらせ給へ」と申せば、木曾大にいかッて、「われ信濃を出し時、麻績・会田のいくさよりはじめて、北国には砥浪山・黒坂・篠原、西国には福立寺縄手・さゝのせまり・板倉が城を責しかども、いまだ敵にうしろを見せず。たとひ〳〵十善帝王にてましますとも、甲を脱ぎ弓をはづいて、降人にはえこそ参るまじけれ。たとへば都の守護してあらむものが、馬一疋づゝかうて乗らざるべきか。いくらもある田どもからせ

てま草にせんを、あながちに法皇のとがめ給ふべき様やある。兵粮米もなければ、冠者原共がかたほとりにつゐて、時さ入りどりせんは、何かあながちひが事ならむ。大臣家や宮さの御所へも参らばこそ僻事ならめ。是は鼓判官が凶害とおぼゆるぞ。其鼓め打破て捨よ。今度は義仲が最後の軍にてあらむずるぞ。頼朝が帰聞かむ処もあり、軍ようせよ者ども」とて、うッたちけり。北国の勢ども皆落下って、纔に六七千騎ぞありける。我軍の吉例なればとて、七手につくる。先樋口次郎兼光、二千騎で新熊野のかたへ搦手にさしつかはす。残り六手は、をの〳〵がゐたらむずる条里小路より川原へ出でて、七条河原にてひとつになれとあひづを定めて出立けり。

軍は十一月十九日の朝なり。院御所法住寺殿にも、軍兵二万余人参りこもりたるよし聞えけり。御方のかさじるしには、松の葉をぞ付たりける。木曾、法住寺殿の西門にをしよせて見れば、鼓判官朝泰、軍の行事うけ給ッて、赤地の錦の直垂に、鎧はわざと着ざりけり。甲斗ぞ着たりける。甲には四天をかいてをしたりけり。御所の西の築墻の上にのぼって立ッたりけるが、片手にはほこを持ち、片手には金剛鈴を持ッて、金剛鈴を打振〳〵、時さは舞おりもありけり。若き公卿・殿上人、「風情なし、朝泰には天狗ついたり」とぞわらはれける。大音声をあげて、「むかしは官旨をむかッてよみければ、枯たる草木も花さき、みなり、悪鬼・悪神も随ひけり。末代ならむがらに、いかんが十善帝王にむかひまいらせて弓をばひくべき。汝等がはなたん矢は、返ッて身にあたるべし。抜かむ太刀は、身をきるべし」なンどとのゝしりければ、木曾、「さな言はせそ」とて、時をどッとつくる。

さる程に、搦手にさしつかはしたる樋口次郎兼光、新熊野の方より、時のこゑをぞあはせたり。鏑のなかに火を入れて、法住寺殿の御所に射立てたりければ、おりふし風ははげしゝ、猛火天にもえあがッて、ほのをは虚空にひまもなし。いくさの行事朝泰は、人よりさきに落にけり。行事が落つるうへは、二万余人の官軍ども、我さきにとぞ落ゆきける。あまりにあはてさはひで、弓とる者は矢を知らず、矢をとる者は弓を知らず、或は長刀さかさまについて、我足つきつらぬく者もあり。或は弓のはず物にかけて、えはづさで捨てにぐる者もあり。七条がすゑは接津国源氏のかためたりけるが、七条を西へ落ちて行。かねて軍以前より、「落人のあらむずるをば、用意してうち殺せ」と、御所より披露せられたりければ、在洛の者共、屋ねいに楯をつき、おそへの石をとりあつめて待懸たるところに、摂津国源氏の落ちけるを、「あはや落人よ」とて、石をひろいかけ、さん〴〵に打ければ、「これは院がたぞ、あやまち仕るな」と言へども、「さな言はせそ。院宣であるに、たゞ打殺せ〳〵」とて打間、或は馬を捨てて、はう〳〵にぐるものもあり、或はうち殺さるゝもありけり。八条がすゑは山僧かためたりけるが、恥あるものは討死し、つれなきものは落ちぞゆく。

主水正親成、薄青の狩衣のしたに、萌黄威の腹巻を着て、白葦毛なる馬に乗り、河原をのぼりに落てゆく。今井四郎兼平追ッかゝッて、しや頸の骨を射て射落す。清大外記頼成が子なりけり。「明行道の博士、甲冑をよろふ事、しかるべからず」とぞ人申ける。木曾を背て院方へ参ッたる信濃源氏、村上三郎判官代も討たれけり。是をはじめて、院方には近江中将為清・越前守信行も射殺されて頸とられぬ。伯耆守光長、子息判官光経父子共に討たれぬ。按察大納言資方卿の孫、播磨少将雅方も、鎧に立烏帽子で軍の陣へ出でられたりけるが、樋口次郎に生どりにせられ給ぬ。天台座主明雲大僧正、寺の長吏円慶法親王も御所に参りこもらせ給ひたりけるが、黒煙すでにをしかけければ、御馬に召して急ぎ川原へ出でさせ給ふ。武士どもさむ〴〵に射たてまつる。明雲大僧正・円慶法親王も、御馬より射落されて、御頸とられさ

せ給ひけり。

豊後の国司刑部卿三位頼資卿も御所に参りこもられたりけるが、火は既にをしかけたり。急ぎ川原へ逃出給。武士の下部どもに衣裳皆はぎとられ、まッぱだかで立たれたり。十一月十九日のあしたなれば、河原の風さこそすさまじかりけめ。三位こじうとに越前法眼性意といふ僧あり。其中間法師、軍見んとて河原へ出でたりけるが、三位のはだかで立たれたるに見あふて、「あなあさまし」とて、はしりより、此法師は白小袖二に衣着たりけるが、さらば小袖をも脱いで着せたてまつれかし、さはなくて、衣をひゝ脱いでなげかけたり。短き衣うつほにほうかぶッて、帯もせず、うしろさこそ見ぐるしかりけめ。白衣なる法師ともに具しておはしけるが、さらば急ぎもあゆみ給はで、あそこ爰に立とゞまり、「あれはたが家ぞ。是は何者が宿所ぞ。こゝはいづくぞ」と道すがらとはれければ、見る人みな手をたゝゐてわらひあへり。

法皇は御輿に召して他所へ御幸なる。武士どもさん〴〵に射たてまつる。豊後少将宗長、木蘭地の直垂に折烏帽子で供奉せられたりけるが、「是は法皇の御幸ぞ、あやまちつかまつるな」との給へば、兵ども皆馬よりをりてかしこまる。「何者ぞ」と御尋ありければ、「信濃国住人、矢島の四郎行綱」と名のり申。鏡御輿に手かけまいらせ、五条内裏にをしこめたてまッて、きびしう守護し奉る。

主上は池に船をうかべて召されけり。武士どもしきりに矢をまいらせければ、七条侍従信清・紀伊守教光、御舟に候はれけるが、「是はうちのわたらせ給ふぞ、あやまち仕るな」とのたまへば、兵ども皆馬よりをりてかしこまる。閑院殿へ行幸なし奉る。行幸の儀式のあさまッしさ、申も中〳〵をろかなり。

学習の手引き

一 ※次の傍線部の敬語に注意しながら、口語訳してみよう。

①今井四郎申しけるは、（286・12）
②御馬も弱り候はず。（286・13）
③いかなる高名候へども、（287・8）
④粟津の松原へぞ駆け給ふ。（287・14）

【解答例】

①今井四郎が申しあげたことには、
②お馬も弱ってはおりません。
③どのような高名がございましょうとも、
④粟津の松原へ（馬を）お駆けになられた。

〔解説〕

①「申す」は「言ふ」の謙譲語で、「申しあげる」と訳す。語り手から義仲への敬意を示す。

②「候ふ」は丁寧の補助動詞、「……です」「……ます」の意で、直前にある動詞「弱る」に敬意を添える語である。会話主である今井から義仲への敬意を示す。

③「候ふ」は、②とは異なり、丁寧の本動詞である。「あり」という動詞の意味にあわせて、「……です」「……ます」の敬意の意もつ。今井から義仲への敬意を示す。

④「給ふ」は尊敬の補助動詞。直前の「駆く」という動作の下に付き、「……なさる」という敬意の意を添える。語り手から義仲への敬意を示す。

二 ※「日ごろは何とも覚えぬ鎧が今日は重うなつたるぞや。」（286・11）とあるが、なぜ鎧が重く感じられたのか、説明してみよう。

【解答例】

敗北を目の前にして、さすがの義仲も弱気になったため。

〔解説〕

大将軍の上等な鎧は三〇キロ、付属の武具と甲の完全装備となれば、約五〇キロにも及ぶ重さとなり、普通に考えれば、十分重さを感じるはずではある。しかし、勝利している状況では、昂揚感から五〇キロの重さすら感じずにいられるのであろう。それが一転して敗北となると、気の弱さから一気に疲れが出て、五〇キロの重さがそれ以上の重さとなって感じられるようになるのではないだろうか。気持ちによる人の感覚の変化を巧みに表現したひと言といえよう。

三 ※「御身もいまだ疲れさせ給はず。」（286・12）、「御身は疲れさせ給ひて候ふ。」（287・9）と言った兼平の気持ちを説明してみよう。

【解答例】

どちらも、義仲に立派に自害をしてもらい、名誉の最期を遂げさせたいという気持ちから発せられた言葉であるが、前者では気弱になっている義仲を励まそうという思い、後者ではともに戦い討ち死にしようとする義仲の願いを断念させなければならないという思いがそれぞれ強くはたらいている。

〔解説〕

前者は、鎧が重くなったと弱音を吐く義仲を励ますことで、粟津の松原で自害するまで気力を保ってもらいたいという思いから出た言葉。後者は、今井とともに戦い、同じ所で討ち死にしようと言う義仲に、「疲れているのだから」と言うことで、戦うことを放棄させ、ただ粟津の松原を目指してそこで自害し、名誉の最期を遂げてもらいたいと説得している。

研究・発展

◉参考資料1

『平家物語』といえば、「諸行無常」「無常観」といわれる。しかし、その「無常観」とはどういうものなのだろうか。わかりやすく簡単にまとめているものを掲載する。

「無常」とは、存在するものが「常」で「無」い、同じ状態にとどまりえないことをいう。「観」は、観察の「観」で、観ることである。この世にあるあらゆる有機物・無機物、建造物や動植物、人の心まで、すべて瞬時たりとも一定の形を維持することがないと、洞察し認識するのが無常観である。いわば、世界認識の仕方のひとつといえる。

よく「無常感」と書く人がいるが、これは誤りで、悲しいとかうれしいとかいう感情の「感」を書いたのでは、冷静に物事を観る意から遠い。もっとも、かつて意図的に『無常感の文学』という書名で、本を書いた研究者がいた（小林智昭）。日本人は、仏教を生んだインド人のような哲学的思考が苦手で、抒情に流れやすく、わが国の仏教に影響された作品は「無常感」の文学という方がふさわしい、との立場からであった。感情の「感」を用いる場合は、このように意識的でなければなるまい。

では、無常とは、具体的にどのようなことをいうのであろうか。たとえば、建築間もない立派な建造物があったとする。壁面はきれいで、何の瑕疵もない。しかし、年数がたてば汚れ、やがて亀裂が入る。が、その亀裂は、突然、入るものではない。人間の目では捉えられない微細な変化が、日常、刻々と進行していて、その結果がやっと目に入る段階に達したに過ぎない。人の感知できるものは、ほんのわずか。知らぬ間に、刻々の変化が世界中、あらゆる所で生じている。そういう現実が無常の実相というものなのである。

母親の胎内では、精子と卵子とが絶えず動き回り、ひとつの出会いを果たすと細胞が次々と増え続け、ついに子供の誕生となる。これも無常の結果である。無論、結果は結果で終わることなく、次の変化へと連続していく。細胞は成長するだけではない。個々、衰退し死滅する段階がある。人の身に総体としてそれが起こる時、すなわち老齢化であり、死である。死体には土と化す要素もあれば、気化する要素もあろう。いずれにしても、もとの形をとどめることはなく次の何かに変成していき、遠く精子や卵子の形成にもどこかで結びつく。人の生涯も、無常の法則に貫かれているのである。

生まれることも無常だという認識は、社会的にあまり一般化されていない。しかし、仏教の根本的な考え方はそうである。それゆえ、子供の誕生も、人の肉体が他のものに生まれ変わることも、無常の一斑ということになる。『徒然草』の四季の変遷を論じた章段に、「木の葉の落つるも、まづ落ちて芽ぐむにあらず。下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり」という一節がある（第百五十五段）。木の内部に新たな生命が芽生えふくらみ、古い葉を追い落とすのが、秋から冬へ移り行く実態で、ひとつの季節のなかに次の季節の気が生育・増幅して四季の運行を推し進めていると説く。要するに、「生」も無常の側面から捉えているわけで、それは、前後の文面に、「病をうけ、子うみ、死ぬる事」とか、「生・住（存続の意）・異・滅の移り変る」、「生・老・病・死の移り来たる事」といった句が見えることでも明らかである。

人の心も無常。これも『徒然草』の、「心にうつりゆくよしなしごと」（序段）と自らの心の動きを見つめ、「心は必ず事に触れて来たる」（第百五十七段）と分析し、「我らが心に念念のほしきままに来たり浮かぶも、心といふもののなきにやあらむ」（第二百三十五段）と、心の

実体の存在すら疑っている文言に接してみれば、兼好が、流動的なあやうい心の本質、無常の本質を深く認識していたと知られよう。

『平家物語』の冒頭、「諸行無常の響きあり」の「諸行」の「行」は、存在を意味する、有機物・無機物を含めた概念である。「祇園精舎の鐘」は、精舎内の無常院にある無常堂の、四隅の屋根の突端から吊り下げられた、胴の細い鼓の形をした「玻璃」つまり水晶製の鐘をいう。それらの鐘が、堂内に収容されていた病の僧が息を引き取る際に自然に鳴り出し、悟りをすすめるかのように、「諸行無常　是生滅法　生滅滅已　寂滅為楽」（諸行は無常　是生滅の法　生滅の滅し已れば　寂滅にして楽為り）と聞こえたと伝わる。悟りは、無常の現実をそうと認識し、それにとらわれることを自ら断つことによって開かれると説くのが仏教であった。

「沙羅双樹」は、臨終を迎えた釈迦が横たわっていた床の東西南北に二本ずつ対になって立っていた沙羅の樹のことで、入滅と同時に合体し白色に変じたという。そのことが「盛者必衰のことわりをあらはす」と、『平家』の本文は続いていた。しかし考えてみれば、釈迦は決して「盛者」ではなかった。むしろ、一国の王子たる地位を捨て、言わば「盛者」となることを拒否して修行に出た身であった。釈迦の入滅を語る時は、「盛者必衰」より「生者必滅」の句につなげる場合が多い。生あるものは、必ず消えうせるという、この句の方が、意味上の脈絡からしてふさわしかろう。にもかかわらず、「盛者必衰」をあえて選んだ行為には、まさに「盛者」であった清盛に結びつけようとする意図が潜んでいる。かくして、無常観を掲げて始まった『平家物語』は、過去の具体的な歴史語りへと歩を進めることになる。

『平家物語を知る事典』日下力・鈴木彰・出口久徳（二〇〇五年・東京堂出版）

◉参考資料2

『平家物語』の作者を示す根拠として長年扱われてきた『徒然草』の二二六段を掲載する。

後鳥羽院の御時、信濃前司行長、稽古の誉ありけるが、楽府の御論義の番に召されて、七徳の舞を二つ忘れたりければ、五徳の冠者と異名をつきにけるを、心憂き事にして、学問を捨てて遁世したりけるを、慈鎮和尚、一芸あるものをば下部までも召し置きて、不便にせさせ給ひければ、この信濃入道を扶持し給ひけり。

この行長入道、平家物語を作りて、生仏といひける盲目に教へて語らせけり。さて、山門のことを、ことにゆゆしく書けり。九郎判官の事はくはしく知りて書き載せたり。蒲冠者の事は、よく知らざりけるにや、多くのことどもを記しもらせり。武士の事、弓馬のわざは、生仏、東国のものにて、武士に問ひ聞きて書かせけり。かの生仏が生れつきの声を、今の琵琶法師は学びたるなり。

『方丈記　徒然草　正法眼蔵随聞記　歎異抄』（新編日本古典文学全集）神田秀夫・安良岡康作・永積安明（一九九五年・小学館）

参考文献

◉教材研究・授業研究のために

- 『平家物語』石母田正（一九五七年・岩波新書）
- 『平家物語の基礎的研究』渥美かをる（一九六二年・三省堂）
- 『平家物語必携』市古貞次編（一九六七年・學燈社）
- 『平家物語全注釈』（日本古典評釈・全注釈叢書）冨倉徳次郎（一九六六～六七年・角川書店）
- 『平家物語研究事典』市古貞次編（一九七八年・明治書院）
- 『平家物語の虚構と真実』上・下（塙新書）上横手雅敬（一九八五

年・塙書房）

■『平家物語』（新潮古典文学アルバム）牧野和夫・小川国夫（一九九〇年・新潮社）

■『平家物語』（岩波セミナーブックス、古典講読シリーズ）梶原正昭（一九九二年・岩波書店）

■「祇園精舎覚書―注釈、唱導、説話集」黒田彰（『中世説話の文学史的環境〈続〉』所収　一九九五年・和泉書院）

■『鹿の谷事件―平家物語鑑賞』梶原正昭（一九九七年・武蔵野書院）

■『平家物語大事典』大津雄一・日下力・佐伯真一・櫻井陽子編（二〇一〇年・東京書籍）

■『延慶本平家物語全注釈』（1〜9）延慶本平家物語注釈の会（二〇〇五〜一一年・汲古書院）※以降継続刊行中

■「林原美術館『平家物語絵巻』のすべて」小松茂美（『平家物語絵巻』巻第十二）（一九九二年・中央公論社）

■「林原美術館蔵『平家物語絵巻』についての考察―詞書の底本の確定と絵巻の成立―」櫻井陽子（『富士フェニックス論叢1』一九九三年・富士フェニックス短期大学）

■「頼朝の征夷大将軍任官をめぐって―『三槐荒涼抜書要』の翻刻と紹介―」櫻井陽子（『明月記研究　第9号』二〇〇四年・明月記研究会）

◉生徒のためのブックガイド

■『源平争乱と平家物語』（角川選書）上横手雅敬（二〇〇一年・角川書店）

■『平家物語を知る事典』日下力・鈴木彰・出口久徳（二〇〇五年・東京堂出版）

■『平家物語転読　何を語り継ごうとしたのか』日下力（二〇〇六年・笠間書院）

■『平家物語の死生学』上・下（新典社新書）佐伯雅子（二〇〇八年・新典社）

■『琵琶法師―〈異界〉を語る人びと』兵藤裕己（二〇〇九年・岩波新書）

■『平家物語と不思議』（新大人文選書）鈴木孝庸・楊夫高（二〇〇九年・高志書院）

■『図説　地図とあらすじでわかる！　平清盛と平家物語』日下力（二〇一一年・青春出版社）

■『図説　平清盛がよくわかる！　厳島神社と平家納経』日下力（二〇一二年・青春出版社）

■『『平家物語』入門』山下宏明（二〇一二年・笠間書院）

（田中尚子）